

# 成瀬記念館

成瀬仁蔵没後100年記念号

2019

No.34

日本女子大学成瀬記念館

# 哀惜の1919年

2019年1月15日(火) - 3月2日(土)

一 成瀬仁蔵・広岡浅子・森村市左衛門  
松浦政泰・平野浜 没後100年展

創立者成瀬をはじめ、本学の創立から草創期を支え、1919年に相次いで亡くなった評議員広岡浅子・森村市左衛門、教授松浦政泰・平野浜を紹介する展示を行った。成瀬の永眠前後の様子がわかる新資料も展示した。



哀惜の1919年  
没後100年展

松浦政泰  
1848-1919

創立者一人  
広岡浅子  
1841-1919

創立者  
成瀬仁蔵  
1847-1919

平野浜  
1851-1919

森村市左衛門  
1811-1919

2019年1月15日(火)~3月2日(土)  
開館時間 10:00-16:30 (土曜日は12:00まで)  
休館日 日・月曜日、祝日  
日本女子大学成瀬記念館

展示ポスター



広岡浅子の歌集  
『草詠』の  
翻刻・口語訳・解説

高野晴代監修  
『広岡浅子「草詠」』  
翰林書房

没後  
100年記念  
刊行物



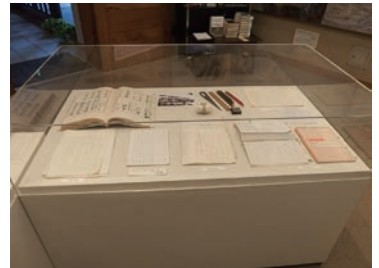
吉良芳恵監修 『成瀬仁蔵関係書簡集 1』  
日本女子大学成瀬記念館



# 青木生子追悼展

2018年12月18日(火)  
~20日(木)、26日(水)

2018年11月14日に逝去された青木生子先生(第9代学長・理事長)の追悼展示を行った。青木先生の著作や写真、自筆原稿、洋服や身の回りの品々を展示した。



1906

豊明図書館兼講堂落成式



文京区指定有形文化財  
**成瀬記念講堂**  
耐震補強改修工事完了

2017 (平成 29) 年 6 月 ~ 2018 年 8 月

1923

関東大震災



1961

補強修理工事完了  
名称変更「成瀬記念講堂」



1974

文京区指定有形文化財



2018

## ゆりの木の思い出

護国寺に通ずる本学裏門から少しばかり坂上りの処に、ゆりの木は亭々とそびえていた。東京都内であって、これほどのゆりの木の大本は幾本もないと聞いたことがある。

一九一（明治四四）年、九回生の手によって植えられた記念樹は、様々な歴史の変遷をみてきたにちがいない。

一九二八年の女性文化展覧会  
のおりに当時の生活のモデルハウスとして建て

られた家屋は「ゆりの木の家」と呼ば

れ、長く学生らの課外活動に使われた。木の近くに

あつた香雪化学館で

の本学化学教育の歩み

は、辻キヨ先生らによつ

て『ゆりの木の下で』と題

された冊子にまとめられた。

かつて図書館の最上階に文学部史学科の研究室があり、ゆりの木の見える角部屋は史学科の演習室となっていた。初夏に清楚な小さな白い花が咲くと『ゆりの木の花が咲いたわ』と学生たちの間に和んだ雰囲気ひろがった。卒業生によびかけてつくった日本女子大学平塚らいてう研究会もこの角部屋を使わせていただいた。

豊かなゆりの木の木陰が校庭にいつまでも残って欲しかった。

中島 邦（四六回生、本学名誉教授）



# 成瀬記念館 2019

No.34

目次

表紙 / カット・武藤良子

## 口絵

哀惜の1919年―成瀬仁蔵・広岡浅子・

森村市左衛門・松浦政泰・平野浜 没後100年展

青木生子追悼展／成瀬記念講堂 耐震補強改修工事完了

ゆりの木の思い出

## 巻頭言

成瀬記念館と史料の保存 …………… 大場 昌子 …… 6

## 随想

成瀬没後百年の年に想う…………… 白井 堯子 …… 8

「成瀬仁蔵先生自筆の日記等」における

脱酸性化処理及びその他の保存処置…………… 横島 文夫 …… 14

レンガの会…………… 篠田 明美 …… 11

## 特別寄稿

現代に生きる成瀬仁蔵

―その女性観・教育観・宗教観―…………… 片桐 芳雄 …… 18

成瀬仁蔵関係書簡の翻刻を担当して…………… 北野 剛 …… 27

## 資料紹介

成瀬の病床を訪れた人々―「日誌」より…………… 大門 泰子 …… 33

## 報告

成瀬記念講堂の保存再生とオーセンティシティ

―耐震補強改修工事完了に寄せて…………… 是澤 紀子 …… 50

## 新刊紹介

高野晴代監修『広岡浅子「草詠」』…………… 後藤 祥子 …… 62

## 未発表資料40

成瀬仁蔵講話 1・2

大学部二、三年にて―大正三年十一月二十五日―…………… 70

## 未発表資料41

WILPF 関連資料2件（クリスタル・マクミランから成瀬へ）

ジェーン・アダムスから上代へ…………… 98

二〇一八年度展示の記録（成瀬記念館／西生田記念室）…………… 102

二〇一八年度活動の記録…………… 99

## 成瀬記念館と史料の保存

日本女子大学学長  
成瀬記念館館長

大場 昌子

成瀬記念館の企画展を見るたびに、毎回展示されている史料のバラエティーの豊かさに感銘を受けます。記念館に寄せられる多種多様な史料の整理、記録、保管が成瀬記念館の主たる業務であることは言うまでもありませんが、創立者成瀬仁蔵の没後一〇〇年目にあたる今年には、本学の歴史を語る貴重な史料が成瀬先生亡き後一世紀の間、守られ、受け継がれている事実の重みを改めて考えさせられます。

今年四月一五日、フランス、パリのノートルダム大聖堂で大規模な火災が発生したというニュースが世界中を駆け巡りました。一六三年から建設が始まり、最終的には一四世紀半ばに完成したとされるノートルダム大聖堂は、着工以来八五〇年余という想像を絶する長きにわたり、破壊や略奪、修復を繰り返しながら信仰の核として、またパリ、さらにはフランスを象徴する建築として、世界中の人々が親しんできました。日本でも、一九四九年一月二六日に法隆寺金堂で火災が発生し、これをきっかけとして一九五五年に、一月二六日を文化財防火デーとすることが定められました。

普段私たちが、そこに当たり前のように存在するものと認識している歴史的建造物や内部で所蔵されている文化財は、決して当たり前ではなく、気の遠くなるような年月の間、その時代の人々がたゆまず守り続けてきた結果として現在も在るということを、ノートルダム大聖堂を包む無情の火が物語っています。

本学は、日本における女子高等教育機関の先駆けとして、日本の教育史においても重要な意義をもつ史料を所蔵しています。こうした史料が成瀬先生の没後、次の一〇〇年間も変わらず受け継がれていくよう私たちも心構えを新たにしたいと思います。

二〇一九年六月



## 成瀬没後百年の年に想う

白井 堯子

今年二〇一九年三月四日、「成瀬先生没後百年記念式」が成瀬記念講堂で盛大に行われた。私は講堂の片隅で、日本女子大学の創立と発展のために成瀬が注いだ情熱、そして成瀬を助けた多くの人びとの友情と協力を改めて想いを馳せたのである。

私が成瀬の名前を知ったのは、中学二年生の時だった。中学生としての生活を和歌山県で始めた私は、父親が東京へ転勤になったので、二年生から当時目白にあった日本女子大学附属中学校に入学した（戦後間もない時期だったので二年生の編入試験も行われていた）。豊明小学校からの進学者にはもちろんのこと、中

学一年生からの入学者に対しては、学校側は創立者成瀬についての教育を系統立って行ったのであろうが、私のように途中から入った生徒にとっては、正直言って、創立者を何となく神の如く崇拜する学校の雰囲気にはあまり馴染めなかった。ただ一つだけ私の心を捕えたものがあつた。それは中学の教員室に掲げられていた「人として、婦人として、国民として」という言葉である。しかし、それが成瀬の言葉であり、日本女子大学の根本的な教育方針だと知ったのは、ずっと後になってからのことであつた。

高等学校の生活は、西生田ではなく、当時目白キャンパスの中に設立された目白校で過ごした。その頃になると、成瀬についての講話を聞くことが多くなり、一番印象に残ったのは、成瀬の近くで仕事をなさった仁科節先生の静かな、しかし自信に

満ちた成瀬論であつた。その後私は、さまざまな事情で、慶應義塾大学の英文科で学び、大学教員として幾つかの学校で教えながら、結婚、出産、育児に追われる生活を過ごし、成瀬の存在は、いつの間にか私の心の中で霞んでしまった。ただ日本と英国の女性史には関心をもっていたので、当然ながら日本女性に高等教育を与えることを真剣に考えた成瀬には深い尊敬の念を抱き、自分が成瀬が創立した日本女子大学の附属中高で学んだことを密かに誇らしく思っていた。

人生には思いもかけないことが起こるものだ。五〇歳になった私が成瀬と、日本女子大学の初期の歴史の虜になるような事件が、先ず起こつたのである。それは英国においてであつた。当時オックスフォード大学日産日本問題研究所の訪問研究員として一年間英国に滞在していた私



ヒューズ

は、さまざまな大学図書館やアーカイヴズで日英の関係を調べていた。ある時、開学したばかりの日本女子大学（正式には日本女子大学校）の教壇に立って『アーサー王物語』を講義している英国女性の報告文に出会う。それは、E・P・ヒューズというケンブリッジ女子高等師範学校校長を一四年間務めた英国女子高等教育のパイオニアの筆によるものだった。彼女は訪日して、極東地域



フィリップス

における最初の女子大学の教育に関わることを喜びながらも、女子高等教育に反対する日本人一般からは攻撃的になっていった開学時の日本女子大学と成瀬を支えていくためには、激しい情熱とケルト人のエネルギーをもって闘わなければならぬ、とも記していた。

それだけではない。これまた開学の日本女子大学英文学部の教師を務めながら、後に女子大の外寮と

なった「暁星寮」の寮監として女子学生にキリスト教教育を行った英国国教会宣教師E・フィリップスの伝道本部（ロンドン）宛報告書約五〇通を読む機会にも、恵まれた。そこには、寮におけるキリスト教教育のみならず、成瀬や学生との交わりについて、成瀬の主張する女子高等教育の革新性について、上代タノなど優秀な女子学生が暁星寮で育っていることなどが記され、それは、開期の日本女子大学の数々の場面を映し出す貴重なドキュメンタリー・フィルムであった。

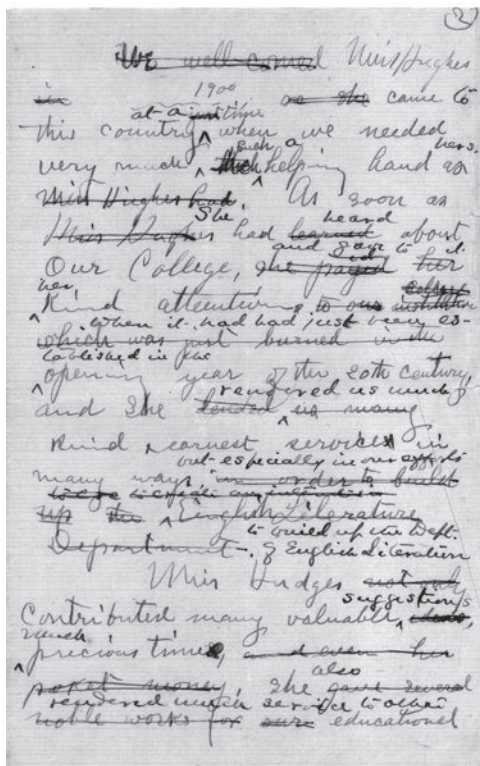
英国から帰国後、私は偶然出会ったこれらの貴重な史料がどのような意味をもつのかを調べるために成瀬記念館を訪れた。そしてヒューズやフィリップスが成瀬に宛てた書簡が記念館に保存されていることや、「成瀬と英国」「日本女子大学と英国」という重要なテーマが未開拓の分野で

あることを知った。

それから長い年月をかけて、日本女子大学の開学期の状況を調べるために桜楓会発行の『家庭週報』を調べてヒューズやフィリップスに関わる記事を拾い上げたり、『成瀬仁蔵著作集』などを読んで成瀬のヒューズについての記述に注目した。日本で女子高等教育を実践し始めたばかりの成瀬(当時四三歳)は、ヒューズ(五〇歳)の来校を喜び、代表作『女子教育改善意見』などに彼女の名前や考えを何度も紹介しているし、ヒューズの帰国送別会では、「嗚呼政治上の日英同盟は已に政治家の手に成りぬ 教育上の日英同盟は正に女史(ヒューズ)の手に成らん哉」という言葉までも残していた。これまでは、成瀬に与えた外国の影響と言えば米国のみが強調されてきたが、開学期に来日した英国女子高等教育のパイオニアたち――

ヒューズやフィリップスについても関心を深めることが重要だ、と私はますます確信するようになった。そのような問題意識にかられて、ヒューズやフィリップスが日本に残していた足跡を調べたり、成瀬記念館から与えられた宿題を抱えて英

国に調査に出かけたりし、私は、すっかり、このテーマに取り込まれてしまったのである。そして『成瀬記念館』に四回ペーパーを書かせて頂き、さらに『日本女子大学学園事典』に寄稿をし、放送大学の面接授業では、記念館から資料をお借りして、



新しく発見された成瀬のヒューズを称えるスピーチ原稿

成瀬の名前を掲げた講義も行わせて頂いた。こういった思わぬ積み重ねを経て、昨年五月には、『明治期女子高等教育における日英の交流——津田梅子・成瀬仁蔵・ヒューズ・フィリップス』（ドメス出版）を上梓した。考えてみると、私が英国で『Mr. Naruse』という文字と出会ったから、何と四半世紀の月日が流れていたのである。

しかし、探求はまだ続けなければならぬ。奇しくも成瀬没後百年の今年、成瀬が英語で記したヒューズを称える貴重な手稿などが成瀬記念館で発見された。その一部を翻訳すると、

ミス・ヒューズは、私たちがまさに彼女のような人の助けをとて必要としていたその時に、来日して下さったのです。……彼女の知的エネルギー、意気込み、とりわけ自己抑制力には、感嘆せざる

を得ません。……彼女は、女性に高等教育を与えることがいかに重要か、いかに価値あることかを、言葉だけでなく、身をもって日本国民に示して下さいました。これこそが、ミス・ヒューズの日本訪問が私たちに与えてくれた最大の贈物です。……

とある。また、ヒューズの日本滞在中の教育体験や視察が、当時の英国政府に報告されているという情報も私は手にしているので、調査することはたくさんある。どうやら、この仕事は私にとって、成瀬が言うところの「天職」になりつつあるのかもしれない。

（慶應義塾福祉研究センター

客員所員 しろい たかこ）

「成瀬仁蔵先生自筆の日記等」における脱酸性化処理及びその他の保存処置

横島 文夫

この度、弊社では成瀬仁蔵先生自筆による日記等四一冊に対して、脱酸性化処理を中心とした保存処置を実施する機会をいただきました。この脱酸性化処理とは酸性紙に含まれる酸を中和し、紙資料の保存性を高める処理のことで、近現代の紙資料の保存において大変に有効な対策として位置づけられています。同処理が必要とされる酸性紙については以下のような歴史があります。

かつてヨーロッパでは動物の皮が加工した羊皮紙と呼ばれる薄い皮が筆記材料として使用されていまし

た。しかし一二世紀に中国からぼろ布（麻など）を原料とする製紙法が伝わると、原材料の確保がより容易であった同製紙法が徐々に普及しました。そして一八世紀に至る頃には識字率の増加も重なって、紙媒体の需要は急速に高まりました。その結果、一九世紀には原料のぼろ布不足が社会的な問題にまで発展し、ついには原料が豊富で、かつ入手が容易な木材パルプによる紙の量産技術が開発されました。一方、グーテンベルグが一五世紀に発明した印刷技術も大きく姿を変え、同じ一九世紀には高速印刷を可能にする輪転機が登場します。このような製紙、印刷双方の技術における一連の発展に伴って、高速印刷を実現する上で欠かせないインク<sup>①</sup>の滲みを防止する「サイジング」技術も同様に研究され、一九世紀半ばには硫酸アルミニウムを定着剤として用いた「ロジンサイ

ズ」の技術が確立されました。これ以降、木材パルプを原料とし、製紙工程において硫酸アルミニウムを添加した酸性の紙、いわゆる「酸性紙」が大量に普及します。

酸性紙の場合、硫酸アルミニウム等起因する酸性化（水素イオンの増加）に伴って、紙の繊維を構成するセルロースが加水分解し、その結果、柔軟性は徐々に失われ、紙質によっては粉碎するまで脆化します。日本国内において酸性紙の生産が本格化するのには明治二〇年代であり、以後一九八〇年代に中性紙が普及と始めるまで、大量の印刷用紙や筆記用紙が酸性紙であり、現在これらの多くが存亡の危機に瀕しています。なお、日本の伝統的な和紙は、楮<sup>こうぞ</sup>や三桮<sup>みつばた</sup>の韌皮繊維を原料とし、木材パルプに比して繊維が長く、柔軟性に富んでいます。また、良質な和紙の製紙工程では酸性物質が添加されて

いないため、安定した保存性が維持されます。

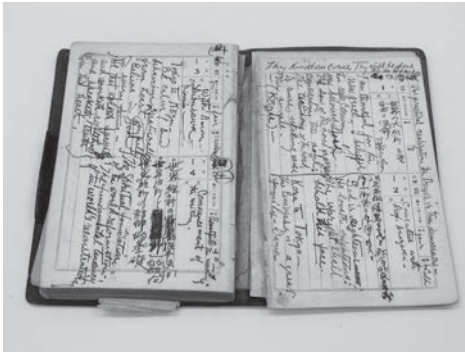
今回の保存処置対象となった成瀬先生の日記類における書誌情報によれば、これらは一八九〇（明治二三）年頃から一九一九（大正八）年頃に至るもので、日本国内において酸性紙の生産が活発化した頃と重なります。しかしながら各表紙のデザイン等から、初期の日記帳は外国製であることが判ります。一方、大正年間の日記帳に付属するカレンダー等が日本語であることから、この頃から国内製品を用いていることが確認できます。なお、これらの紙質は比較的健全で、全て酸性紙ではあるものの今なお柔軟性を有しており、粉碎するほどの脆化は見られません。雑誌や新聞紙といった廉価な紙には木材を磨砕して作られた「ざら紙」（メカニカルパルプ）が用いられ、これらは光によって褐色化するリグニン

や重合度の低いヘミセルロース等の不純物を含むために褐色で、かつ脆弱な場合が少なくありません。しかしこれら日記類の紙質における褐色化はいずれも軽微です。このようなことから、同紙質は木材から化学処理によって抽出されたケミカルパルプを原料とした上質紙であることが推定でき、したがって劣化も軽微であると考えます。

対象資料の製本構造は主に折丁（折り畳まれたページの束）毎にかがり綴じされたもので、表紙が厚紙や革装といった形態です。中には二つ折りした本紙を中綴じしただけの簡単な構造のメモ帳や、大学ノート、そして金属製のリング式バインダーも含まれています。

使用されている筆記具の多くがブルー・ブラック・インクによる万年筆で、墨書や鉛筆による記述も散見されます。中にはアイロン・ガル・

インクと思われる褐色インクが使用されており、文字の周辺にインクの滲みが見られるものの、文字部分が脆化して欠落するといった同インク特有の深刻な劣化症状は認められませんでした。脱酸性化処理はアイロン・ガル・インクの劣化を完全に抑止する対策ではありませんが、インク周辺に生じる酸性成分を中和する



補修前の綴じが破損した日記帳

ことが期待でき、紙質の維持に貢献します。  
脱酸性化処理に先立って簡易補修処置を実施しました。同補修では、主に本紙や挿入紙片の破れ、および表紙等の破損箇所を和紙と正麩糊で繕い、また、折れやしわをフラットニング（平面化）するといった処置を実施しました。なお、製本構造に



リンクステッチによる綴じ直し作業工程

対しては切れた綴じ糸を交換する、あるいはリンクステッチ（綴じ糸だけで折丁を連結する綴じ方）によって綴じ直すなどして補修、補強しました。

脱酸性化処理には当社が提供するブックキーパー法を用いました。同技術では、まず脱酸性化剤である酸化マグネシウムの微粒子が懸濁した不活性な液体に紙資料を浸漬させ、その後液体のみを気化させることで紙資料の表面に酸化マグネシウムの微粒子を残留させます。すると同物質が長期間にわたって紙に内在する酸を中和し続け、結果として紙の寿命を三倍から五倍以上に延命する効果が、米国議会図書館の研究によって既に実証されています。例えば今後三〇年程度しか、利用可能な状態で保存し得ないと考えられる脆弱な酸性紙であっても、同寿命を一五〇年以上に延命する効果が期待で

き、紙資料の利用寿命を大幅に改善することができそうです。しかしながら既に脆化した酸性紙では同処理の長期的な効果は期待できず、つまり脱酸性化処理は劣化した紙の回復処置ではなく、劣化抑制効果を与える処置であり、早期の対策が重要といえます。

脱酸性化処理の目的は、処理対象となった日記はもとより、書籍、公文書、地図、楽譜、手紙といった、紙に記録された多様な現物資料を後世に伝えることといえます。今回、脱酸性化処理を施した日記類においては、成瀬先生のご意志、あるいはご知見といった事柄が、同資料を通じて多くの方々に、そして永く語り継がれることを願うものです。

（株式会社ブリザベーション・テクノロジーズ・ジャパン専務取締役  
よこしま ふみお）

## レンガの会

篠田 明美

附属豊明小学校の卒業式は、例年成瀬記念講堂にて全児童参加のもと行われていました。

成瀬先生の胸像と「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」の三大綱領が掲げられる舞台の前で、ひとり一人卒業証書を授与される卒業生、その凛々しい姿を大きな瞳を輝かせて見守る在校生、送別の歌、答辞、卒業の歌が講堂内に響き渡り厳粛な式が行われていました。ところが建物の老朽化と耐震基準に満たないことにより、二階が使用禁止になり、ついに二〇一五年全館使用禁止となってしまい卒業式を行うことができなくなりました。以後、卒業式は小学校

の講堂(体育館)で行うこととなりました。いつの日か輝いた学園のシンボルとして成瀬記念講堂を蘇らせ再び卒業式をあげさせたい、どうにかしなくてはと願わずにはいられませんでした。

成瀬記念講堂は一九七四(昭和四九)年に文京区の有形文化財に指定された貴重な建物です。一九〇六(明治三九)年に建てられ、創建当時は外装がレンガ造の美しい建物でした。関東大震災で甚大な被害を受け、レンガ壁は崩壊し修築の見込みなしとされましたが、精神的に重要な建物であることから、保存の道と考へ外壁の煉瓦壁を取り払い木造壁にかえ命脈を保つことができたのです。内部は昔造りの木造のバジリカ様式で美しいのですが、外観は木造壁後、ペンキでの修復を重ねてきてはいるものの長き年月により塗装は所々剥がれ、シンボルの威容をう



創建当時の講堂(奥は教育学部校舎)

しない寂しい姿で存在してしました。

ふたたび学園のシンボルとして輝かせ教育施設として十分に活用できる状態にしたい。二〇〇四年創立一〇〇周年を迎えた日本女子大学教育文化振興桜楓会で、記念事業の一つとして、「私の提言」と題する論文を

募集されたところ、その論文の一つ「成瀬記念講堂をレンガ造に復元する。」という卒業生の提案が入賞作品の一つに選ばれました。その卒業生の呼びかけで卒業生の有志(私も加わりました)と大学関係者を顧問に「成瀬記念講堂をレンガ造りに復元する会(通称レンガの会)」が二〇〇五年七月に発足いたしました。成瀬記念講堂を文化財として保存しながら耐震構造、空調完備、収容人数八〇〇人、広く活用できる建物という方向で話し合い「一人がレンガ一枚(五〇〇〇円)をサポートする」という基本構想でこの目的を達成してはどうかということになりました。

二〇〇五年一二月、レンガ一枚サポート運動の呼びかけを発信する運びとなりチラシを作成し配布しました。早速、多くの方からご支援をいただきました。

活動に関しての会を重ねているう



ちに、旧成瀬仁蔵住宅も文化財にできないかと話が進み学園当局に提案いたしました。文化庁文化財保護審議会専門調査委員の方々による成瀬記念講堂・旧成瀬仁蔵住宅(成瀬記念館分館)・お茶室等の視察を受け、各々の価値を認めていただきました。早速、学園当局とレンガの会が協力し文京区苑旧成瀬仁蔵住宅とお茶室の文京区文化財指定申請手続きをとりました。二〇〇七年一〇月一日、旧成瀬仁蔵住宅(成瀬記念館分館)と家具一四点が文京区指定有形文化財として正式に指定されました。二年間に及ぶ学園当局とレンガの会の努力が結実いたしました。

二〇〇六年四月、成瀬記念講堂復元・再生のための基礎調査をその道専門の建築研究所に委託しました。現場実地調査、文献調査、行政調査、参考事例調査等を行い文化財としての価値を保ちながら学園の施設とし

て有効に活用できる提案をしていたいただきました。この提案を受け会の名称を「成瀬記念講堂復元・修復実行委員会(レンガの会)」いたしました。

啓発運動として白、ピンク、黄色、ブルー、グリーンの五色のタオルハンカチに刺繍で成瀬記念講堂をいれ、「二〇〇八年日本女子大学創立者成瀬仁蔵生誕一五〇年を迎えます。この記念の時に設立二〇〇周年を迎えた成瀬記念講堂を、創建時のレンガの姿に復元・修復するために実行委員会が発足し活動を始めました。このハンカチは皆様の心を結び、収益は成瀬記念講堂のレンガに積み上げられてゆきます。ご協力よろしくお願いいたします。」と記された趣意書を一緒にいれ一枚三〇〇円(原価二〇〇円)で販売を開始いたしました。

販売には個人、附属校のバザー、



成瀬記念館、回生同窓会、桜楓会支部等がご協力くださいました。NHK朝ドラで広岡浅子氏をモデルにしたヒロインが登場した時は、成瀬記念館の見学者が増え驚異的な売れ行きでした。

二〇一六年、学園創立一二〇周年記念事業に伴い「成瀬記念講堂り



「ニューアル」事業が開始されました。レンガの会は成瀬記念講堂を初期建築当時の煉瓦造りで修復を願ひ、これまで活動で得た収益金を学園に寄付してきましたが、その願ひに変わりはしないものの、耐震基準を満たさず利用不可能となっている講堂の状態に鑑み、学園が行う耐震補強工事のためにレンガの会名義にて二〇周年記念事業募金に寄付し役立て

ていただくことにいたしました。会の名称も「成瀬記念講堂再生・卒業生の会（レンガの会）」と改名し趣意書も「——現在は耐震改修工事が必要となり「成瀬記念講堂リニューアル事業」として大学創立一二〇周年事業の一つとなっております。——」と一部変更いたしました。

寄付金の一部は、学園当局のレンガの会へのご理解とご厚意により講堂のステンドグラス修復代に充ててくださいました。南面ステンドグラスの右下部には、「ステンドグラスは一九〇六（明治三九）年に豊明図書館兼講堂として建設された創建当時のものが一部現存しています。二〇一七年からの成瀬記念講堂の耐震補強工事にあわせて、破損箇所修復作業を行いました。この修復は、成瀬記念講堂再生・卒業生の会（レンガの会）のご芳志を得て行われました。二〇一八年八月」と記された

銘板が設置されました。

二〇一八年九月二二日、成瀬記念講堂耐震改修工事落成式を迎えました。ステンドグラスは美しい色に輝いて蘇っていました。微力ではありますが多くの方の母校への思いと私共の努力が結実したことに感謝と喜びを感じております。

二〇〇五年七月発足以来一三年間活動を進めて来ましたが成瀬記念講堂再生・卒業生の会（レンガの会）は、二〇一八年九月を以って活動を停止し解散いたしました。

二〇一九年三月一七日、附属豊明小学校卒業式は成瀬記念講堂にて挙行されました。

（元附属豊明小学校校長

しのだ あけみ）

## 現代に生きる成瀬仁蔵

—その女性観・教育観・宗教観—

片桐 芳雄

成瀬仁蔵（一八五八—一九一九）は、本年三月四日、没後一〇〇年を迎えた。しかし成瀬の思想は、没後一〇〇年の時空を超えてなお、検討に値する価値を持っている。成瀬が、生涯をかけて取り組んだ課題は、今日でもなお、「課題」であり続けているのである。

そのうち特に、女性観、教育観、宗教観の三点について述べてみよう。

### 1. 女性観—「天職」のある女性

成瀬は、日本女子大学校創設に先立って、一八九六年に出版した『女子教育』のなかで、次のように述べた。

「女子の主要なる天職は賢母良妻たるにありとするも、その一生は必ずしも妻母たるの境遇のみに止

らず。又た娘嬢たるの境遇あり、寡婦たるの境遇あり、個人として働くべきの境遇あり、国民として行ふべきの境遇あり、実に然り、女子も亦人なり」（傍点・片桐）

成瀬にとつて良妻賢母は、女性の「主要なる」天職であり、そのすべてではない。何故なら、女性は、必ずしも皆が、妻や母になるわけではなく、「娘嬢たるの境遇」や「寡婦たるの境遇」の場合もあるからである。そうであれば、女性の境遇は、まず、「個人として」「国民として」、すなわち「人として」のものである。

「人として」の女性にとつて、何よりも重要なのは、「天職」を持つことである。成瀬の言う「天職」は、神に与えられた使命という、キリスト教に由来する言葉だが、こ

く卑近に表現すれば、人生を託すに足る「生きがい」である。

成瀬の時代、女性の主要な生きがいは、妻となり、母となることだった。女性には、人生を託すに足るような仕事、他に開かれていなかったからである。妻や母となること以外に、女性の生きがいを、見出しにくい時代であった。しかし、日本女子大学の卒業生たちは、妻や母になるだけではなく、それ以外の生きがいを切り拓いて行った。井上秀や丹下ウメ、原口(新井)鶴子や平塚らいてう等々、成瀬の教え子たちの名前を思い浮かべれば、それが良くわかるであろう。

このような成瀬の女性観は、「聖書の理想的婦人は従順の婦人なり、即ち権利を争はざる婦人なり」(『貞操美談・路得記』一八九三年)とか、「男は、その主なるキリストに服従することによって自己を高むるがごとくに、女もまた、その主なる男に服従することによって自己を高くする。」「(東西の女性観)『聖書之研究』一九二九年七月)などと述べて、女性にひたすら、従順の徳を求めた、内村鑑三(一八六一—一九三〇)などは、まったく異なる。

また、女性の権利に理解があったとされる福沢諭吉(一八三五—一九〇一)の場合も、成瀬が帝国ホテルで

開いた第一回女子大学創立披露会の直後に、これを「無益の骨折と云ふ可きのみ」(「女子の本位如何」『時事新報』一八九七年四月七日)と、皮肉った。

福沢は、儒教による婦徳を説いた『女大学』を厳しく批判したが、「妊娠出産に引続き小児の哺乳養育は女子の専任にして、為めに時を失ふこと多ければ、学問上に男子と併行す可らざるは自然の約束と云ふも可なり」(『女大学評論・新女大学』一八九九年)と述べたように、女性が、高等教育を受けて学問を修め、家庭の外で社会的な活動をするには批判的だった。福沢の尊重した女性の権利は、あくまでも、家庭のなかの、妻や母としてのものであった。

成瀬は、『女子教育』に先立つ一五年前の一八八一年、梅花女学校の教員時代に著した『婦女子の職務』のなかでも「嫁して子なきもの、あるひは嫁せざる者には、国に欠くべからざる大切なる職務あり」(ルビ・原文)と述べている。成瀬のこのような女性観は、成瀬をキリスト教に導いた同郷の先輩・澤山保羅の影響によるものと考えられるが、さらに一八九一年からの米国留学で、より確かなものとなった。成瀬は、家庭の中だけではなく、社会においても、生き生きと活動する米国の女性たちの姿に、強い印象を受けたのだった。

成瀬は米国留学で、「女性の領域」(Woman's Sphere)という概念を学んだ。留学先のアンドローヴァー神学校で成瀬が師事したタッカー教授は、女性には、男性と異なる、女性にふさわしい「女性の領域」があり、しかもそれは、「ホーム」を作ることと第一としながらも、教育や慈善活動、さらには学術や政治に至るまで、きわめて広範囲のものであると説いた。

このような主張は、成瀬が留学した当時の米国において、広く支持されるようになっていた。女性たちは、これを論拠に、社会的な地位を獲得し、拡大しつつあった。成瀬は、この考え方に、深く同意した。

しかし他方、このような主張を批判する女性たちも少なくなかった。彼女らは、女性に、男性と異なる領域があると考える考え方そのものに反対し、「ホーム」を作ることと女性の任務の第一にすること自体にも反対した。女性性は、男性と、あらゆる意味で、対等でなければならぬ、と彼女らは考えた。成瀬が訪問したウエルズリー・カレッジの教授たちは、ほとんどすべて女性だったが、彼女らも、そのように主張した。

成瀬は、その見解に賛成できなかった。

留学二年目の秋、成瀬は、アンドローヴァー神学校をあとにして、クラーク大学に入学した。ここで師事した心

理学者のスタンレー・ホール(一八四四—一九二四)は、男女の違いを明確にし、男性はヨリ男性的に、女性はヨリ女性的に教育すべきだと主張する人物であった。アメリカ心理学の父とも称されるホールの見解は、心理学研究の最先端の成果とも言うべきものであり、成瀬は、改めて自らの見解への確信を深めた。

「女性の領域」を認めながら、ホームを作るための家事を合理化し、その負担を軽減すること、そのための専門的知識を、女子大学は研究・教育しなければならぬ。こうした知見は、成瀬の女子大学構想の、重要な基盤となった。

女性が社会進出をしようとするとき、二つの戦略がある。可能な限り女性性(Womanhood)を捨てて「男並み」になるか、あるいは、女性性を捨てることなく母性を尊重し、その社会的保護を要求して、女性性を生かした社会進出を図るか。この両者をめぐって戦わされたのが、平塚らいてうと与謝野晶子らによる、母性保護論争であったが、この論争は、成瀬の晩年に起こり、その没後まで続いた。成瀬の女性観は、母性保護を主張した平塚らいてうに受け継がれた、と言えるだろう。

母性保護論争は、性差極大主義と性差極小主義との間に揺れる現代の女性観をめぐる論議に、形を変えてなお、

未決の問題を投げかけている。女性性の視点に立ち「女性の領域」の存在を認めた成瀬の女性観は、今日でもなお検討されるべき価値をもっているのである。

## 2. 教育観—自学自動主義

成瀬は、「私は小さい時に学問が嫌ひであつた。本を習ふといふこと、算盤を教はるといふことが誠に嫌ひであつた。」と述べている（『成瀬先生傳』）。また山口県教員養成所（現・山口大学教育学部）で学び、小学校教員となったが、そこでの上意下達式の形式的な教育を嫌つた。

成瀬は、受け身の教育ではなく、能動的な独学を好んだ。まさに、自学自動は、成瀬自らの体験に根ざしたものであつた。梅花女学校でも、新潟女学校でも、成瀬の教育の中心に、自学自動主義があつた。成瀬はさらに、米国での経験によって、これに磨きをかけた。

成瀬は、『新時代の教育』（博文館、一九一四年）の「教育の目的と自学自動主義」と題する項で、次のように述べた。

「要するに、優秀なる品性を具へ、充実せる活力を有する高尚偉大なる人物を養成する、教育の根本方法は、青年の自発的動力を開発培養し、其の効果を

實地に生ずべき生活法を自得せしむるに在り。是れ即ち吾人の所謂自学自動主義の教育なりとす。」

このように成瀬は、「高尚偉大なる人物」を養成する方法として、自学自動主義の意義を力説した。そして日本女子大学の教育方針として、「実業的社会的教育」を示した。

「実業的社会的教育」とは、実業に直接の役に立つ、いわゆる実業教育のことではなく、学校そのものが「工場の社会的、家庭的要素」を備え、文学、商工、手芸、さらには音楽、美術もこれに加わり、これによって知育、徳育、情育、体育を完成させようとするものである。

「之を詳言すれば、学生をして学ぶ所のもの、自ら之を實行して、自ら理解力、選択力、想像力、発明力及び観察力を養はしむるにあり。」（『我が校の教育方針に就て』『家庭週報』第二〇号、一九〇五年三月二五日）

具体的には、料理の授業では、単に肉や魚や野菜の煮炊きの方法を教えるにとどまらず、これを通して「理化学応用の能力を啓発し、衛生、経済の工夫も、自から実験によりて会得せしめ」るのであり、牧畜や園芸の活動は、これによって「動植物発育の實際と生物進化の状態を不知不識の間に理解せしめ」るのである。要するに「微

妙なる天然の法則も、これに由つて其の一斑を会得せしめ」ることになる。

じつさい日本女子大学校では、鶏舎を作り、牧場で牛を飼い、菜園で野菜や花を育てたりするとともに、学年縦断的な「縦の会」と学部横断的な「横の会」が組織され、さらに文芸係や体育係等の係活動によって、運動会や文芸会等、学生が積極的に参加する自治的な活動が奨励された。

このような成瀬の教育方針は、ジョン・デューイ(一八五九—一九五二)の教育思想とも重なる。デューイが一八九九年に出版した『学校と社会』は成瀬記念館に所蔵されているが、成瀬はこの書を、鉛筆で黒々とアンダーラインを引きながら、熱心に読んだ。この書は、シカゴ大学付属実験学校での実践をもとに書かれたものであった。

問題解決学習法などと称されるこの方法は、一般に、初等教育での方法として知られるが、成瀬はこれを、高等教育に取り入れようとしたのだった。このことは、デューイの考えに沿うものでもあった。

成瀬は別の論考で、米国で計画又は実施されている学校として、二〇余人の教師と二五〇名の学生が一年かけて世界を航海し四年間で世界を四周して卒業する学校船

Schoolship や、学校を city とし学生を市民 citizen とみなして生活しながら学ぶ学校都市 School City の試みなどを紹介している(『日本女子大学の二百十日』日本女子大学校学報』第二号、一九〇三年二月)。成瀬はこのような実践にも注目したのである。

日本女子大学校での自学自動主義教育は、やがて、実験・実習を重視する教育として、高等教育にふさわしい教育形態へと高度化されていった。帝国大学に劣らない設備を持つ香雪化学館が建設され、化学実験等はここで行われるようになった。

さらには一九一七年には、成瀬が親しく交流し、また日本女子大学校を訪れたこともあるチャールズ・W・エリオット総長によるハーバード大学改革をモデルに、自由選択制のカリキュラムを導入した。これも自学自動主義教育の精神を生かそうとするものであった。

このような日本女子大学校における自学自動主義の教育は、高等教育の新教育(New education)とも言える。そしてそれは、人格形成を目的とする一般教育(教養教育)と、専門的な知識・技能を教授する専門教育とを統合して充実させようとする試みでもあった。

大学教育において、人格形成をめざす一般教育と、専門的な知識・技能の獲得をめざす専門教育との関係構築

は、いまもなお重要な課題である。戦後日本においても、当初は一般教育の重要性が主張されながら、結局のところ、これが軽視・衰退したことは記憶に新しい。

成瀬が留学した米国においては、リベラル・アーツ教育の伝統が、今なお健在であるが、成瀬は、セブン・シスターズと呼ばれた女性カレッジでこの教育が行われていることを知りながら、日本女子大学校では、女性にふさわしい専門教育をも重視しようとしたのであった。

今日、大学においても、アクティブ・ラーニングと称して、学生たちの能動的学習の重要性が説かれているが、これは成瀬が一〇〇年以上前に主張したものであった、と言える。

人格の形成と知識・技能の教授との関係、つまりは、単なる専門的知識の獲得のためだけではなく、人格の形成にも資する知識・技能の教授は、どのようにして行われるべきなのか、これは教育の、永遠の課題だと言っても良く、成瀬の自学自動主義の教育は、それに一つの回答を与えるものである。

### 3. 宗教観―帰一思想

同郷の先輩澤山保羅に導かれて熱心なクリスチャンとなった成瀬仁蔵は、一九一二年に帰一協会を組織し、帰

一思想を主張するようになった。そのきっかけとなったのは、米国留学前、四年余を過ごした新潟時代の経験にある。

一八八四年に大和郡山教会の牧師となった成瀬は、その熱心な活動が認められ、当時キリスト教布教の重要拠点であった新潟市に牧師として派遣された。当時の新潟では、成瀬の属する会衆派の組合教会と長老派系の一致教会との合同が重要な課題となっていた。成瀬はその困難な問題を解決する使命を帯びて新潟に赴任したが、中央における両組織の統合不調もあって、その問題の解決は容易ではなかった。

一方成瀬は、この時期、内村鑑三と対立したいわゆる北越学館事件に巻き込まれるとともに、地元有志の要請を受けて新潟女学校の設立にも取り組んだ。

一八八八年二月、成瀬は牧師を辞任した。このとき組合教会の重鎮・新島襄宛に送った書簡で成瀬は、「小弟当地ニ参りし以来一致(教会との・片桐)合併之為種々力を尽し……大ニ尽力致せしも到底行れざるのみならず益々悪しく相成候」と教会合同の困難を述べるとともに、さらに「吾組合教会ニも一之偽善之分子有之、即ち毒を含むの分子ニ御座候」と、自らの属する組合教会内部にも「毒を含むの分子」がいることを訴えた。このような、



最も信頼すべき自らの教会員をも批判せざるを得ない状況は、成瀬の心を、深く傷つけたものと思われる。

成瀬の牧師辞任は、新潟女学校校長として、その職務に専念するためのものであったが、同時に、この頃から、キリスト教への懐疑が生じたのではないか、と思われる。これまで絶対的な信仰を寄せたキリスト教を、客観的に「研究」したい、との思いが成瀬に生じた。成瀬は、新潟女学校の経営が軌道に乗ったと思われるころ、「神学上の問題」の研究のために、米国留学を決意した。

アンドーヴァー神学校で師事したタッカー教授は、社会的実践を重視する神学者で、当時、米国で影響力を拡大しつつあったユニテリアニズムに理解を示した。

彼のキリスト教観は、自らも述べているように、①進化論を含む近代科学の受容、②聖書研究の自由の主張、③エキュメニズム(超教派主義)の立場、④キリストの人間性の承認、⑤宗教的・霊的世界の強調、⑥人間的実践の重要性の六点に要約できる(*The Function of the Church in Modern Society*、一九一一年。河村望訳『近代社会における教会の役割』桜楓会出版部、二〇〇六年)。成瀬は、このようなキリスト教観に大きな影響を受けた。成瀬は、一九〇六年一月三十一日、日本女子大学の「実践倫理」の授業で宗教問題を取り上げ、最も偉大な人物

としてイエスの名を挙げながら、「(しかし)今日は信じ難い事が沢山あるのです」と述べた。そして「もー古い仏教、古いキリスト教は今日には適しなくなつたのです。(中略)あなた方は、若い人は将来に活きるのです。将来の宗教を求めねばならぬ。」と語った(『日本女子大学校長成瀬仁蔵先生述・実践倫理講話筆記・明治三十七・三十八年度ノ部』成瀬記念館、二〇〇九年)。

成瀬自身も、「将来の宗教」を模索した。姉崎正治や沢栄一とともに婦一協会を組織し、日本国内だけではなく、賛同者を募つて、欧米への旅にも出た。インドのタゴールとも親しく交流した。

成瀬が最後に到達した宗教的境地は、亡くなる一年半前、一九一七年夏に軽井沢で行なつた「軽井沢山上の生活」と題される一〇回の講義で示されている。

成瀬は言う。

「信念生活の目的は大生命に帰一する―即ち究極的帰一、真の實在に到達する―といふ所にある。」

「この吾人の心の根底に憧憬して止まない至上人格は宗教の實質となるべき本質なる人間と、其の偉大なる者との間に友情の關係の出来得る實在者である。而してこれは宗教上にていふ祈りによって直接に接触し交通し得らるるものである。即ち瞑想に

よってその目的あり意志あり感情あり思想ある神を認め得ることが出来るのである。実にこの神の実現を研究し認識するのは瞑想によるのである。

要するに吾人には神性仏性がある。これによって共同し大生命に到るといふ信念を持し得るのである。即ち吾人の信念生活の経験とは神と吾人とその二者の間に Oneness を意識し、直接にその感化を受け同一生命に聯なることを意識するの境界に入ることをいふのである。(第三講)

私たちの内には、誰でも、神性や仏性がある。それは、神とも仏とも呼ぶべき至上人格 (Supreme Person) を希求する。しかし神性(仏性)によって至上人格に到達するには、頭によって理解するのではなく、心によって感得しなければならぬ。感性を働かせて瞑想(自念)することによって、私たちは、至上人格と Oneness を得る(帰一する)のである。

こうして成瀬は、その境地に至るには「到底言葉や形を以ていひ表はすことは出来ない。たゞ詩によつてその気分を味ふより外に道はないであらう」(第一〇講)と、  
「軽井沢山上の生活」の講義で「三編の詩を読み上げる。

成瀬のこのような宗教観は、難解な表現にもかかわらず、意外にシンプルなものである。

成瀬は、客観的な認識の世界を超えた、信仰の世界の存在を認める。それは、理性によって知る世界ではなく、感性によって感得する世界である。そして、いかなる宗教も、瞑想(自念)することによって、絶対的な「至上人格」に到達し、それとの Oneness (帰一) を得ることができぬ。

このような成瀬の宗教観は、意外にも、成瀬が親しく交流したジョン・デューイの宗教観ともつながる。デューイは一九三四年に出版した *A Common Faith* (岸本英夫訳『誰れでも信仰』一九五一年、栗田修訳『人類共通の信仰』二〇一一年)の第一章を Religion Versus the Religions と題し、宗教 (Religion) に対して、宗教的なるもの (the Religious) の意義を強調した。成瀬の求める宗教も、まさに特定の宗教 (Religion) ではなく、宗教的なるもの (the Religious) だったのである。

がんに侵されて亡くなるまで一〇年の闘病生活を送った東京大学宗教学科教授の岸本英夫(一九〇三—一九六四)は、その遺著『死を見つめる心—ガンとたたかった十年間—』(一九六四年、講談社文庫)で、成瀬について次のように記した。

「しかしこのようにして、一生懸命生きながら、やはり、私は、ひまがあれば、死というものは何かと

考えざるをえなかった。そしてこのことについて思  
いわずらっていたときに、ふとした機会に、「死」と  
いうことに対する考えかたの目がひらけたのである。  
その目をひらいてくれたのは、目白の日本女子大学  
の創立者である成瀬仁蔵先生の書かれたものであつ  
た。」

また昨年暮れに亡くなった同志社大学出身の宗教学  
者・笠原芳光（一九二七—二〇一八）も、次のように語っ  
ている。

「このあいだ成瀬仁蔵に興味をもって調べてみま  
した。あの人はもと正統主義のプロテスタントだっ  
たのが、アメリカのアンドバー神学校、クラーク大  
学で勉強して、だんだんリベラルになってユニテリ  
アンに近くなるんです。ベンガルの文学者タゴール  
を呼んでね、軽井沢の学寮の、大きな木の下でタゴ  
ルに樹下の講義をやらせたり、そういう意味でおも  
しろい人ですね。でも成瀬仁蔵はなぜかあまり知ら  
れていない。『宗教の森』（一九九三年、春秋社）

成瀬の宗教観は、地球上に各種の宗教上の問題が絶え  
ない今日、ますます、注目すべきものとなっているので  
ある。

成瀬仁蔵の、女性観、教育観、宗教観をつなぐキー・  
ワードは、「自然」であろう。成瀬の思想の根底に「自然」  
があるかぎり、成瀬の思想は、時代を超えて生きつづけ  
るのではなからうか。

（日本女子大学名誉教授 かたぎり よしお）



成瀬仁蔵関係書簡の翻刻を担当して

北野 剛

今回、成瀬仁蔵関係書簡集の刊行にあたって、成瀬記念館から拙文寄稿のおすすめをいただいた。何を書こうかと思案したが、気の利いた文章が思いつくほど器用でもないので、本件に私が関わりたいきさつと、そこで感じたいくつかの点をつづることで、この大任をごまかすことをお許しいただきたい。

\*

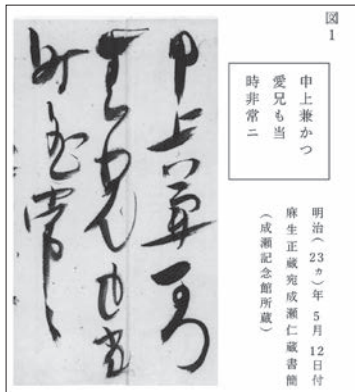
成瀬仁蔵関係書簡の翻刻のお話をいただいたのは、たしか二〇一〇年頃のことではなかったかと記憶している。私は歴史研究者ではあるものの、研究テーマは政治外交史、なかでも日中関係史を専門としており、一方で、成瀬仁蔵氏といえ、明治中期から大正期にかけてのキリスト教、女子教育における重要人物であって、全く毛色が異なる。正直に申し上げてあまり研究上の関心はな

かった。しかし、お話しをくださった日本女子大学教授（現在は名誉教授）の吉良芳恵先生は、とある資料の編纂でお世話になって以来、大変よくしていただいていた。ご恩があり、また、研究上の関心はともあれ、歴史資料、特に崩し字を読むこと自体が好きならば喜んで引き受けた。

ところが、実際に成瀬氏の書簡を拝見すると、これがなかなかの難物であった。かなりクセが強く、こういえばお叱りを受けそうだが、悪筆の部類である。事前に吉良先生が、結構難しいけど、と心配しておっしゃっていたが、まさにその通りで、崩し字の解説にだけは自信を持っていた私であったが、結構苦戦した。もともと、崩し方の基本から外れるようなものではなく、最初は面食らうのだが、馴れてくるとそれなりに読めるようになる

のが面白い。

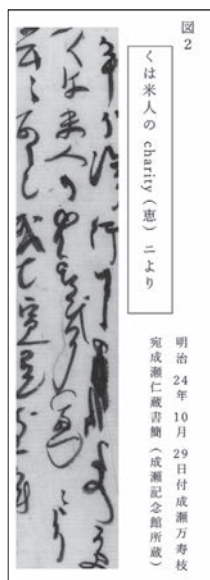
字そのものもそうだが、ほかにも厄介なところがあつた。一つはキリスト教に関わる部分である。崩し字というのは、普通、流れて読む。崩すと同じような形になる字も多いが、前後関係で推測していくのである。そこにパズルを解くような面白さがあるのだが、ところが、普段あまり見ない言い回しや単語に遭遇すると、そこで詰まってしまう。教会がらみの話や信仰にまつわる表現などはどうしても見慣れないため、字を判読しづらい。たとえば、「神」「天父」「恩」といった類の言葉はまだ容易に想像できるのだが、彼らの間でよく使う「愛兄」「愛姉」となると瞬時に思いつかない。普通は「大兄」とか「老兄」と来るところなの



のに、「愛」という字は草書体から楷書体を想像しにくいいため、最初は何という字か戸惑った。たかが一字であり、内容を理解する妨げにはな

らないものの、歴史資料を解読するというのは、一字一句に正確でなければならぬ。文意をとるだけではダメなのである。一つの書簡あたりにいくつも読めない文字があるようでは到底合格とはいえないのであり、結果、頭を抱えることになる。

おまけに、崩し字のなかに英語、あるいはその片仮名表記が入ってくるのもなかなかの曲者である。今でも、やたらと外来語を挟んで話したがる人がいるが、特に在米時代の成瀬氏がまさにそうで、見たこともない字だなと思っていると、横にしてみたなら英単語だったということがある。英語が大の苦手な私にとって、これは苦痛であつた。



ほかにも横書きで書かれた書簡などはことのほか読みにくく、どこまでが一字かわからない部分すらあり、また、ただでさえも読みにくいのに、さらに小さな字でびっしり書き込まれた端書きなど、いろいろ苦勞したも

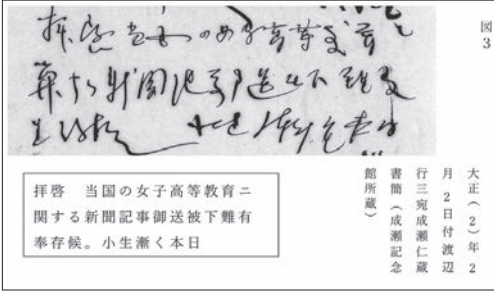


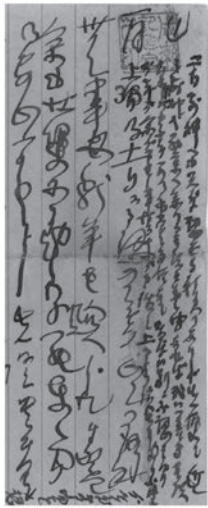
図3

大正(2)年2月2日付渡辺行三宛成瀬仁蔵書簡(成瀬記念館所蔵)

拜啓 当国の女子高等教育ニ関する新聞記事御送披下難有奉存候。小生漸く本日

図4

二白 前神へも此度認むる積りありしが先便二近々……



明治25年2月7日付麻生正藏宛成瀬仁蔵書簡(成瀬記念館所蔵)

のもあったわけだが、この度、監修の吉良先生のご指導と編集担当の杉崎友美氏(成瀬記念館)のご苦勞によつて、書簡集が無事刊行されることとなり、安堵している。

\*

さて、今、手許にある翻刻の作業データを見てみると、現在までに起こした書簡数は三〇〇〇通を超えている。実際の作業開始が

二〇一一年だから年に四〇〇通ほどの書簡を八年にわたつて読み続けてきたことになる。しかし、その中で、実は成瀬氏発信の書簡は十分の程度であり、ほとんどは成瀬氏宛の知人や学生からの書簡である。当然であるが、成瀬氏が女子教育に携わっている以上、女性からの書簡が非常に多いのが、この資料群の特徴といえる。

多くの方が想像できると思うが、歴史資料のほとんどは男性の手によるものであり、おそらく近現代史は他の時代に比べて女性による資料が多いとはいへ、それでも女性史などを専門にするのでなければ見る機会はほとんどない。特に、私のように政治外交を専門にしている者にとってはそうである。この資料中には比較的高齢と思われる女性(親類など)から女学生によるものまで、多くの書簡が存在し、字自体も達筆なものもあれば拙いもの(年齢的に書きなれていないと思われるもの)だけでなく、教育レベル的な意味で拙いものを含む)まで様々である。これだけの女性の書簡を読む機会はなかなかないので、大変勉強になった。女性の書く字は仮名が多く、しかも変体仮名を多く使う。さらに文章も男性とは違い、持つて回った言い方を好み、時には特有の表現(「もじことば」とか)も用いられる。これまた慣れるまで少し苦勞した。

ところで、大学の史学科などで崩し字を読む練習をする時、政治家などの男性が書いたものを使うことが多いが、仮名を読む練習には女性の書簡がいいと思う。流麗で細やかな字を読むのは、それ自体が気持ちのよいものである。これだけの資料群はなかなかないので、日本女子大学の大きいなる財産として、歴史教育にも存分に活用しない手はない(きつとしては思うが)。

そして、学生や卒業生の書簡は、明治大正期の高等教育を受けた女性という、かなりレアな階層の人々の意識を知りうる貴重な資料でもある。当時の社会背景のもとでは、学問を続けたり働いたりすること、女性としての生き方(結婚とか)とが往々にして相反しがちであったし、学問に対しての保護者(多くの場合は父親だが)の意識も時として彼女たちを悩ませた。書簡にはそうしたことをめぐる様々な思いがこぼれているのだが、これらは、女性の高等教育が当たり前になった現在においては多くの人が共感しうるであろうし、先人たちの苦悩から何らかの示唆を見出せるはずである。そして、このような生の声は、社会史や女性史を専門としない私のような者にとっても、興味深く読むことができた。しかし、ふと考えてみると、成瀬氏は女子学生たちから寄せられる悩みに、どのように向き合っていたのだろうか。へた

に上から目線で説教することは、何の解決にもならないどころか、その反対ともなりかねない。資料を読む限り、かなり学生から慕われていた様子だから、そうしたことに長けていたのだろう。となると、成瀬氏の人格こそが、このような貴重な資料が多く遺ることになった理由なのかもしれない。

\*

次に成瀬氏書簡を読んだ感想を少し記しておこう。当初、仕事と割り切って取り組んでいたこの筆耕であるが、不思議なもので、読み進めていくとだんだんと面白くなっていった。資料から人物像やストーリーが見えてくると、研究テーマに関係なく楽しめるものである。なんといっても印象深いのは在米時代である。意気揚々と渡米した成瀬氏は、妻の健康上の問題から経済的に追い詰められ、知人などから幾度となく帰国を催促されることとなる。頼みの綱であった親戚や友人の支援も思うようにいかず、自身の将来の夢と現実との狭間で苦しむのである。この時成瀬氏は三〇代前半(留学出発時が三二歳)、当時の私とほぼ同い年であり、研究者の道を志し、大学の非常勤講師やアルバイトで妻と生まれたばかりの娘を養っていた自分自身が重なり、身につまされるような気持ちになったことを憶えている(今も決して楽な生

活ではないが)。

成瀬氏の妻宛て書簡には、そんな妻をなぐさめる言葉が多くちりばめられているのだが、その中には、夢の中で二人が別々の星に乗っており、すれ違いざまに話すことができた、といったややメルヘンチックな話や、外国の離れ離れになった夫婦が数奇な運命からついに再会することができたといったエピソードなどもある。現実には病苦と経済難に悩む妻にとつて、夢の中の話や他人のエピソード(しかも結構長く、二通にわたって)を聞かされても困惑するほかなかつたに違いないが、ここにはむしろ成瀬氏の苦衷こそがしのばれるのである。しかし、妻の方も、いくら窮状を訴えても結局返ってくるのは、神に祈っているから信じろ、といった言葉ばかりなのだから、妻の信仰の程度はよく知らないが、釈然としなかつたのも無理はない。ここに成瀬氏のいくばくかのズルさを感じてしまうのは私に信仰心がないからであろうか。

こんなわけで、成瀬氏の書簡からは、当時の苦悩や人物像が伝わってきて大変面白い。すでにこれまでの成瀬氏の伝記(仁科節編『成瀬先生伝』、中野邦『成瀬仁蔵』など)でも、妻の健康問題やそれについての友人の苦言に悩んだことが指摘されてきたが、妻本人との関係についてはあまり触れられてこなかつたはずである。しかし、

妻への書簡からは、当時の二人の関係や葛藤をうかがい知ることができ(なお、妻から成瀬氏宛の書簡はあまり残されていない)。そこからは、成瀬氏を本当に悩ませたのは、友人の苦言ではなく、妻本人との関係ではなかつたか、とすら感じた。これまで妻宛の書簡はあまり注目されてこなかつたが、その全貌が明らかになったことも今回の書簡集の成果の一つであろう。書簡数も麻生正蔵宛に次いで多い七〇通ほどであり、在米時代を知るうえで多くの貴重な情報を提供するものである(大門泰子「成瀬仁蔵の結婚と離婚」『成瀬記念館』二三三号、二〇〇八年)は、成瀬万寿枝に注目し、妻宛の書簡を一部翻刻している)。

おそらく、日本女子大学の関係者にとつて創立者である成瀬仁蔵氏は、神にも近い崇敬すべき存在であり、キリスト教的、そして学者・教育者的な徳目を兼ね備えた人物としてイメージされているのではないかと思う。しかし、全く予備知識のない私のような門外漢が、一から資料を通して見た人間・成瀬仁蔵は、不完全な、しかし悩み戸惑いながらも理想に向かって奮闘する、一人の明治の青年であった。

成瀬氏は病弱な妻からくり返し帰国の催促を受けたようだが、これに肯んじない。その理由として、当初は金



銭的に難しいとか、友人等へのメンツが立たないといったことを挙げていたが、次第に自らの国家的使命(女子の高等教育)を強調するようになっていく。それは日本女子大学の事業がうまくいったことを知る後世の我々にとって違和感がないものの、当時の成瀬氏の状況からすれば、やや大言壮語であるようにも感じられる。そもそも、現代人の感覚からすれば、妻ひとりの面倒すら見ることもできないで、なぜ天下国家を語るのか、ということになるだろう。しかし、成瀬氏はおそらくこの留学の間に事業のイメージを固めつつあり、そこに邁進しなかったのであろう。この頃、成瀬氏の目標は、女子の高等教育によって理想の「ホーム」を作り、それによって社会改良を行う、というものであったようだが、そのため自らの家庭を犠牲にせざるをえなかったのは、なんという運命の皮肉であろうか。

また、妻の医療・生活費の捻出について、当初、成瀬氏は自らがこれを稼ぐよりも、知人からの借金を選んでいった。労働をしたら学問ができない、演説などで金銭を得るのは、人に情けを乞うことになるので嫌だというのである。さらには外国人に無心をするのも日本人のプライドが邪魔したようだ。この期に及んで見栄やメンツにこだわるのは、妻の状況を考えれば、やや甘えがあるよ

うにも感じられる。ただ、やはり最終的に成瀬氏は自ら金を稼ぐことになる。かくして様々な葛藤と苦労を経験するわけだが、そうして人間的な成長を経たことこそが、教育者・成瀬仁蔵の成功の礎になっているのではないかと感じた。

\*

何の知識もなくせに、勝手な感想ばかり述べてしまった。専門家からすれば的外れな部分や、とうに分かっていることもあるかもしれない。あらかじめお許しを乞いたい。筆耕予定の書簡もあと五〇〇通ほどと聞いているから、来年中には作業を終えられるはずである。とすれば、私にとっては足かけ九年の大きな仕事である(別にこれだけをやってきたわけではないが)。ここであることに気づいた。成瀬氏は一八九四年初頭に帰国した後、女子高等教育機関の設立に奔走し、一九〇一年四月、つまり八年目にして日本女子大学(当時は日本女子大学校)の設立にこぎ着けたのである。これを思えば、自らの歩みの遅さには恥じ入るほかない。もっとも、偉人の歴史的な偉業と比べてみるところで何の意味もないのだから、せいぜい凡人は凡人らしく、遅くとも着実な歩みを中心けるしかあるまい。

(関西外国語大学短期大学部特任講師 きたの じょう)

## 資料紹介

### 成瀬の病床を訪れた人々―「日誌」より

大門 泰子

一九一九(大正八)年三月四日早朝、成瀬仁蔵は六〇年の生涯を閉じた。成瀬は前年の九月に自身の体に違和感を覚えていたが口外せず、学内外の活動に奔走していた。医師の確定的な診断を受けることもなく体を酷使した。その年の年末年始は静養のために国府津の森村男爵別邸で過ごしたが、実際には自身の著述をまとめる仕事や婦一協会の用事で東京と往復するなど無理を重ねていた。年が明けてから、もはや体調の悪さを伏し通せるほどの状態ではなくなった時、はじめて身近な人々に症状の重さを伝えた。

一月半ばに床についてから四〇日余りの日々、成瀬のもとには多くの人が見舞いに訪れたり、電話や電報、あ

るいは手紙、見舞いの品などを送ったりした。この間の成瀬の様子については、成瀬の秘書的役割を果たしていた仁科節の日記に詳しい。仁科は、成瀬のその日の様子、病状のほかに、自身や成瀬の世話をする人々とのやりとりなどを綴っていて、成瀬がどんなに過酷な病状のもとにあっても冷静に時を過ごしていたかも記している。また料理教授であった玉木直と大岡葛枝は、病床にある成瀬の献立と食欲等を詳細に記した記録を残した。<sup>(2)</sup>「先生御病中の御食事に就て」と題して『成瀬先生追懷録<sup>(3)</sup>』でも詳細な献立とともに記している。

本稿で紹介する「大正八年一月 日誌 成瀬氏」と表紙に題された冊子は、成瀬の病床を見舞った人と見舞い

の品を届けた人の名簿で、名前とともに品の内容が記載されている。おそらく成瀬の家に詰めていた人たちがその都度、名前と受け取った見舞いの品のメモをとり、数日ごとにまとめてこの冊子に書き付けたものと思われる<sup>(4)</sup>。郵便などで届けられた品、電話や電報も含まれる。先述の仁科の日記にもそうした記載はあるが全てとはいえず、日記を記していない日もある。玉木らの記録は専ら食事に関するものなので、本資料は最晩年の成瀬を知る上で補完的な役割を果たすことになるであろう。

この度の紹介にあたって、来訪者と成瀬との関係を調べ併せて記載した。生涯にわたり、成瀬が大切にしていた人々の縁が浮かびあがってくる。

### 玉木直と仁科節

成瀬の住居は校内にあり（現成瀬記念館分館）、二階が成瀬の書斎と寝室として使われていた。独身の成瀬の日常生活全般はお手伝いの女性が担っていた。それとは別に一九〇八（明治四一）年からは玉木直が成瀬家の家政の管理を受け持っていた<sup>(5)</sup>。玉木は新潟女学校以来の教え子で、本学家政学部第一回卒業生である。卒業後は家政学部の料理教授を務め、成瀬の食事の世話もした。大岡蔦枝は家政学部二回生で一九一八年五月に七年間のア

メリカ留学から帰ってから、玉木と共に病人食を賄った。成瀬は「お料理をする者は斯ういふ時こそ活きた経験をせねばならぬ、斯ういふ機会を捕へて研究しなければ真の研究は出来ない」と、己を実験台として研究せよと玉木らを奨励した<sup>(6)</sup>。

一方、仁科節は一九〇八年に国文学部を卒業後、桜楓会に勤務し同窓会紙『家庭週報』の編集に携わった。成瀬の秘書的な役割も兼ねていた。先述の通り、一九一八年の年末からの成瀬の静養に同行し、著述作業の助手を務めた。仁科らが成瀬の病状や一月二九日の告別講演の様子をまとめ、『家庭週報』を通して卒業生に伝えた。また一般新聞紙上においても成瀬の病気は大きく報じられた。

成瀬の病気や告別講演の様子を知った学内外の人々が心配し、遠方からもお見舞い客が訪れた。

### 一月二二日から始まる「日誌」

この「日誌」は一月二二日の来訪者の記載から始まる。一週間前の一月一五日、本校講堂で行われた松浦政泰教授<sup>(7)</sup>の告別式に参列した成瀬の姿はただならぬ状態であった。人々がそれを非常に心配したので、成瀬は初めて病気のことを学監麻生正蔵と幹事塘茂太郎に打ち明け、そ

こから慌ただしく医師が迎えられた。翌一六日には仁科節を部屋に呼んで直接伝え、一七日にはさらに多くの教員らに成瀬は病氣のことを話した。看護婦の派遣も依頼した。<sup>8</sup>二三日には矢田浩蔵ら三人の医学博士から肝臓の中に腫瘍があること、治療の道がないという診断結果を自ら受けた。この診断の宣告は、成瀬の意思によるものである。

その日の夕刻、成瀬は仁科を呼んで「病床談として記事をとれ」と命じた。仁科はその翌日から「朝夕の新聞記事に注意を払ふこと、及手紙受付を受持つ」こととなった。その三日後にも成瀬は「病床中の記録をこまかにとり置き」と言った。<sup>9</sup>前述のように、仁科節の日記に成瀬の病状など詳しく記されているのはこうした理由からであった。

### 見舞いに訪れた人々

#### ① 旧知の人

医師の宣告を受けた成瀬は、「大切な身後の事に就いて言ひ置くことを、忘れてはならないと考へそれに就いては、先ず自分の意識の鮮明なうちに、平素信頼する大隈侯、渋沢男、森村男、久保田男だけに、是非お目にか、つて、直接御依頼して置きたい希望を持つてゐる」

と塘幹事に伝えた。<sup>10</sup>この希望に応えて四人が、二二日から二八日にかけて訪れている。この頃はほかに実姉や甥、近い親戚にあたる前原巖太郎(従兄弟)、服部他之助(妻マスの弟)夫妻が来ている。服部はその前日に岡浅子の葬儀で麻生正蔵から成瀬の病氣を聞き、亡くなるまで頻繁に見舞った。「家の跡は相続人を置かないといふこと、妻の墓は私に頼むといふ事、先祖の墓は従弟の前原に、学校の事は後継の人に頼むから、万事よろしいやうに」と成瀬から遺言を受けた。<sup>11</sup>

旧友や同郷の人々も訪れた。成瀬は山口、大阪、奈良、新潟、東京と暮らしてきたなかで、キリスト教(組合派)を通じて多くの人々と関係を築いてきた。白石村治や松村介石、網島佳吉、深井寅造らは四〇年来の関係にある。深井は大和郡山時代の成瀬の暮らしやその頃の自身に対する潔癖な性格などの思い出を『成瀬先生追懷録』で語っている。村井知至はアメリカ留学で寝食を共にした間柄、本学で教鞭もとった。同志社総長の原田助は一八八五年に神戸教会で按手札を受けたが、その際に司会をつとめたのが成瀬である。後掲の資料をみてもわかるように、同志社の卒業生が多い。成瀬自身は卒業生ではないが、同じキリスト教会派の新島襄をとっても尊敬していた。

同郷の人も多い。内海勝二は女子大学創立に至るまで

成瀬に多くの助言を与えた大阪府知事内海忠勝の息子で、忠勝の亡き後、成瀬を第二の父と慕っていた。女流日本画家兼重梅<sup>12)</sup>や政治家の周布公平は成瀬と同じ吉敷の出身、田村一郎も吉敷の出身で東京の学校で教師をしながら自身の勉強をしていた。<sup>13)</sup>

## ② 日本女子大学校支援者

成瀬は女子大学の設立に向けて奔走するなかで渋沢栄一や大隈重信、森村家、廣岡家、三井家ら政財界の人々から大きな支援を受けるようになり、彼らは開校後も評議員となって学園を支えていた。そうした関係者が相次いで何度も見舞っている。賛助員でもあった樺山資紀や沢柳政太郎など時の教育界の重鎮もまた見舞っている。婦一協会や臨時教育会議などの社会的活動を重ねるなかで関係を築いた人々も相次いで見舞う。何度も訪ねている姉崎正治は東京帝国大学宗教学教授で婦一協会の志をともにした人物である。

二月一日には皇后宮太夫大森鍾一が見舞いに訪れ、新聞記事を目にして心配した皇后からの見舞いの言葉と羊羹を手渡した。訪日中のジョン・デューイも夫婦で見舞いに訪れた。デューイとは一九二二(大正元)年八月から翌年三月にかけての欧米外遊の際に交流を深めていた。

## ③ 卒業生―桜楓会

一九〇四年に第一回の卒業生を送り出してから、一七〇〇人余りの卒業生が国内外で同窓会支部を構成していた(桜楓会支部)。成瀬の病状を知って多くの支部から見舞いが寄せられた。地方から上京し、成瀬の病床を見舞った者もいた。そのひとり渡辺たみは、見舞いに訪れた二月六日のことを

昔呼び慣れ給うた私の古い姓を、昔に変わぬ力強い凛とした御声で御呼びになるのであった：「暫くぢやつたね、皆さん変りはないか。子供さんは皆京都に留守居して居ますか今度は皆さんに御心配かけて気の毒ぢやつたね」……<sup>14)</sup>

と雑誌に寄せ、形見の書も書いてもらったと記している。成瀬は病床にて本学の三綱領をはじめ、たくさんの方のために揮毫をしていて、死の前日となった三月三日の絶筆は姪の中島昌子(服部他之助の娘・明治四四年に附属高等女学校卒)にあてた書であった。

疲労を心配する周囲の心配をよそに成瀬は「少しも厭ふ容子がなく、寧ろ進んで訪問者に会つた。」「病苦や疲労を忘れてしまつて、唯々純真な精神の流露を喜ばれ、それ故その心境は、自然に暖かく、和らかな、神々しい態度」は訪問者に「感激と教訓」を与えたという。<sup>15)</sup> 成瀬の

死と向き合う姿勢は後々まで人々に感銘を与えることになる。<sup>(16)</sup>

### 見舞いの品々

見舞いの品でもっとも多いのは金銭や商品切手である。桜楓会支部単位や個人からおくられ、成瀬と昵懇の間柄にあった人々は多額のお見舞いをしている。医師への支払い、派遣看護婦の費用などに充てられたことは想像に難くない。タオルや寝間着、敷布や羽ふとんなど身の回りの品もすぐに使われたのではないだろうか。

鶏卵、鶉の卵を持参する人、ウエファースやカステラなどの菓子類、缶詰、ジャムなどの洋風の品々も届けられた。皇后からおくられた羊羹はその日の昼食に食している。メロンやいちご、柑橘類、梨などの果物も多い。大隈重信が届けたメロンは食事を受け付け難くなった成瀬を喜ばせ「アレは非常においしかったです」と一月二九日の告別講演<sup>(17)</sup>に話している。すっぽん、燕の巣、寿司、そばなどもある。鉢植え、切り花などの植物も多い。季節の水仙や梅などのほか、フリージャヤやシクラメン、シネリヤ、プリムラなどの洋花もある。フリージャヤは成瀬の好んだ花として今日まで伝えられている。重病の成瀬を気遣った珍しい上等な見舞いの品々が届

き、片や成瀬が一口でも食せるようにと、特別な料理を賄える料理人も雇われた。そんな日が続いてきた二月半ば、成瀬は塘茂太郎や玉木直、仁科節らを部屋に呼び、「病中の費用について、あまり大騒ぎせぬやう」に注意をした。夜具や寝間着をさして「私としてはえらい贅沢なものを用ひて居るやうであるが——併しこれは折角人から送られた厚意を着て居るので——ほんとうは木綿でよいのだ、私の平常の主義と違つた贅沢ぶつたことをしてはならない」とも言った。「私は今死の研究をして居るのだ、死の経験をして居るのだ：（中略）誰もこの経験をするのであるからいざといふ時にも決してうろたへたことをしてはならない。平常と全く違つた生活ではないのだから」と、自分の気持ち传达了。「死は私にとつて日常生活の一部であるから一向気にかゝる事ではない<sup>(18)</sup>」、これが成瀬の死生観であつた。

### 成瀬の最期

三月三日夕刻、いよいよ死期が迫る。成瀬は医師から「いよいよよといふ時」を告げられると、麻生正蔵と塘茂太郎に感謝と委嘱との言葉述べ決別の握手をした。意識が遠のくなかで麻生に「全く安心だ」「総て満足だ」と語つたという。成瀬の希望——「自分の最期の病床に見送

りをしたいといふものは、誰でも出来るだけその希望を満足させるやうにしたい——に沿い、狭い室内には入りきらないほどの人々が集まり、成瀬を見送った<sup>20</sup>。

最後の日々、成瀬により添ったのは、女子大学を築きあげてきた仲間と教え子たち、故郷山口の縁者、そして若き日の成瀬が精神のよりどころとしたキリスト教でつながった人々であった。わずか四〇日余りの病床を伝える資料であるが、そこには成瀬のもつ人脈の広さと、何十年にもわたって築きあげてきた人々との厚い信頼関係の一端をみることができると同時に「熱心、親切、至誠の権化」「表裏のない至誠純真な人格」「嚴肅でありましたが、人に対する同情の篤さも常人以上<sup>21</sup>」等と評される成瀬の姿も十分に想像できよう。

(成瀬記念館スタッフ おおかど やすこ)

(1) この日記は『成瀬記念館』No.2～5(一九八六～一九八九年)に復刻紹介されている。

(2) 『食養日記 成瀬先生御病中のお食事』(『家庭週報』五一二～五一八、五二〇、五二二号(大正八年四月一八日～六月二〇日))に掲載

(3) 日本女子大学校二五回生編集、一九二八(昭和三)年四月発行

(4) 日付の前後している箇所が若干ある。毎日のように顔を出していたと思われる麻生正蔵や塘茂太郎等、学園の要職にあつた人々の名前は無い。

(5) 『玉木直子先生』(桂花会代表弘田由己子編集 一九四一(昭和一六)年 桜楓会出版部) 一～三頁

(6) 『成瀬先生追懷録』三九二頁  
(7) 一八六四年生まれ、同志社卒業。開校間もない一九〇一年五月から亡くなるまで英文学部及び附属高等女学校で教鞭をとった。

(8) 武相看護婦会及び日本赤十字社病院からの看護婦派遣状が残っている。一日に複数の人が来ていた。日本赤十字社発行の領収書によれば一日当たりの雇料金は一円二〇銭である。

(9) 『仁科節日記(その二)』(『成瀬記念館』No.3 一九八七年二七頁)

(10) 仁科節編『成瀬先生伝』(一九二八年 桜楓会出版部) 五二三頁

(11) 服部他助「一貫せる奮闘生活―青年時代から晩年まで」『家庭週報』五〇八号 大正八年三月二一日

(12) 一八七二(明治五)年生まれ、麹町区に在住していた。

(13) 成瀬が田村の就職口について、推薦等の配慮を図っていることが書簡に記されている。

(14) 渡邊たみ子「瀨死の成瀬先生を訪ふの記」(『淑女画報』八卷五号 大正八年五月)

(15) 『成瀬先生伝』五三四・五三五頁

(16) 岸本英夫「死を見つめる心ガンとたたかった十年間」(昭和三九年八月 講談社) 一〇五頁参照

(17) 成瀬は講堂に会した生徒や教職員、評議員、卒業生らを前に病気の経過と生死に対する心境、今後への希望などを一時間以上に渡り講演した。万一に備え、医師や看護婦が見守った。(『成瀬先生伝』五一七〜五三三頁)

(18) 「仁科節日記(その三)」二月一六日(『成瀬記念館』No. 4 二三頁)

(19) 「わが継承者に告ぐ」(『家庭週報』五〇二号 大正八年二月五日二頁)

(20) 『成瀬先生伝』五四四・五四五頁

(21) 『成瀬先生追懷録』三五・四四頁





## 「日誌 成瀬家」

明らかに誤字を思われる箇所は訂正し、日付順に並べ替え、備考を加えた。  
主治医の来宅は除いた。

表中の(電)は、電話か電報かは不明

月日	御見舞芳名	お見舞いの品	備 考
1月22日	渋沢男爵様	卵籠(大)一ツ	渋沢栄一 創立委員・評議員
	前原巖太郎		成瀬父方従兄弟
	服部奥様		義弟(服部他之助)の妻 服部里子
	武島先生		武島羽衣 附属高女教諭
	白井先生		白井規矩郎 体操教授
	松信定雄先生		僧侶 教育家
	白石村治様		同志社卒業 新潟県長岡基督教会設立者
	姉崎様	植木鉢三ツ	姉崎正治 東京帝国大学教授 婦一協会同志
	井上雅二様		井上秀(家政学部教授)の夫
	服部他之助先生		義弟 同志社卒業
松村介石様		キリスト者 40年来の友人	
1月23日	島田先生		島田重祐 山口県出身 英語教授
	松浦御茶の先生	卵大箱	松浦恒 嘱託教師(茶道)
	兼重梅子様 お使	お食料品一籠	山口県吉敷出身 画家
	久保田男爵様御使	白梅盆栽一ツ	久保田譲 創立委員・評議員
	国文二部生	靦貝	在校生
	井内奥様	キジ鳥一羽 花瓶一個	名古屋在住 井内千代か
	一色奥様		一色米か
	内海勝二様		内海忠勝(創立委員)の息子
	綱島佳吉様		同志社卒業 牧師 40年来の友人
	服部他之助様	フリジヤ生花一束	前掲(1/22)
1月24日	玉木様	(電)	玉木善作(玉木直の父 呉服商) 新潟以来の支援者
	甲賀先生		甲賀ふじ 附属豊明幼稚園教員
	岸本先生		岸本能武太 同志社卒業 英語教授
	森村様		森村市左衛門 創立発起人・評議員
	瀧澤様		渋沢の誤記か
	村田先生		村田勤(元西洋歴史教授)か村田志賀(礼法教授)
	山内先生	玉子箱(大)(三〇)	山内繁雄 博物学教授
	三井家 江川様		三井家
1月25日	久保田男爵様		前掲(1/23)
	渋沢様		前掲(1/22)
	大隈侯爵令夫人御使	果物、ウヅラ玉子、人参剤、菓子籠	大隈重信(創立委員長・評議員)の妻
	浮田和民様		同志社卒業 西洋人文史教授 40年来の友人
	秦様		成瀬の母方親類
名古屋支部	金拾円	桜楓会名古屋支部	
1月26日	久保田男爵様		前掲(1/23, 25)
	前原巖太郎様	果物籠	前掲(1/22)
	米田いし様	うづら玉子一箱(二十五個)	新潟女学校の教え子か
	玉木善作様	三越切手(金貳拾円)	前掲(1/24)
	子爵 岡部長職様	御菓子折一ツ(カステラ大箱)	岡部長職 賛助員・評議員
	姉崎様	(電)	前掲(1/22)
	男爵 阪谷様	(電)	阪谷芳郎 評議員
	鈴木様		成瀬の実姉とその息子と孫娘(大阪在住)
	尾竹越堂	菓子折一ツ	新潟県出身 画家
1月28日	塘奥様	シネラリヤ鉢	塘茂太郎(幹事 同志社卒業)の妻
	小山徳子 順子	レデースビスケット一箱	順子は5回英文学部、明治41年卒 英語教員
	松浦奥様	ミートジュー一瓶	故松浦正泰(英語教授 同志社卒)の妻か
	諏訪様		

月日	御見舞芳名	お見舞いの品	備考
1月28日	岡本様		岡本土南(3回家政学部卒)か
	大隈侯爵様	果物籠(メロン トマト ストロベリー)	大隈重信 創立委員長・評議員
	渋沢男爵様		前掲(1/22, 25)
	久保田男爵様		前掲(1/23, 25, 26)
	村井吉兵衛様		京都出身 賛助員・評議員
	森村男爵様	(電)	前掲(1/24)
	白石村治様		前掲(1/22)
	セセル様		
	本田千代様	(電)	2回家政学部 明治38年卒
	皆川様	(電)	3回英文学部 明治39年卒
	白井先生		前掲(1/22)
	服部他之助様	燕の巣	前掲(1/22,23)
	福岡秀猪		国際法学者
	深井虎造		キリスト者 私立高輪尋常小学校主事 40年来の友人
	権正董		数学教授
	角田重子	漬物一箱	4回家政学部 明治40年卒
	阿部欽次郎	ウエワース一箱	新潟女学校発起人・教員
佐野		佐野誠(大正8年度より琴嘱託教師)か	
安藤坂三井令夫人		三井家	
1月29日	神田弥蔵	果物大一籠及菓子折一個	牛込区在住者
	多羅間きぬ		6回教育学部 明治42年卒
	名古屋支部	金五拾圓也	桜楓会名古屋支部
	山内八重子	鶏卵一箱(三十個入)	1回家政学部 明治37年卒
	高梨孝子	鶏卵一折(拾五個入)	明治43年退学後、米留学
	田口たけ	お菓子折	
	石山 大倉家	鶏卵一籠(五拾個入)	大倉孫兵衛のことか
	服部他之助	うづらのスープ	前掲(1/22,23,28)
	大橋つる子	奈良漬其他餡種々	1回家政学部 明治37年卒
	九鬼男爵	(電話)	九鬼隆一 創立発起人
	高田早苗		早稲田大学初代学長
	三条西実義		三条西家 歌人
	蔵元しのぶ様	金五円也 餅、豆、葡萄酒	2回家政学部 明治38年卒
	工藤とき	鯛でんぶ一折	8回教育学部 明治44年卒
	旧 小林 金ふさ	鶏卵一折(貳拾個入)	6回教育学部 明治42年卒
	矢野久	ウエファース	
	岩谷可寿	御寝巻	(手紙とともに送付)
	横河民輔		建築家 実業家
	松浦喬		
	会友 市村ちか	水瓜	桜楓会会友
1月30日	村井吉兵衛	金五拾圓也	前掲(1/28)
	中嶋半次郎		早稲田大学教授
	浮田和民先生		前掲(1/25)
	森村開作夫人	羽根蒲団、メリス蒲団二	森村開作は森村市左衛門の息子
	京都支部		桜楓会京都支部
	後藤あい子 家一		1回家政学部 明治37年卒
	高女十七回生		附属高等女学校生
	田村様	(電)	田村新吉(3/3)もしくは田村一郎(2/2)か
	三輪田眞佐子	(電)	賛助員 元漢文学・国文学教授 三輪田高女校長
	大阪 住友吉左衛門 お使い高野激哲	カステラ折大一個	創立委員・評議員
	添田寿一	寒牡丹 カーネーション ポケ フリージャ大花束 鶏卵三十個入一箱	財政経済学者 官僚
	金子子爵		金子堅太郎 賛助員

月日	御見舞芳名	お見舞いの品	備考	
1月30日	中川謙二郎		科外講師	
	橘静二		早稲田大学関係者	
	新渡戸博士	スーパ-瓶	新渡戸稲造 東京女子大学初代学長	
	湯本武比古		元 教育学教授	
	大森大夫	(電話)	皇后宮大夫 大森鐘一	
	ミスア-ズボン	葡萄汁一瓶	元 英語教授	
	羽田竜馬	大梨九個		
	井村延 家一	葛素麵 鯛味噌	1 回家政学部 明治 37 年卒	
	大阪 タケハラ氏	(電報)	竹原友三郎(大阪在住 株式仲買人)	
	兼重梅子	ミルクフ-ード大包一	前掲(1/23)	
	角田重子 家四	漬物一箱	前掲(1/28)	
	高相みつ 家八	(電報)	8 回家政学部 明治 44 年卒	
	京都 原田氏	(電報)	原田助 第七代同志社総長 40 年来の友人	
	村田勤		同志社卒業 元 西洋歴史教授	
1月31日	佐畑良輔		父方の親類	
	鳩山春子	金壺百円也	共立女子職業学校校長	
	高輪 森村様	(電話)	前掲(1/24,28)	
	大杉正之		元 本学書記	
	山内繁雄		前掲(1/24)	
	阿部次郎		美学文学教授	
	渋谷優子	鶏卵一箱(三拾個)	4 回家政学部 明治 40 年卒	
	久保田つぐゑ	果物籠一	附属豊明幼稚園教諭	
	久野ひさ子	タオル一箱(一打入)	久野久 嘱託教師(ピアノ)	
	小島たか 家十三	シネラリヤ大鉢一	13 回家政学部 大正 5 年卒	
	松本幸子		2 回家政学部卒もしくは 6 回国文学部卒	
	石田新太郎		慶応義塾幹事	
	広岡恵三 夫人	かいまき 大花束	広岡浅子(創立発起人・評議員)の娘夫妻	
	南なか		在校生の姉	
	服部他之助	(電話)	前掲(1/22,23,28,29)	
	前原巖太郎	(電話)	前掲(1/22, 26)	
	神田節子	(かに)	14 回教育学部 大正 6 年卒	
	2月1日	弘田由己	五円外二菓子折一箱	1 回国文学部 明治 37 年卒 澄宮養育係
		大森大夫	宮内省御用羊羹など*	前掲(1/30)
戸川残花			戸川安宅 国語教授	
姉崎博士		よし飴一箱	前掲(1/22,26)	
一色		薬用葡萄酒二本	前掲(1/23)	
井上友子		乾はまちしゃ一箱	京都市在住 旧知	
緒明 隆		大ネ-ブル式拾個人一箱	豆州戸田在住	
松山たつ子			9 回国文学部 明治 45 年卒	
林 松子 会友		フリージャ花束	桜楓会会友	
小林珠子			2 回英文学部 明治 38 年卒	
渋谷福子		シクラメン一鉢	15 回英文学部 大正 7 年卒	
松井蔦子		亀屋切手拾円也	共に 3 回家政学部 明治 39 年卒 共に	
前田秋子			広岡信五郎(創立委員 創立賛助員)の娘	
芦澤恒蔵			芦澤しげ(7 回教育学部卒、元附属高女教諭)の父	
麻生奥様			麻生正蔵(同志社卒業 学監)夫人	
杉浦義言		参円	神戸在住者	
石崎廣治郎 全 春江		拾円(切手)	南満州公主領市場町 石崎洋行	
小島きくよ		鶏卵一箱(二拾五個入)	2 回家政学部 明治 38 年卒	
宍戸文治				
森岡常蔵			教育学者 文部官僚	
八田敏	花籠一			
青木志能		嘱託教師(オルガン)		

月日	御見舞芳名	お見舞いの品	備考	
2月1日	安達孝		嘱託教師(ヴァイオリン)	
	長井長義		応用科学教授	
	西垣たま 家政七回生		7回家政学部 明治43年卒	
	神田さわ 家政七回生		7回家政学部 明治43年卒	
	千葉環 家政七回生		7回家政学部 明治43年卒	
2月2日	田口たかの	金五門也	1回英文学部 明治37年卒	
	児島文茂	カステラー箱	嘱託教師(生花)	
	坂仲輔		山口県出身 官僚・経営者	
	加藤銃太郎			
	中原岩三郎 良城郷誼会を代表見舞		山口県吉敷出身 電気事業者	
	芹澤幹方	鶏卵(貳拾個)	会計担当職員	
	湯原元一		教育学者 臨時教育会議委員	
	山根正次		山口県出身 日本医学校校長	
	奥戸善之助 生徒ノ父		生徒の父	
	吉見幸子 生徒ノ母	鶏卵拾五個入一箱	生徒の母	
	田村一郎		山口県吉敷出身 本所夜学校教員	
	前田園子	お茶	校医	
	木村一千代		1回国文学部 明治37年卒	
	速水清	苺代として参丹	12回英文学部 大正4年卒	
	友枝高彦		倫理学者	
	渋谷福子	花鉢及切花	前掲(2/1)	
	緒明 隆	カステラー箱	前掲(2/1)	
	浮田和民		前掲(1/25.30)	
	諸戸清六	白魚三箱	三重県桑名在住	
	高橋正知		高橋一知(英語文学教授)か 前掲(1/30)	
	2月3日	添田寿一		国際法学者
		山田三良 全 市子	果物籠一	
		亀山倭子		5回家政学部 明治41年卒
		畔田	海チシャ	
		柳八重子		1回国文学部 明治37年卒 夫は柳敬介(画家)
		大多和たけ		3回英文学部 明治39年卒
		上代たの		7回英文学部 明治43年卒 附属高女教諭
鈴木不二			7回英文学部 明治43年卒	
高田早苗		水菓子一籠 玉子(二十壹個入)	前掲(1/29)	
堀鉦之丞			理学者	
清水静			5回英文学部 明治41年卒	
富山しか 南貞子		食料品種々	2回家政学部 明治38年卒 2回家政学部 明治38年卒	
乙守氏(平野先生御 親類)			平野浜(附属高女教諭)の親類	
大倉孫兵衛 々 夏子	一森式御座一脚	評議員		
2月4日	吉田こと子	御菓子二折 シクラメン 水仙二鉢	在校生	
	星野行則	葡萄酒一打	加島銀行関係者	
	渡邊鎌吉	菓子折	嘱託教師(西洋料理)	
	木内愛子 小出貞子	カステラー折	木内は附属高女教諭 小出は6回国文学部 明治42年卒	
	西垣たま子	ストローベリー一箱	前掲(2/1)	
	2月5日	高輪 森村様	(電話)	前掲(1/24, 28, 31)
麻生先生奥様			前掲(2/1)	
松浦先生奥様			前掲(1/28)	
丹羽禮子			愛知県在住卒業生か	

月日	御見舞芳名	お見舞いの品	備考
2月5日	佐藤お琴先生	越後梨一籠	元 嘱託教師(琴)
	三木(玉成寮生)	甲州葡萄一籠	在校生
	服部他之助氏夫人		前掲(1/22)
	神谷信子	(電話)	1回英文 明治37年卒
2月6日	神戸支部	壺百円也	桜楓会神戸支部
	奈良県支部	人参葛五箱	桜楓会奈良県支部
	佐久千代子	吉野葛一折	1回家政学部 明治37年卒
	日本育児院理事 五十嵐喜廣	鶏卵拾五個入一	日本育児院理事
	羽仁もと	与兵衛寿司一折	教育家 「家庭の友」創刊者
	渋谷善作	大蟹二	新潟女学校以来の友人 実業家
	竹内とし	鶏卵拾個(手飼)	
	長崎支部	カステラ大折一	桜楓会長崎支部
	市原 宏	バイナッブル缶詰二	
	渡邊タミ		3回国文学部 明治39年卒
	黒田こと	鯛デンプ(おだし料)一箱	8回教育学部 明治44年卒
	三井八郎右衛門	大植鉢一	創立発起人・評議員
	関直彦	カステラー箱	弁護士・政治家 日日新聞社長
西田たか	アイスクリーム一瓶チョコレート シラップ イチゴシラップ	在校生	
2月7日	野村清 若葉会	秋田ノ芭蕉煎一箱	附属高女卒業生
	千葉璋子 七回生	ツク子芋 ササノユキ一箱	7回家政学部 明治43年卒
	花井稲子	ウサギヤノもちかし一箱	在校生
	大橋つる	食料品珍品種々	前掲(1/29)
	小林ます子(高女卒業)	盆栽一	附属高女卒業生
	内海男爵	鳥骨鶏卵拾個 うつら卵三拾個	前掲(1/23)
	福島支部会	梨二箱(六拾個)	桜楓会福島県支部
	中村元嘉		民法査定委員 日本大学関係者
	福田すが	真綿	
2月8日	長田時行	梨(二〇)	同志社卒 40年来の友人
	林 静子	和歌山名産甘錦梅二瓶	10回家政学部 大正2年卒
	神田さ己	自然薯二	前掲(2/1)
	矢島みつ	水菓子一籠	5回家政学部 明治41年卒
	高田早苗		前掲(1/29, 2/3)
	白石村治		前掲(1/22, 28)
	大阪支部	金壺百五拾円也 追加六拾円也	桜楓会大阪支部
	札幌支部	金貳拾円也	桜楓会札幌支部
	2月9日	吉田ふき	長生飴一折(金沢市穴水町第一高 女内)
山田昌吉 生徒ノ父 兄		菓子折一	生徒の父兄
羽仁もと子		白藤ぼたん 与兵衛寿し一	前掲(2/6)
白石村治(御使)		藤、つつじ	前掲(1/22, 28, 2/8)
石暮 卒業生		ネーブル一籠 ウエファース一箱	卒業生
広瀬かね 十五回生		水菓子 カキ 葡萄 梨等	15回英文学部 大正7年卒
2月10日		岸本能武太	大蟹一
	白井規矩郎	うに カニ 瓶詰二	前掲(1/22)
	内藤久寛	菓子折(見積り額五円)	新潟出身 実業家・政治家
	神奈川支部	早成蔬菜品々	桜楓会神奈川支部
	姉崎博士	(電話)	前掲(1/22, 26, 2/1)

月日	御見舞芳名	お見舞いの品	備考
2月10日	井内太郎 々 千代 々 清一	白ネル	千代は2回家政学部 明治38年卒
	大澤謙二		生理学教授
	佐世保支部	有田焼花瓶一	桜楓会佐世保支部
	宮川千枝	スッポンノ水煮一	1回家政学部 明治37年卒
	渋谷さみ		
2月11日	小田川全之	大植込一	土木事業家 古河銀行
	久須美秀三郎	鶏卵(五拾個入)	新潟県出身 実業家・政治家
	前原巖太郎		前掲(1/22,26,31)
	小野塚喜平次		新潟県出身 東京帝国大学教授
	片山しかの	水菓子籠一	8回家政学部 明治44年卒
	齊木ちせ	鶏卵一箱	1回家政学部 明治37年卒
	師範家政一 山本	山口名産ウイロー一	在校生
	大橋つる子御良人	食料品種々	前掲(1/29,2/7)
	多羅間きぬ子御夫婦		前掲(1/29)
	東谷のぶ子	ボンカン二〇	5回家政学部 明治41年卒
	長野市支部	梅盆栽一	桜楓会長野支部
	今岡信一郎御夫婦	御菓子折一	神学者 婦一協会同志
	井上雅二		前掲(1/22)
	長田時行 西大久保一六四山岸氏方		前掲(2/8)
2月12日	浮田友樹 淳子	ボケ プリムラ	浮田和民(1/25)の息子
	原みさお	プリムラ サイネリヤ 水仙 三	14回英文学部 大正6年卒 浮田和民の娘
	福島四郎		婦女新聞社社長
	山中てい子	水菓子籠 お花沢山	在校生
	綱島佳吉	米国アップル お花沢山	前掲(1/23)
	姉崎博士	(電話)	前掲(1/22,26,2/1,10)
	中村しの	金拾円也 中頸城郡板倉村字津田	5回家政学部 明治41年卒
	熊本支部会	金貳拾五円也	桜楓会熊本支部
	在京五回生	金五拾円也	桜楓会在京五回生
	廣海二三郎	金二拾円也	評議員 実業家
	小泉つゆ	金拾円	8回家政学部 明治44年卒
	加藤しげ	漬物 薩摩汁	
	比嘉初子	大瓶子二〇	10回国文学部 大正2年卒
	佐藤よしの	朝取梨一箱	4回国文学部 明治40年卒
	濱田里子	金五円也	2回国文学部 明治38年卒
	渋沢男爵	紅梅植込	前掲(1/22,25,28)
2月13日	渋沢男爵		前掲(1/22,25,28,2/12)
	渡邊英一		附属高女教諭
	幼稚園先生方		附属豊明幼稚園
	永井だい	常盤羹一折	6回教育学部 明治42年卒
	安永末	山口かまぼこ沢山	3回家政学部 明治39年卒
	在京二回生	金五拾参円也	桜楓会在京二回生
	盛岡支部会	金貳拾貳円也	桜楓会盛岡支部
	松浦恒様		前掲(1/23)
2月14日	石本スマ	金貳円也	
	神谷信子	メロン	前掲(2/5)
	松平斐子		2回家政学部 明治38年卒
	渥美お琴の先生	鶏卵貳拾個入 一	渥美繁野(大正8年度より嘱託教師)
	五代龍作		鉦業家 五代友厚の婿養子
	垣内松三		国文学者
上野金太郎(穂積先生)	生麦酒一打	国文学教授 穂積銀関係者か	

月日	御見舞芳名	お見舞いの品	備考
2月15日	太田節子	菓子折	11 回家政学部 大正3年卒
	盛田みち子	水菓子一籠	
	白石村治		前掲(1/22,28,2/8,9)
	服部たか	長崎カステラ大箱	2 回国文学部 明治38年卒
	平城支部	おねまき襦袢二	桜楓会支部平城支部
	東門千代	式拾円	3 回家政学部 明治39年卒
	東谷のぶ		前掲(2/11)
2月16日	新名みち	梅ひしお のし梅一折	15 回師範家政学部 大正7年卒
	福田みち	酒飴一折	2 回家政学部 明治38年卒
	武井てい	鶏卵十五入桜いろ	6 回家政学部 明治42年卒
	浮田博士		前掲(1/25,30,2/2)
	姉崎博士		前掲(1/22,26,2/1,10,12)
	三宅博士		三宅秀 衛生学教授
	須田きよ	金五円也	13 回教育学部 大正5年卒
2月17日	豊留朝子	金参拾円也	6 回国文学部 明治42年卒
	外新庄女学校有志		
	牧山静子	ボンカン五	6 回家政学部 明治42年卒
	大隈侯爵	トメトー ストロベリー	前掲(1/25,28)
	デューアー博士 全 夫人		教育学者ジョン・デューイ
	新渡部令子		
	塩澤絹子	西洋菓子折一	在校生
	永雄てい		在校生
	中村さだ江	金参円	6 回家政学部 明治42年卒
	井上雅二	山鳥一羽	前掲(1/22,2/11)
	久保田男爵		前掲(1/23,25,26,28)
	松村とし	きじ一羽(朝鮮ヨリ)	5 回英文学部 明治41年卒
	安藤坂 三井様	さつま汁 外にお料理	三井家
河村学而		妻マスの叔父	
山本たき子	蕃茄子廿 胡瓜類	7 回家政学部 明治43年	
久野ひさ子		前掲(1/31)	
2月19日	信太久子	芭蕉煎餅 マシメロ 干饅頭	6 回家政学部 明治42年卒
	倉田艶子	祈祷札	13 回家政学部 大正5年卒
	周布公平氏代理夫人 貞子	アメリカ蜂蜜三	山口出身 政治家・官僚
	神田乃武		科外講師
	神田茂三郎 節子父		前掲(1/31)
	堀井	果物切手五円 梅干	1 回家政学部卒堀井静か
	鷹取喜代	金拾円也	
	南高輪尋常小学校職員 生徒総代 国友治二		六代目森村市左衛門開学の私立小学校
	南高輪幼稚園		六代目森村市左衛門開学の私立幼稚園
	改野耕三		兵庫県出身 政治家・実業家
	龍居頼三		南満州鉄道理事
	長田時行		前掲(2/8,11)
	2月20日	八田三喜	
平野まさ枝			10 回家政学部 大正2年卒
三井家代高森愛次郎		金壹百円	三井家
村井吉兵衛			前掲(1/28,30)
大山たま子			青山原宿在住者
小沢卯之助(麻布高等小学校長)			麻布高等小学校長
村井知至			賛助員 同志社卒 科外講師 40年来の友人
大阪支部		かまぼこ一籠	桜楓会大阪支部
名古屋支部		漬物一樽	桜楓会名古屋支部

月日	御見舞芳名	お見舞いの品	備考
2月21日	廣岡郁子	金五拾円也	10 回家政学部 広岡信五郎の姪
	田邊貞吉代 田辺かつ子	トメトー外水菓物一籠	発起人・賛助員
	黄地直子	御菓子折一	12 回家政学部 大正4年卒
	佐藤千代	洋花鉢 乾物	
	武島羽衣先生奥様	カールス一罐	武島又二郎(附属高女教諭)の妻
	澤柳政太郎		教育学者
2月23日	姉崎博士		前掲(1/22,26,2/1,10,12,16)
	中川謙二郎		前掲(1/30)
	三井高修 全 夫人		三井家
	高橋志づ		13 回英文学部 大正5年卒
	神戸 柳井氏	カステラー折	父方の従兄弟
2月24日	岩崎久彌	御菓子一箱(カステラ四)	実業家 三菱
	山本たき	ストロベリー	前掲(2/18)
	小塚浪路	蜜柑二五	1 回家政学部 明治37年卒
	三輪田元道		三輪田高等女学校
	綱島佳吉		前掲(1/23,2/12)
	松村介石		前掲(1/22)
	福田みち		前掲(2/16)
2月25日	井上つた	ぐじの糟漬	12 回家政学部 大正4年卒
	後藤牧太		物理学教授
	佐久千代		前掲(2/6)
	山本たき	植木数鉢	前掲(2/18,24)
	新免常		1 回家政学部 明治37年卒
	在京一回生		桜楓会在京1回生
	稲葉しん		1 回国文学部 明治37年卒
	鈴木のお		1 回家政学部 明治37年卒
	西田市太郎	お花代式円	西田天香 宗教的社會活動家
	柳敬介		画家 柳八重(2/3)の夫
	2月26日	高村光太郎	
前田園子		ストロベリー式拾個人一籠	前掲(2/2)
三井捨子			三井家
森村開作氏夫人		御菓子二折	前掲(1/30)
青木とし子		ストロベリー一籠	6 回家政学部 明治42年卒
永澤慎吉			
山本唯三郎 々たき		トメトー 苺	前掲(2/18, 24, 25)
島田先生奥様		御花	島田重祐(1/23)の妻
塩井きく			
茅野雅子		鶉ノ卵	4 回国文学部 明治40年卒
荻野佳子		お菓漬 敷布一	3 回国文学部 明治39年卒
川瀬初子		金参円	2 回国文学部 明治38年卒
生沼ちく子			在校生
平山クニ子		金式拾円	
宮城県支部			桜楓会宮城県支部
新嘉坡支部		金八円	桜楓会新嘉坡支部
米谷とよ子		吉野葛一	奈良県在住 とよ子は卒業生か
時実直江		バナナ沢山	7 回国文学部 明治43年卒
横川篁子		鶏卵(二拾個人)	13 回家政学部 大正5年卒
神田さわ子		ジャム罐五	前掲(2/1)
大庭政子	鶏卵廿五個人	14 回家政学部 大正6年卒	
関喜久恵			
大岡哲吉	万惣切手五円	大岡篤枝の兄	
2月27日	九鬼男爵	(電話)	前掲(1/29)
	原六郎氏夫人		原六郎(創立発起人 実業家)の妻



月日	御見舞芳名	お見舞いの品	備考
2月27日	今田氏		
	服部他之助	更科そば お寿し	前掲(1/22,23,28,29,31,2/5)
	星島二郎		弁護士・政治家
	正田孝		
	増野花子	金五円也	6回国文学部 明治42年卒
	中山きぬ子	菓子折一	2回家政学部 明治38年卒
	坂本玉枝		3回家政学部 明治39年卒
	岩橋ふみ		附属高女1回 明治35年卒
	新免常	うみたて玉子	前掲(2/25)
	出永澄子	うみたて玉子	
	奥宮かず子	鶏卵五拾個	1回家政学部 明治37年卒
	高田早苗		前掲(1/28,2/3,8)
廣岡かめ子	切花一束	広岡信五郎・浅子の娘	
難田二葉	ちりめん細工肘つき一	元附属高女教諭難田千尋(新潟女学校教女子)の関係者か	
2月28日	小田川達郎 全 美佐雄	スッポン 煮梅 ゆづ味噌	美佐雄は13回家政学部 大正5年卒
	師家四 中島	洋アップル六	在校生
	土岐就太郎	御菓子折	
	群馬県支部	白金紗縮緬布団 一	桜楓会群馬県支部
	在京一回生卅八名	金七拾五円	桜楓会在京1回生(前掲 2/25)
	佐竹晋次郎(鎌倉小児 保育園々父 医師)		鎌倉小児保育園々父 医師
	姉崎博士		前掲(1/22,26,2/1,10,12,16,23)
	西園寺新子留守宅	花弁植込	西園寺公望(創立発起人・創立委員)の娘 附属高女4回 明治38年卒
	栗田俊治郎(牛込原町三ノ七三)		Who's who in Japan 1912の著者
	中川謙二郎	梨七個	前掲(1/30,2/23)
	今西兼二夫人	水菓子一籠	今西兼二は横浜正金銀行勤務
	下田次郎		教育家
好地由太郎		キリスト者	
星島氏	スープ 柚子味噌	前掲(2/27)	
3月2日	内海男爵	烏骨鶏卵菓子三	前掲(1/23, 2/7)
	清水組	葡萄酒 半打	建築業者
	内海男爵御母堂 内海男爵令夫人	お三人御見舞式百円也	内海勝二の母及び妻
	留岡幸助		同志社卒業 牧師 社会事業家
	浮田博士		前掲(1/25,30,2/2,16)
	島田先生		前掲(1/23,2/25)
	大工原順子	御菓子(カステラー一箱)	大工原銀太郎(同志社第九代総長)の妻
	大多和慶三	果物一籠	
	森村開作		前掲(1/30, 2/26)
	山本唯三郎 々 夫人		前掲(2/18, 24, 25, 26)
	神谷信子	人参錠(参円額)	前掲(2/5,14)
	大岡育造		山口県出身 政治家
	秦誉子		母方甥の妻 千葉町院門一〇一一
	川田正静		
	松浦嶺子	御寿し拾人前	松浦政泰か松浦恒の関係者か
	石野緑		13回教育学部 大正5年卒
	塩澤昌貞 日本少年 寮々生代表		奥宮かず(2/27)創設の寮。成瀬も開寮時に祝辞を寄せた
	佐藤貞子		6回教育学部 明治42年卒
佐藤のぶ		附属高女 明治40年卒	
前原巖太郎		前掲(1/22,26,31,2/11)	

月日	御見舞芳名	お見舞いの品	備考
3月2日	佐畑 〃 夫人		前掲(1/31)
	阿邊欽次郎	メリヤスねまき もち菓子折	賛助員 成瀬より受洗 新潟女学校初代幹事 加島銀行役員
	会友 大島貞子 江部朝子	金四円也	1回特志会員 附属高女6回 明治40年卒
	十五回生一同	金貳拾円也	桜楓会 15回生
	十四回生一同	金貳拾五円也	桜楓会 14回生
	中島まさ子	座ふとん一	姪(服部他之助の娘昌子) 附属高女10回 明治44年卒
	正田孝 〃 母堂		前掲(2/27)
	在京十三回生	鉄砲百合一鉢	桜楓会在京13回生
3月3日	藪田ステ子	金参円也	14回教育学部 大正6年卒
	井ノ内千代子	金壹円仕立代トシテ	2回家政学部 明治38年卒
	樺山資紀	上菓子折一	賛助員 評議員 元文部大臣
	宮川総三郎		キリスト教教会関係者か
	国友治二		前掲(2/19) 南高輪尋常小学校主事
	八十島親徳		渋沢栄一関係者
	甫守謹吾		礼法家
	田丸卓郎		物理学者 東京帝国大学教授 ローマ字論者
	市村瓊次郎		元教授 東洋史学者
	大森房吉		地震学者 東京帝国大学教授
	葛岡龍吉		建築学者か
	石橋臥波		民俗学者
	廣瀬実栄 代理 〃 橘三 わかば		評議員
	服部他之助	あんこ餅一折	前掲(1/22,23,28,29,31,2/5,27)
	吉田作弥		賛助員
	田村新吉		神戸市栄町田村商会
	小崎弘道		第二代同志社総長 霊南坂教会牧師
	副島八十六		南洋探検家
	田村一郎		前掲(2/2)
	桜井彦一郎		桜井鷗村 翻訳家 教育家
	羽仁もと子		前掲(2/6,9)
	澤山勇三郎		数学者(幾何学)
	丹下智恵(若葉会員)		附属高女卒業生
	坂本謹吾		柔術家
	佐藤順造		人民新聞社
	白石村治		前掲(1/22,28,2/8,9,15)
	網島佳吉		前掲(1/23,2/12,24)
3月4日	藤原淑子	金五円	藤原千代(1回国文学部卒 寮監)の姪

\*資料には記載なし。「仁科節日記」により確認したところ、「一折は棹物「深みどり」といふ羊羹五棒、他の二折は同じく羊羹製の紅白の月ヶ瀬二十五宛(黒川製)宮内省御用の美しき御品」と記されている。

## 成瀬記念講堂の保存再生とオーセンティシティ

### ——耐震補強改修工事完了に寄せて

是澤 紀子

#### 1. はじめに

本学には成瀬記念講堂をはじめ明治期から昭和初期にかけて建てられた五棟の歴史的建造物が現存する<sup>①</sup>。このうち、創立者であり初代校長の成瀬仁蔵が一九一九(大正八)年に没するまで過ごした住宅は、唯一現存する創立時の建物で、当時は三棟建てられた教師館のうちの一棟であった。現在は「旧成瀬仁蔵住宅(日本女子大学成瀬記念館分館)」として文京区指定有形文化財となっており、近年、不忍通りの拡幅に伴い本学敷地内で移築修理工事が行われたことは記憶に新しい。

成瀬記念館分館より先に、一九七四(昭和四九)年に文京区指定有形文化財第一号として指定されたのが成瀬記念講堂である。当時の成瀬記念講堂は創立六〇周年記念

事業による改修を経ており、その状態を維持管理しつつ継承されてきたが、二〇〇四(平成一六)年の安全調査により二階部分の使用を中止し、さらに二〇一四(平成二六)年の耐震診断調査に基づき、翌年のホームカミングデーを境に全体の使用を中止するに至った。そしてこの度、成瀬の没後一〇〇年を迎える二〇一九(平成三一)年を前に、耐震補強改修工事が実施されたのである。

ここに至るまで、本学の後藤久名誉教授を中心として鈴木賢次名誉教授らによる建築史的な調査や研究が蓄積されてきた<sup>②</sup>。これらをもまえて本稿では、今回の耐震補強改修工事を機に、建築史学および文化財保存学の観点から実施した調査研究よって得られた知見をもとに報告する。そのうえで今回の工事における保存再生手法の

選択について、建築遺産の価値を評価する一基準であるオーセンティシティ (Authenticity) — 元々の起源では、ギリシャ語とラテン語の合成であり、より高い次元から規定するという意の「authoritative」と、原始かつ生来のという意の「original」という二つの概念を合わせもつ言葉<sup>(3)</sup>——の概念から再考しつつ紹介したい。ちなみに世界文化遺産のオーセンティシティとは「真正性」や「真実性」などと訳され、その度合いを測る基準として大きく「Design (意匠)」「Material (材料)」「Workmanship (技術)」「Setting (環境)」の四つが考慮されている。

2. 本学発展の記録と成瀬仁蔵を記憶するモニュメント  
まずは成瀬記念講堂の変遷を紹介しつつ、過去の改修の背景と、建物の位置づけを確認しておこう。

### (1) 煉瓦で築いた豊明図書館兼講堂

現在の成瀬記念講堂は、日本女子大学(旧制 日本女子大学校)が開校した一九〇一(明治三四)年から五年後、教育学部および附属豊明小学校、幼稚園の開校と同時期に「豊明図書館兼講堂」として開館した(図1)。その頃、日露戦争の最中であった一九〇四(明治三七)年末に成瀬が『教育時論』誌に論文を発表し、教育学部の設置を表明するとともに、その翌年に本校は財団法人と



図1 豊明図書館兼講堂  
右端に豊明館(教育学部校舎)との連結部が見える。

なっている。まさに第二の発展段階にあったところ、社会貢献事業団体森村豊明会の寄付によつて建設が実現したのである。

この建物の名称や建設年代、設計者はいささか複雑である。

「豊明図書館兼講堂」と呼称さ

れてきたものの、一九〇五(明治三八)年の建設工事着工後、八月に開催された評議員会の決議には「豊明図書館」と明記され、完成した建物の壁面に取り付けられた石板にも同じく「豊明図書館」と刻印されている。石板には「明治三九年四月竣工」とあるが、設計・施工を請け負った清水滴之助店(のちの清水組であり現在の清水建設)の記録には、「日本女子大学校講堂兼図書室」の名



図2 煉瓦造の地階  
現在は空調設備室や部材保管庫となっている。

称で「明治三八年一月竣工」とある。<sup>(3)</sup>竣工年月の違いは、工期の延長や、石版の年月を開館する新年度に合わせた可能性も考えられよう。

また、異なる名称の背景には、「本邦唯一の婦人図書館」創設を目指した成瀬の理想と卒業生の希望のもと、ゆくゆくは大講堂を別に建てることを視野に入れつつ講堂機能を備えた図書館とした当時の決断がうかがえる。さらに、設計者に関しては清水満之助店の技師であった田辺淳吉と考えられてきたが、<sup>(4)</sup>主担当は、田辺とともに東京帝国大学を卒業し、同じく清水満之助店の技師となった北村耕造であったことが、最近の研究で指摘されている。<sup>(5)</sup>

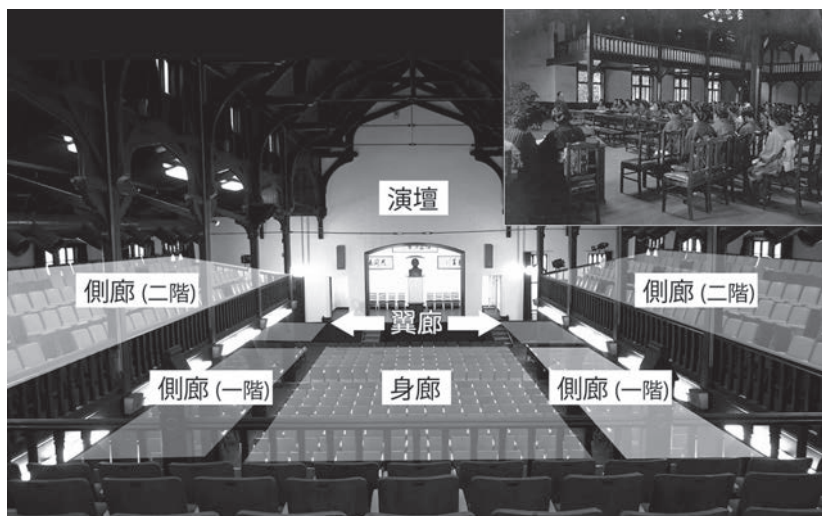


図3 講堂内部空間  
右上は側廊二階が書庫及び閲覧室として利用されていた当時の様子。

創建時の建物は、基礎や地階、外壁はイギリス積みの煉瓦造であり、内部の柱や梁、床などは木造で、屋根を支えるハンマービームトラス——中世のイギリスに出現した木造小屋組——や、ステンドグラスと一体となった壮麗な内部空間は、現在まで良好な保存状態で継承されてきた。とくに基礎や地階は、創建時の煉瓦造を伝える貴重な部分である(図2)。同じ煉瓦造でも、たとえば世界遺産である旧富岡製糸場のように外壁に木の骨組をみせる場合や、木の骨組に接して外側に仕上げ材としてのみ煉瓦を用いる場合は「木骨煉瓦造」であるが、豊明図書館兼講堂期の外壁は、そのいずれでもなく確かに煉瓦造であった。

内部はラテン十字型平面のバシリカ形式といって教会堂のような空間構成をもつ。東に演壇を置き、南北にはステンドグラスのある翼廊を突出させ、中央は身廊と両側廊に分け、側廊には二階を設けている(図3)。

当時の側廊二階は床が水平であり、通常は書庫及び閲覧室としながらも、卒業式などでは棧敷として利用されていた。内部空間を見上げると、全体を覆うようにハンマービームトラスが架かり、天窓より柔らかい光が差し込む屋根を支えている。両側の壁から突出したハンマービームと呼ばれる出し梁が、タイ・バー(鉄棒)でつな

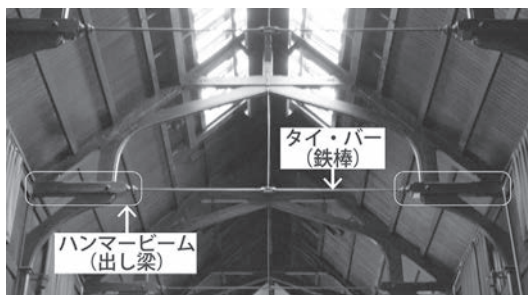


図4 ハンマービームトラス

がることも特徴であり(図4)、その意匠のみならず材料や技術とともに、創建時のオリジナルのトラスが生み出す明治期の大空間を堪能できる。

なお「豊明図書館兼講堂」では、成瀬の「実践倫理」の講義(現在の「教養特別講義」)が行われていた。そして最後の告別講演「我が継承者に告ぐ」こそ、その記録とともに人々に永く記憶され、この建物が本学を象徴するモニュメントとして継承されてきた原点となっている。その後、森村豊明会に由来する名を冠した建物から、創立者の名を冠したモニュメントとなるのは本学創立六〇周年のことである。

## (2) 木造建築として復興再生した豊明講堂期

もともと「豊明図書館兼講堂」は、正面側が教育学部

の校舎「豊明館」と連結して建てられており、いずれも一九二三（大正一二）年の関東大震災により大きな被害を受けた。とくに「豊明館」は被害が著しく撤去されたが、「豊明図書館兼講堂」は煉瓦壁を除いて大きな崩壊を免れた様子が記録されている（図5）。基礎や地階の煉瓦にくわえ、木造による骨組や、ステンドグラスなどの建具類は生かしつつ、外壁を木造へ変更し「豊明講堂」として震災翌年にくさま復興再生を遂げている（図6）。屋根も創建時と同じくスレート葺であった。外壁は下見板張りの軽快なスティックスタイルで、これは当時、学内の他の建物でも採用されており、見慣れた外観であった。身廊上部など一部には縦板張りも見える。この縦板や、横板張りの下見板の一部は、解体してみると現在の縦板の下に確認できる（図7）。これらは豊明講堂期のオリジナルであり、生きてきた歴史の証拠である。ちょうど関東大震災の一年前には、女子総合大学の開設を目指して募金が始められていた。震災時の写真から、書庫及び



図5 関東大震災直後の様子



図7 妻壁に残る下見板一枚毎に間引かれて現存していた。



図8 豊明講堂期の側廊二階棧敷席



図6 復興再生を遂げた豊明講堂

閲覧室であった側廊二階を明るくするように窓が設けられるなど、改修中であったことが知られている。まさに第三の発展段階にあった出来事といえよう。すぐさま復興再生に着手した関係者の熱意が偲ばれる。

この時、「豊明館」と連結していたことから元々はなかった正面ファサードが初めて整備されたほか、平らな床で書架が並んでいた側廊の二階は、床高を下げて段差が設けられ、棧敷席となった(図8)。これに伴い、内部柱に鉄製方杖を入れるなど補強が施されている。さらに演壇正面のプロセニアム・アーチは、翼廊のステンドグラスと同様にゴシック風の尖頭アーチであったが、震災後は高さを抑えたチューダーアーチとなり(図9)、のちの昭和の改修を機に現在のような円弧となっている。

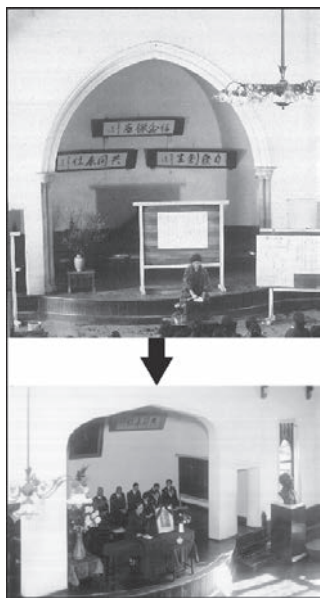


図9 演壇のアーチの変化

### (3) モニュメントとしての成瀬記念講堂期

豊明講堂期を経て

一九六一(昭和三六)年には、構造補強や設備更新にくわえ、屋根はス

レート葺から鉄板葺となり、外壁は下見板張りから縦板張りとする改修が施された(図10)。創立

六〇周年記念事業の一つであり、学部学科の充実や大学院の設置など全体の充実を図るなかで、「豊明講堂」は「成瀬記念講堂」と名称を改め、永く保存する目的で実施されたのである。

当時の構造補強により外部に鉄骨のバットレスが設置されたものの、後世に耐震補強の基準が強化されるに伴い、一九八九(平成元)年そして今回の耐震補強工事が重ねて実施されている。こうした補強への試みは関東大震災後も例外ではなく、タイ・パールの一部追加や鉄製の

方杖による内部柱の補強などが施されていた。これらを踏まえて今回、新たに構造が検討された結果、鉄骨のバットレスは、設置箇所の木部に水を呼び込んでいるととも



図10 昭和36年改修後の成瀬記念講堂





図11 存置されたバットレスの一部

に転倒の恐れもあり、撤去しても構造面の影響はないことが確認された。このことから百年館側は撤去し、塀に囲われた目白通り側のみメンテナンスが可能な高さまで存置することで(図11)、歴史の一側面を保持する手法を採用している。制度の要請もさることながら、その時代の思想とともに、科学技術の発展に伴う価値の解釈が、保存再生の手法選択に大きな影響を与える。

以上、三つの時期を経てきた現在の成瀬記念講堂は、各時期の変化の痕跡が蓄積された状態にあった。今回の耐震補強改修工事では、このような重層した歴史の価値を保存し、後世に継承していくために、縦板張りとなつた一九六一(昭和三六)年頃の姿を復旧することが目指

されたのである。「成瀬記念講堂」は本学を象徴するモニュメントであるが、これは創建時というより後世に獲得され、新しい名称とともに広く共有化された価値でもある。今回、一九六一(昭和三六)年頃の姿に復旧されたことは、建物の歴史と変遷を語るうえで意義深いといえよう。

### 3. 耐震補強改修工事の概要と手法の選択

今回の工事は、二〇一七(平成二九)年六月から翌年八月にかけて、総工事費約二億八千万円で実施された。文京区指定有形文化財としての工事に先立ち、学内では筆者も一員として参加した「成瀬記念講堂耐震改修ワーキング」が二〇一五(平成二七)年六月より組織され、方針が協議されている。なお、設計監理は株式会社文化継承建築設計事務所<sup>(12)</sup>、施工は清水建設株式会社である。今回の目的は、耐震補強工事に伴って改修を行い、安全に使用できる建物とすることであり、文化財として建物の特質を明らかにするべく詳細な実測調査や仕様調査、古写真等の資料調査が実施され、その結果に基づき工事の方針が決定している。

#### (1) 耐震補強と設備更新——今後の活用に向けて

耐震補強として、屋根や壁、二階床における構造用合



図12 新たに木枠が挿入された屋根面  
木枠の間に断熱材を入れて構造用合板を設置。



図13 構造用合板により補強された外壁



図14 側廊一階天井側からの補強

板の設置にくわえ、煉瓦造の基礎と木造の軸組をアンカーにより緊結する補強が施された。構造用合板の設置では、外観および内観を損なわないよう配慮している。たとえば屋根は、ハンマービームを用いた小屋組をみせる化粧屋根裏となっているため、外側の屋根面から構造用合板や断熱材を設置する手法を採用している(図12)。

この方針は壁も同様であり、内部の漆喰壁を損なわないよう、外部の縦板と、その内側に残る旧下見板をいったん解体し、柱や間柱のあいだに構造用合板や断熱材を入れて(図13)、旧下見板と縦板を復旧している。側廊二階の床では、解体による変更を最小限にするため一階

天井側から解体し、構造用合板が施された(図14)。ここではAV機器用のケーブルも挿入し、天井の復旧後、各所にプロジェクターやモニターを設置している。

また、今後の活用に向けて椅子は大半が更新された。ただし側廊二階の栈敷席に関しては、災害時に二方向への避難経路を確保できず、二〇一四(平成二六)年の耐震診断調査を経て使用停止となった箇所であり、現状を尊重して保存している。このほか断熱性を上げるために、窓下の床には空調の吹出し口を設けるとともに、窓は、既存の窓の内側に新規の窓を設けて二重になっている。窓に限らず既存の建具には、創建時から現在まで数種類の金物があり、今回いず

れもできる限り採用された。

以上のように、活用の際には現状を変更して整備する箇所も多々生じるなかで、文化財として最小限の介入を試みるとともに、将来の保存再生を視野に入れつつ、元に戻すこともできるよう可逆性を考慮した手法の選択に注意が図られている。

## (2) 解体と調査——将来の保存再生に向けて

手法の選択に必要な情報の多くは、解体によってはじめて明らかになる。逆に言えば、建物から離れてしまった証拠や記録では伝えられない情報はあまりにも多い。ここでは屋根や塗装をめぐる解体と調査を中心に、その一端をみてみよう。

屋根は、事前の資料調査より一九六一（昭和三十六）年にスレート葺から鉄板葺へと葺き替えられたことが判明していた。今回これを裏付けるように、屋根の解体によって主に幅六寸で長さ一尺二寸の天然スレートがわずかに発見され、その下地となる杉板の土居葺も現存していた。これを受けて、天然スレートは将来の保存再生に向けてサンプルとして保管することとし、土居葺は一部を残して施工された。今回は維持管理を考慮して、防水性能をもつルーフィングの上にガルバリウム鋼板を葺くこととなったが、将来にわたりスレート葺の仕様がわかるような措置を施している。なお、講堂天井付近で出火したという一九一四（大正三三）年の火災による焼け跡も今回の解体調査によって確認できた。

塗装に関しては屋根のほか、壁や建具廻りなどから試料を採取し、実体顕微鏡や光学顕微鏡で観察（図15）するという分析を、現地でのこすり出し調査（図16）や塗

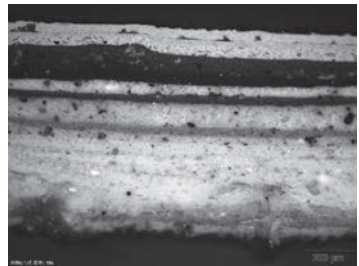


図15 塗装試料の光学顕微鏡写真

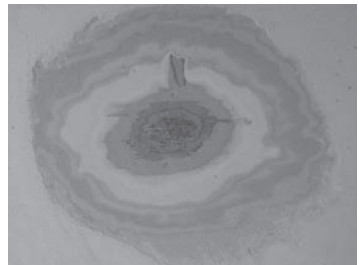


図16 こすり出し調査の事例

装工事の履歴、卒業アルバムなどの資料調査とあわせて実施した。各々の部位を比較することで全体像が露わになってくる。たとえば縦板の下に残されていた下見板により豊明講堂期の塗装とその変遷が明らかになると、ステンドグラス<sup>(15)</sup>の枠にも一部に同じ塗装が見られたことで、豊明講堂期は外壁と建具枠が同一の色調であったことが判明した。さらに豊明講堂期の塗装が特定できたことで、豊明図書館兼講堂期の塗装や、さらには成瀬記念講堂期の塗装が判明したのである。これは各時期のオリジナルの材料が建物に残されていたからこそ知り得た「実体」である。こうした豊かな情報、ともすれば現代の科学と技術では未だ知り得ない情報を後世にゆだねる

ことも視野に入れて継承することが、文化財のオーセンティシティを継承することに繋がっている。

なお、今回の資料調査により、成瀬記念講堂期に縦板張りとなった際、外壁は木目をみせるクリアラッカー仕上げであったことがわかり、演壇南の排気小屋を解体してみると当時の仕上げが現存していた。その劣化は早かったとみられ、一九六二（昭和三七）年度にはペンキ塗装が施されていることが判明した。今回は維持管理を考慮し、この時期のペンキ塗装を再現している。

以上のように、建物自体がもつ情報を重視する文化財修理では、新たに加えた材料に対して後世の人々が古材と区別できるように焼印や刻印を施している。今回は耐震補強材に「平成二九年度耐震補強」、その他の補修材に同年度で「修補」という二種類の焼印が施された。

#### 4. おわりに——実体としてのオーセンティシティ

現在の成瀬記念講堂は、その姿から大きく三つの時期にわたり継承されてきた。まず創建当初の豊明図書館兼講堂期は、現在のような正面ファサードがなく「豊明館」と連結していた。当時の煉瓦壁は基礎や地階を除いて失われている現状であることに鑑みると、根拠のある再建を行うことが難しい時期の姿である。くわえて創建当初

の側廊の二階や演壇正面の改変、正面入り口部分など増築により整備された箇所は少なくないことを考慮すれば、煉瓦造の豊明図書館兼講堂期に復することは、後世の変遷も失われ、歴史的建造物としてのオーセンティシティの保持は最も困難とみられた。

仮に失われた煉瓦壁を再建する場合、内部空間や外観について創建当初の形態や意匠を再現し、かつ安全に使用できる建物とするためには、たとえば煉瓦壁を自立させるよう鉄骨の柱を入れたり、煉瓦壁を支持するために基礎を鉄筋コンクリート造とするなど、創建当初の煉瓦造が唯一残る部分にまで変更が及ぶことが懸念される。各時期のオリジナルの部分や創建後の重層的な価値を減じてまで煉瓦壁を再建することが、果たして成瀬記念講堂のオーセンティシティを継承することになるのか、ということが問われたのである。

今回の工事では、創立六〇周年に際して縦板張りに改修された状態を維持するという方針のもと、縦板の下に一部現存する下見板もそのままに、三つの時期の痕跡を最大限保存して、その実体を後世に継承する手法を採用した。すなわち、成瀬記念講堂は将来にそれぞれの時期の姿に「復元」あるいは「復原」される可能性も秘めているといえよう。

今回の工事に伴う調査を経て、ファサードがなく煉瓦壁が失われてしまった豊明図書館講堂期に復するのであれば、失われたものを一定の根拠にしたがって新たに再現あるいは再建する「復元」の要素が色濃くなるであろうし、下見板などオリジナルの材料や痕跡が残る豊明講堂期に復するのであれば、現存するものを痕跡などにしたがってある時代の姿に修理・修復する「復原」の要素が色濃くなると筆者は考える。

過去は未来のためにある。今後は本学を象徴するモニュメントとして、後世に価値の多様性と重層性をふまえて検証できるように、今回の工事をもとに作成される報告書や記録映画<sup>(6)</sup>、部材のサンプル保管などを活用し、伝えていくことが望まれる。

(日本女子大学家政学部住居学科  
准教授 これさわ のりこ)

## 図版出典

図1、3(右上)、5、6、8～10は成瀬記念館所蔵写真、

図7は本学施設課所蔵写真、図3の説明図は工事記録映画より引用改変した。他注記なしは筆者撮影。

(1) 成瀬記念館分館は、「旧成瀬仁蔵住宅(日本女子大学成瀬記念館分館)」として二〇〇七(平成一九)年に、家具一四点とともに文京区指定有形文化財(建造物)に指定されている。二〇一五(平成二七)年から移築修理工事が行われ、二〇一七(平成二九)年の六月二〇日に竣工した。このほか本学には、一九〇四(明治三七)年に

本校の茶道教授であった松浦詮により建てられた茶室「静寧亭」が二度の移築を経てなお現存し、同じく本校の教授であった佐藤功一設計により建てられた二棟の歴史的建造物——一九二六(大正一五)年の樟溪館と一九二七(昭和二)年の明桂寮——が現存する。

(2) 後藤久『成瀬仁蔵生誕150年記念 日本女子大学成瀬記念講堂—創立者の夢と明治の洋風建築—』(学校法人日本女子大学 二〇〇八年)、後藤久・鈴木賢次ほか「日本女子大学成瀬記念講堂に関する研究」(『日本女子大学総合研究所紀要』第二号 一九九九年 一二五—一八七頁)など。

(3) デイヴィッド・ローエンタール「変わりゆくオーセンティシティの基準」『建築史学』第二四号(一九九五年三月)七六頁。

(4) 建築遺産の保存と再生に関する諸問題は、災害時となると一気に噴出する。東日本大震災をきっかけに現地で再

考したシンポジウムの記録として、野村俊一・是澤紀子編『建築遺産 保存と再生の思考——災害・空間・歴史』

(東北大学出版会 二〇二二)がある。

(5) 契約書には「講堂兼書籍館」とある。

(6) 「本邦唯一の婦人図書館成らんとす」との記事が『家庭

週報』No.92(桜楓会 一九〇七)に掲載された。

(7) 田辺淳吉によるステンドグラスのスケッチが明治村に残

されており、その日付は明治三九(一九〇六)年二月一

日とある。

(8) 松波秀子氏による「成瀬記念講堂—設計者のこと、震災

復旧のこと、保存修復のことなど」(『成瀬記念館』No.22

日本女子大学成瀬記念館 二〇〇八年一月 七六頁)や

「日本女子大学成瀬記念講堂の設計者について」(日本建

築学会大会学術講演梗概集 二〇〇八年九月 二八一—

二八二頁)に記載。

(9) タイ・バーは、ステンドグラスのある外壁部分など一部

が後世に撤去されたほか、関東大震災後の改修で設置さ

れた箇所も一カ所認められる。

(10) 後藤久『成瀬仁蔵生誕150年記念 日本女子大学成瀬

記念講堂—創立者の夢と明治の洋風建築—』(日本女子

大学 二〇〇八年) 二七頁。

(11) 今回の構造設計は山脇克彦氏(株式会社山脇克彦建築構

造設計)による。

(12) 文化財建造物修理主任技術者講習会(文化庁主催)を修

了した加藤雅大氏が代表を務める一級建築士事務所。

(13) 椅子の更新はコトブキシーティング株式会社による。

(14) 試験片の採取、作成及び顕微鏡観察と分析は、島津美子

氏(国立歴史民俗博物館准教授)とともに、瀬尾由紀子

氏・栗山実咲氏・中村奈々恵氏(本学家政学部住居学科

生)による協力のもと実施した。

(15) ステンドグラスは表面の質感が異なる箇所があり、過去

に取り換えられた色ガラスも見受けられる。今回、成瀬

記念講堂再生・卒業生の会(レンガの会)の寄付を得て、

榎トーガラにより広島の工房にて補修された。

(16) 記録映画の制作は、筆者が企画・構成・監修を行い、前

掲の加藤雅大氏・山脇克彦氏にくわえ清水里江子氏(本

学家政学部住居学科生)による構成協力、菅原重成氏(え

び探)・山本真二氏による撮影・制作協力のもと実施した。

## 新刊紹介

### 高野晴代監修 『広岡浅子「草詠」』

翰林書房

後藤 祥子



この機会に秘蔵された広岡家から公刊を託されたもの。

高野教授に坂本清恵教授（国語学）が協力し、王朝和歌専攻の教員・院生・学生の注釈による。簡注ながら、和漢の源泉や、明治開化期の行事などの注釈が行き届いて興味深い。

構成は春夏秋冬恋雑の全六巻、全396首。そしてこの六巻構成は古今集以来の勅撰集の伝統に依る。幕

今年二〇一九年は、本学創立者成瀬仁蔵の歿後百年にあたるが、同年の一九一九年は本学草創期の主だった人々が相次いで逝かれたというので、成瀬記念館は「哀惜の1919年―成瀬仁蔵・広岡浅子・森村市左衛門・松浦政泰・平野浜 没後100年」展を行った。一月一三日松浦教授、同一四日の広岡浅子女史の悲報を、重篤の床で成瀬先生はどう聞

かれたであろう。わけでも、本学創設の真に実質的後援者であり、創立後も支援の先頭に立ったのみならず、桜楓会や軽井沢の活動に浅からず関わった広岡女史は、一方で、最晩年の基督教入信に成瀬校長の紹介による宮川牧師を師としたと言い、相互の信頼関係は記念館に残された少なからぬ書簡からも窺われると言

う。『草詠』はその広岡女史の家集で、

末素封家の夫人の教養として、桂園派の歌の師の指導を受けたであろうと推測され、またかなの字母分析では大名夫人などに近いという（巻末解説）。多くの歌の右肩に朱の合点（線）が施され、撰歌、推敲の跡が窺われるが、何よりも感動的なのはその歌境の完成度の高さ、静謐な雰囲気であろう。連続テレビ小説「あさが来た」で満喫した女性実業家の面貌とは打って変わって、時節の移り変わりに沈潜し、山居に馴染む志向に気づかされる。秀句（聞かせ所の言い回し）を含む歌も多い。

春9 世の中の春を埋みて夕暮れに雪を誘へる風の寒けさ〔余寒風〕題）

春21 山の端はそことも分かず消え果てて霞に落つる春の夜の月〔春月〕題）

雑302 世を憂しと深山の庵に住みかへてむかしの友を夢にみるか

な〔山家友〕題）

雑307 思ふこと言はぬましらを友として深山の奥に住むぞ静けき〔同題〕

無論、詠歌の素材が実人生そのままである筈もなく、（それは殊に、恋部の歌群が勅撰集お定まりの恋題に即していることに顕著で、「後朝恋」や「暁恋」などは、事実であれば家庭夫人が家集に留める筈もない）恋の巻以外にも名所詠など仮構はあろう。恋題以外で囑目を疑わせるのは、所謂、名所詠の類である。

冬249 打ち寄する波の雫につららゐて下枝寒けき三保の松原〔寒松〕題二首のうち）

雑314 年を経し三保の松原来てみれば苔の衣ぞなおかかりける〔松経年〕題）

春4 塩竈の浦の煙も立ち添ひて春を深むる朝霞かな〔霞添春色〕題）  
これらは名所題でないのに名所が

詠みこまれ、松や霞といった歌材に付き物として前置したかと思わせる。一方でこの「塩竈」、雑部巻頭に、「旧平戸松浦家先祖河原左大臣の千年忌の歌集に塩竈の煙といふ題にて」と詞書して、

雑293 塩竈の名のみ流れて鴨川は川波のみぞうち煙るなり

同294 藻塩焼く浦の煙も末つひに御空の雲とたちなびきつつ〔塩竈煙〕題）

の二首があつて、融左大臣の河原院（現枳殻邸）が千年の時を経て息づく姿と、そうした詠歌環境に身を置いた作者に感動を禁じ得ない。

さてこの歌集の、何よりも実感詠を印象づけるのは聴覚である。

春59 難波江の芦間を分くる海人小舟声のみ洩れて霞む今朝かな〔霞隔行舟〕題）

同60 浦近く唐艫の音は聞こえつつ霞こめたる波の上かな〔同題〕



同99 いづこにかいさりなすら  
む磯かげの霞かくれに声ぞ聞こゆる  
〔浦霞〕題

古歌の発想や言い回しに学びながら陳腐な「見立て」技法が無いのは、いかにも伶俐なこの人らしい。漢詩取り（孟浩然・王国維など）や源氏物語・枕草子への親炙が窺われ、古今集歌人では伊勢への傾倒が著しいという（解説）。学ぶことに人並外れて意欲的だったこの人にとって、歌集の一応の成立頃（「冬」巻を手にする表紙写真は三十代かという）までの環境に許された殆ど唯一の分野が歌学びだったかと思われる。「学び」を歌った歌がある。

春15 文学ぶ窓の隙洩る小夜風に薫るもゆかし軒の梅が香〔梅薫夜風〕題

春110 鶯の朝寝諫むる声すなり学びの窓の梅や咲きけむ〔梅花始開〕題

いずれも題そのものに「学び」の含意があるわけではない。変哲もない四季題に「学び」を籠めているのである。その学問への欲求を満たすべく「女子大学」の設立をいかに希求したか、それはそのまま、雑部後半の「女子大学」詠歌群の豊かさになって現れる。

雑346 散りやすき桜紅葉の名にも似ず永遠の命の友どちの宿〔桜楓会のはたらき愛でて詠める〕  
また「三十九年八月三泉寮の開の式に臨みて詠める」と題して

雑352 底清に岩間の清水汲み上げて深き教への心こそ知れ  
或いはまた、「成瀬先生講演集の口書に詠める」と題する

雑355 永久の命の路の教え草踏み分けてこそ行くべかりけれ  
の歌は、一九〇七年二月二四日発行の『成瀬仁蔵先生述講演集 第一』の扉に掲載されたものという

（「解」欄）。さらに「四一年夏季三泉寮の六回生結論会に臨みて結論文の末に真善美を各部に喩へて詠める」と題して、真を教育学部、善を家政学部、美を和英両文学部に充てて詠んでいる。また学寮では「楓寮・桜寮・晩香寮」が詠まれている。

晩年、浅子女史は基督教に入信した（雑373）。宮川経輝師は成瀬校長の紹介という。成瀬自身が大学創設は無宗教で進めながら決して棄教したわけではなく、敬虔な基督者であったことを改めて実感するのである。それにつけても、偉大な女性の家集を包む表紙写真のなんと清楚で物静かなことか。これまで知られてきた三泉寮の庭でテニスラケットを手にする洋装の浅子女史とはすっかり趣を異にする世界が広がる。この振幅の大きさは見事である。

（日本女子大学名誉教授

しゅうこう）

『成瀬仁蔵著作集』に収録されなかつた新資料を順次発表する。今回は講話二編である。

式日、始業式、終業式など行事の折の、また実践倫理の成瀬校長の講話を丹念に記録したノートが残されている。罫紙にカーボンはさんで浄書され、各々こよりで綴じられたノートには、成瀬自身による訂正、加筆の跡が残る。なお、

- 一、表記に関しては、片仮名書きの原文筆記を平仮名表記とし、明らかな誤字、脱字を改めるとともに、文字を統一した。
- 一、あて字については原文通りとした。
- 一、文意を明確にするため、句読点を必要な限り付した。
- 一、欄外に書かれていた註を、一部見出しとした。

## 成瀬仁蔵講話

## 1

## 大学部二、三年にて

— 大正三年十一月二十五日 —

年内も段々時が少なくなりまして、しなければならぬことが沢山残つて居りますが、先づ第一着手として、我々の生活の状態及び方法を直したい。其の意味にも方法にもいろいろありますが、先づ今日は我々個人の身体及び

精神、心靈に於ける病弊を治したいと云ふことであります。病弊と云ふと何かわるいことでもあるかのやうに聞えますが、殊に此の頃わるいことがあるとか、又は此の頃発生したところの欠点があると云ふことではなく、寧

る之れは宿弊とも言ふべきもの、又社会一般の傾向とも言ふべきものである。殊に、我々の国とか家庭、寮舎とか云ふ我々に接近した間に行はれて居る直接な関係、又は適切な事柄をさして申すのであります。其の病弊を、も一つ皆さんが自分の直接の事柄であると云ふやうにお考へになり、又其の状態を極シリヤスに感知なさるやうに説明することが必要でありますけれ共、単刀直入に其の問題に入りたいと思ひます。

私は、今日あなた方の病氣と思ふところを大分以前から診察をして見て、其の病原は多分こゝであらうと思ふことを察知して居るのであります。病氣と云へば欠点がある、不完全である、不平均である、不調子であると云ふことになる。其の病氣に二つあって、一つは栄養不足である。内容が貧弱である、飢えかつて居る、どーも満足でないと云ふ病氣であります。之れは何と名をつけたらよからうか。まあ夫れは此頃、子供にもあります。三年生は卒業と云ふことが近づくのであるから、果して卒業させることが出来るかどーかと云ふことを年内にきめねばならぬ。又、二年以下は進級と云ふこと、之れも年内にきめねばならぬ。かう云ふことについて、いろいろ心配がある。之れも病原の一つであるから、其の病原からなほさねばなりません。

## Real living

さう云ふ病氣を生じて来たると云ふ最近の原因と云ふものはどー云ふことであるかと云ふと、つまり私が栄養不足と言ひましたが、英語では Real living 実生活と言ふ此の実生活がよく出来て居らぬと云ふことである。

## 空想生活について

今日起つて来るところのさまざまの病原は、どー云ふところから起つて来ると云ふと、Live your own life と云ふ詞がある。実生活を欠くと云ふことの裏は空想の生活、想像の生活と云ふことになる。夫れを知識とし形式として、ほんどーに生活して居ない。いろいろ本をよんで居る、いろいろ人から説をきいて居るけれ共、之を自分の實際生活にすることが不十分であると云ふことになります。故に実が結ばない。

夫れで生活を二つに分けて、一つを意志の生活、所謂目的をもつて居るところの生活と言ひ、今一つを感情の生活と言ひます。感情の生活の中で愛の生活と云ふこと、之れは自分が人に対する愛と、人から自分が愛せらるゝところの愛と云ふことがこもつて居る。其の愛を哲学上から研究し、或は文学の方面に於て聞かざる、ことが多

い。私が栄養不良と言ふのは、其の方面に於てうえて居り、かつえて居り、心が荒れずさんで居ると云ふことである。故に、どーしても根底に於て其の要求を満足することの出来ないと言ふところに、其の病氣の原因が横たはつて居るであらうと思ふ。

今一つは意志の方面である。之れは即ち向上心である。どーしても人間は向上したいのである。さうして、真に自分と云ふ人格其の物が、も少し發展したいのである。其の内容がも少し変りたいのである。知力もも少し展びたい。力もも少し發展したいと云ふ深い心の要求である。然るに此の意志の要求を満たすことが不十分である。ところが、意志について研究をして居る、文学で味はうて居る。けれ共どーしても意志が毎日ほんとの生活をしないのである。此の二方面が我々の内に欠けて居る。此の欠陥が私共の大いなる欠点となつて居ると思ふのであります。

### 病原の根絶について

夫れで今一番急務なことは、其の病原を如何になほすか、如何に根絶するかと云ふことが問題であります。今日どーしてさう云ふ病原が我々に出来たかと云ふことを一、二申しておかねばならぬ。其の訳の一つは、今日の

教育の仕方のわるいと云ふことから来て居る。

### 今日の教育の弊について

今日の教育は知と云ふことに余り偏り過ぎたのである。それから今日は、其の知ると云ふことが事実の知識の分量に重きをおきすぎたのである。故に、事実の知識を収集することにのみ勉めて居る。さうして其の知識は多く暗記に止まつて、頭の中で事実の知識を構成して居る。故に、その知識が空想となり形式となつて、真に実行となり満足とはなつて居らぬ。之れが空生活にならしめた原因であり、過程である。

### 犠牲

も一つ、どーしてもあなた方が知つておかねばならぬことがある。夫れは近世文学をよみ損うたと云ふことである。即ち一知半解の知識が文学から来て居ると云ふことである。そこで、この病原をどーして根絶し得るかと言ふことを申したい。目に見えぬところに、いろいろの欠点がある。其の原因は愛がかけて居るからで、愛と云ふことには二つの意味があります。一つは私共が他に對する愛で、其の愛の甚だしくなつたのを犠牲と言ふ。どーしても誰れか愛するものがなくてはならぬ。宗教の

出来たのも、家庭の出来たのも、社会、国家の成立したのも之れがためである。真に自分が人を愛したならば、其の病人の心がなほるのである。

### Christ

此の世界で最も多くの人を愛せられたのは、Christである。親のない子は誠に不幸なもので、私共は六つのお母さんがなくなつたと云ふことは、今日迄少しも忘れたと云ふことはない。何か自分を捧げるところのもの、愛するところの対象物がなくてはならぬ。夫れから親友、益友と云ふものがある。之れが宗教になると絶対無限、天の父或は母と云ふものがある。絶対或は神に対して自分を捧げると云ふことによつて癒やさるゝのである。も一つは、自分に対して同情をして貰ひたい。父の如く、母の如く、兄弟の如く、一心同体の如くになつて貰ひたいと云ふことを要求して居る。其の生活、其の關係、其の交通の出来ない人は、誠に心が飢えかつて居る。さう云ふ人は必ず神経衰弱になる。夫れから、心が曲るとか嫉妬するとか云ふことも皆愛の欠乏から起るのである。

故に之れを治すにはどうするかと云ふと、之れを治すために病院があり、保養院があり、寺院があり、寮舎と

云ふものがあり、家庭と云ふものがある。斯う云ふところは、さう云ふ病人を保養させるところである。其の病気をなほすに大切なものを境遇と言ふ。其の境遇を作るために或は講釈をし説教をし、いろいろな方法が社会的に講ぜられて居るのであります。けれども病院に入れたからとて寮舎に入れたからとて、決して夫れだけで治るものではない。どうしても実生活でなくてはならぬ。

### 実生活について

実生活とは具体的なもので、時間的、空間的に時々刻々に始終現はすところのものでなくてはならぬ。親子、兄弟、友達等の關係に於ても、実際に生活して行かなければ少しも心は育てられない。少しも成長、発達に致さないであります。そこで私共は、此の教育は実生活にさせる。教育は個人的でなければならぬ。寮舎でもない、病院でもない。会も必要であるけれ共、会ではない。寮監が寮生を教育すると云ふのは、一人が一人に向つてすることではなければ効力はないのである。故に、実生活は個人的にしなければならぬ。心と心との融合が出来ねばならぬ。真に其の人のために仕へるところがあり、真に捧げるところがあり、真に其の人のために涙を流すところがなければならぬ。夫れをしないで只大勢に向つて抽

象的にしたところで効果はあがらないのである。けれ共、夫れだけでは未だ足りないのである。

### 自己について

然らば、其の病原を癒すところの一番の根底となるところの方法は何であるかと申しますと、之れは全く自分の力によると云ふことになる。つまり人の感化と云ふことも、四圍の境遇と云ふことも、自分の人に奉仕すると云ふことも皆、其の価値を選択し、其の方法を決定するのは自分である。故に、一番大切なものは自分であると云ふことになる。故に欠点をなほすと云ふことも、自分が一番大切なものになって来る。又、人を治さうとするにも、先づ自分の中にさう云ふ動機を起して来なければならぬ。之れを教育の主義から云ふと、自動自発の教育と言ふ。つまり其処になると、意志の方面と云ふことになるのです。意志と云へば、向上の方面と根底に於ては一致して来るのであります。

### Individualism

之れが、即ち近代思想の一番重要なところであり、日本では之れを自覚と言つて居りますが、英語で言へば、即ち Individualism であります。自分の意志が覚醒しなけ

ればならぬ。此の Individualism と云ふものは意志と云ふことになる。独逸で云へば、ショーペンハウエル、或はニイチエ、其の他の近代哲学者は、さう云ふ思想に傾いて居ります。米國のエマソン、英國のマツシユアーノルド、或は近代のベルゲン、ゼームスなども、主知説に傾いて居る。夫れで、どーしても自分の意志が覚醒しなければ、今日の病原を根治することは出来ないのである。

そこで之れを根治するには、やはり二つとなるので、一つは愛で自分を捧げること。もう一つは自分を向上し、自分の意志の独立を主張することになる。故に、社会を改善し自分を徹底するには、どーしても愛の力により向上に勉めねばならぬ。之れが即ち自分を見出だすところの一つの標準の如きものになって居る。近世主義の思潮はやはり此処にあるので、文学も宗教も教育も皆、此の流れを汲んで居るのであります。然るに之れは複雑なる考へであるから、ほんとーに真意をとらないと所謂一知半解になって、偽生活になり、不正生活になり、空生活になるのである。今日の思想が若い者に誤られやすいから、わるくすると却つて誤りを生ずる虞れがあります。故に、ほんとーの意味をよく考へねばなりません。

## 一年及び予科にて

— 大正三年十二月七日 —

私は、あなた方が自分で自分のことが見いだされるやうにと思つて試験をすると云ふことになる、之れ迄試験と云ふことがあなたの面白くないところの連想がありまして、集注を妨げるかも知れないと思ひます。自発的にするやうにするには、自分で自分を支配する、自分で自分を教育する、自分を拵へて行く道を知らなければならぬ。

### 反省

それには、自分自身が如何なるものであるかと云ふ實質がわからないと、如何に自分を取り扱ふべきかがわからない。それをほんとうにするには、反省、自省、Self examination が行はれないと、自分を明かに見出だすことが出来ぬ。それで自分がわかつて、其の次は自分の目

的である。今日努力して修養し、勉強するところの目的がつかまへられないと、自分の力を開拓することが困難である。

### 眞の試験について

私が試験をすると云ふのは、其の自分の力、自分をためすには如何にすればよいかを明かにするやうにと考へて居るが、今迄の試験とはちがう。あなたと私とが協力し、一所に働いて行くこと云ふ意味である。試験と云ふと、外から自分の価値を定められ、上下を定められると云ふやうに、又、人を排斥し陥れる、人の特權でも奪ふやうな連想がある。学生が始終なやまされて居るのは試験と云ふことである。試験で自分の生活を乱さるゝことは、此の最も大切なことをする時期に於て妨害になる。今は

非常に力を集注してしなければならぬ。然るに試験のために妨げられるところが、あなた方に矛盾がある。之れをのぞいて、眞の生活をすると言ふことが問題である。あなた方の人格の實質に何かの増減が生じて来ると云ふやうな根本な価値に関する問題である。之れに行く妨げになるものを排斥し、又それに行く希望を覚醒なさるやうに前に言うたが、之れは如何なるものかは皆さんに任せて考へられたい。

先づ深い問題を考へられる前に、態度用意をなさることが大切であらうと思ふ。Self-examination について、Conventional なことをあなたが受けることのために生活に矛盾があると Waste になる。それは如何なる態度にすれば無益な徒勞をしないでよいかを話して本論に入りたいので、今、あなた方のして居る試験の弊について述べたい。

### 試験の弊について

第一、今日の試験はあまりに僥倖的になつて居る。それ故、学生が投機的な氣になる。そして之れが不真面目の本になる。問題が何処が出るかは受験者にとりて大切なことである。もし自分の得手なところが出ればよいが、不得手なところが出ればわるい。全く僥倖によつて定ま

る。一方の人にはよい機会であつて、一方の人には不幸なことがある。それ故、試験が人を神経質にする。そのため、知力が他の色々な氣分によつて働きを乱され、狼狽するやうなことがある。試験が僥倖に傾く恐れがある。不安がある。そこで飾ると云ふことが出来る。又、なるだけ自分出来るやうに表はすと云ふ弊が伴ふ。此の弊からあなた方の心の働きを自由にさせたい。我々は僥倖的、投機的に生活するものではない。さう云ふことは余り重いことではない。試験をうけて出来るだけ多くの点をとるために、他の自分の徳を犠牲にしてまで、勉勵の態度をかへねばならぬ。此の弊から自由を得て、勉勵する態度でなければならぬ。

第二、今日の知識の試験は余り浅薄であり狭隘になり、それは消化したのも不消化なもの、記憶したものをもために過ぎぬ。故に、その知識は局部的、浅薄なものである故、自分としては極表面な価値なき知識である。それよりも私共のために大切なことは、知力の働く Method 方法である。如何に研究するか、如何に眞のところに到達するかと云ふ研究の力の方が大切である。故に、試験によつて学問の出来たと思ふは間違ひである。結果を第二にするところの態度を以てしてもらひたい。

第三、今日の試験は事実を了解するか否かで、事実の



知識である。我々は事実と事実の關係の知識、かくれて居るところの事實の意義を知ることが大切である。

第四、其の教授を受けた知識を受けると云ふ、最近の目的を達したか否かの結果をしらべて見るに過ぎない。其の知が其の人の人格及び日常生活に如何なる働きを及ぼすか、之れを受けた学生の実質が如何に發展するかを見るに、教へた知識の結果、目前の影響をしらぶるに止まって居る。故に、其の Self-examination、又自分を真に開發するところの結果をしらべて見て、間違つて居れば改める。それ以上のものがあれば改善すると云ふ眞の知識が、今日の学校の試験では出来て居らぬ。

そこで私共は極正確に自分を知る、自分を完全に統一する目的を以て、永久に続いて發展する如き生活を営むためには、今少し深い智が必要である。之れを得るための実験のために、尚深い試験を要す。つまり深い試験は、我々が生活して居るがそれは我々の目的にかなふべきものか、有効な生活をして居るか、或は我々の働きが無効になるやうな徒勞な生活をしないかと云ふことがわからねばならぬ。

### 知情意の三方面について

私共の生活には二つのものがある。目的、理想等の客

觀的方面と、今一つは之れを追求するところの主觀的のもの内面的のもの、両方に分れる。目的を作り理想を描くものをさして理性、知の方面で、内面的の方面は之れを感情と言ふ。其の中には本能、衝動、感情、情緒、情操或は動機とも云ふ感情が、知の要素を加へて力を統一して働くところのものを意志と言ふ。之れは両方にまたがつて居る。之れを兩端に分つと、知の方面と感情の方面となる。今あなたが学校教育で重きをおくは、知の方面である。此の我々の人格の根底に影響しなければ、知の価値を失ふのである。只皮相な狹隘な一部の知となる。それで私共の目的とするところの生活は、其の自分の人格に影響し、人格の實質内容を革新する如きものでなければならぬ。

### 本能衝動愛

第一あなたが考へねばならぬことは、又自分と云ふものが如何なるものか、又今学期にどれ丈かの進歩をしたかを考へて見ると云ふことは何であるか。知の分量ではない。今年学んだ智が自分に如何なる影響を与へたかと云ふことである。能力が自分の内に、どれ丈か發達したかを考へねばならぬ。私は之れを動機と言ふ。動機の發展を言ふのである。或は意志と言つてもよい。自分の意

志がどれだけ出来、発達したかと云ふのである。意志の強いと云ふことが力である。力は即ち感情である。感情の土台は Instinct 本能と云ふものがある。本能がもつと発達して、衝動と云ふ情操の最も徹底したもの、統一調和されたものを愛と言ふ。愛は感情のまとまったものと言ふ。人格の根底となつて居るものは愛である。喜ぶ、怒る、憐む等の感情がある。憎悪、希望、落胆の感情があるが、皆愛に帰着する。愛がなかつたなら、かう云ふ感情はない。かう云ふ感情の関係を明かにし、又、意志を以て支配するために智が必要である。之れは知力を以て考へねばならぬ。我々の意志の力は、本は感情である。愛の感情が深くなり動いて居らねば、人格の力は強く進むことは出来ない。其の力を大切に育てることを怠り、只道具とする、智にばかり頭を用ふ、殊に記憶に止まると、それが学問と思つて人格に何等の影響も与へぬ。却つて妨げると云ふことになる。之れが Self-examination である。

そこでつまり私は、あなたが第一に考ふべきことは、自分の動機、意志がどれだけ発達したか、又日々の生活に著しく発展する経験があるかないかを考へねばならぬ。我れによき感化を与へ、之れがよく発展することにならねば、今日の生活に価値がない。Motive の対象物

には必ず目的がある。Motive は内面的で、目的は客観的である。之れは両方共並行して進むものである。我々の感情、欲望の中には本能がある。本能は只動物的に用ふるときもあるが、人間の性は本能のかたまりである永く永久に進化して行く生命である。其の生命が生活して居る。それは何によつて生活するかは本能的にそなはつて居る。此の特殊の本能、衝動は皆目的物がある。之れを自覚して、経験を調和して働く道を見出だすと、感情に智の働きの加はる。之れを欲望と言ふ。欲望、動機、即ち意志には必ず目的を追求するのである。

#### 興味について

私共の発展に最も大切なもの、人格の真髓となるものは動機が盛んなること、元氣である。動機は必ず目的を求める。之れに向つて態度が傾いて居ることを興味と言ふ。興味、即ち動機が目的を愛する。即ち愛である。愛が深からねば元氣は盛んにならぬ。人格の偉大な人は、興味のもえること、学問をするにも興味がなくしてはならぬ。無味乾燥な学問は無益である。我々は如何なることに興味があるか、どれだけ進むかが最も大切な根本である。興味、動機、目的、理想が發展、進化するならば、有効に満足に働ける。それをせずして結果を求めても出

来ないのである。其の時に失望、落胆して元気がおとろへる。之れは自分が退化するのである。つまり動機の方、種類があなたの方の将来を律するのである。幸不幸、皆動機の種類、選択によつてである。之れは私共の生活の態度をしらべて見るのが大切である。

### 認識的態度

第一の態度を認識的、知的態度。真理を愛し、知を慕ふ情である。其の最も根本的なものを好奇心 Wonder と云ふ。Wonder は好奇心の発達したもので、Mystery を愛するのである。不思議をさがす好奇心があつて、人間が進化する。此の態度を認識的態度と言ふ。之れが我々の研究をする本である。

### 意識的態度

第二の態度を意識的態度、努力的、奮闘的態度と言ふ。之れは目的を愛する、対象物に向つて居る態度である。之れが自分の行ひを律して居る。

### 感情的態度

第三は感情的態度。純粹の愛である。此の三つの態度を私共がしらべねばならぬ。之れが、

私共の人格の根底である。意志の根本である。余程深い問題である。今一層お考へにならぬと答へがむつかしいから、此の試験は後にしたい。

第二にしらべて見たい大切な Point は価値選択の力である。此の力が私共の人格を別物にするところの力をもつ。同じ学問をし職を得るにも、各々異なるところの性質、力が発達する。又、正反対の人間が出来る。之れは何によるかと云ふに、各人に自由選択の力をもつ、此の価値の選択によつてである。又、人に之れ位大切なものはない。知識、力、才よりも何よりも大切である。

### 良心

真価値を選ぶ。美を選び、善を選び、誠を選び、愛を選ぶ。之れを趣味及び良心と言ふ。真によいことを択ぶことの出来る人は、之れ程安全な、きれいな徳な人はない。我々は此の力が一番大切である。私共は学問をして、何か新しい智を追求する好奇心がある。不思議なものを追求して止まぬは、価値を求めて居る。今少しよいものがある以上なものを捕へんとして居る。此の力が発達すれば、書をよんで要点を捕へることが出来る。必ず真相を見ることが出来る。此の力は必ず自分にとつたものを消化し、同化する力をもつて居る。私共は、時に力に

境遇に限りあり、いつも選択し、つまらぬものを排斥し、最もよいものを選択することが大切である。我々が自分の生活を経済的にするにも力が大切である。

### Organization

第三は Organization。統一力、調和力、連合力。凡ての事実、価値に適当な関係を結合する力である。之れは我々に大切なことである。Association の力である。之れがよく出来る人は物の真相がわかり、記憶力も余程発展するのである。真の Organization が出来れば、決して忘れない。此の力が自分の生活を統括するために大切である。之れが如何に連合して働くか。創始力も此の力によるのである。読書し観察するにも、真相を捕へ選択するにも、目的をもって Organize されてはじめて我々の力となる。事々物々にあたる毎に、如何に働くかの働き方によって実質が出来るのである。自分の力を見ると云ふのは、さう云ふ力を自ら試験するのである。読書した中から何の価値を見出だし、如何に連合して如何なるものを創始したかが大切である。さう云ふ価値の選択力、及びそれを Organize する其の働きが如何に機敏であるかが、ほんとうに進んだかどうかである。



【資料①】

Hull-House, Chicago,

June 25, 1925

To The Various European Section of the W.I.L.:

The bearer, Miss Tano Jodai, who has been very active in the work of the Japanese Section of the W. I. L. will be traveling in Europe for a few weeks on her return to Japan from England where she has been studying for a year. I was very much impressed with the work of the Japanese Section when I was in Japan and with Miss Jodai's efforts as one of the directors.

I shall be very grateful for any courtesy which you may be able to extend to her both at the International House and in other places.

Fraternally Yours,

Jane Addams



【資料⑨】

My dear Miss Jodai;

Mary Smith and I were very grateful for your letter of October 22d for while we had heard that you were safe, it was very reassuring to have a letter directly from you. We were so sorry not to see you at the boat but suspected that there had been a mistake in the hour of sailing.

As you see by the inclosed circular, we are planning our next international congress in Washington next May. I do hope that your plans in regard to studying in the United States are maturing and that you can come to the Congress on your way to Ann Arbor as it were. Will you write me about it and I am sure you know that I would be only too glad to be of any service in the matter.

We talked about you so much in those first terrible days of anxiety in Honolulu when we did not know whether our newly made friends had been lost or not. Please give my love to Mrs Inouye and the others, and in the hope of seeing you soon, believe me devotedly yours

Jane Addams

December 13<sup>th</sup> 1923

【資料⑩】

Hull-House, Chicago.

April 3, 1926

My dear Miss Jodai:

Mde. Ramondt kindly took charge of my peace correspondence during my month in the West Indies but she did not know that I had already written you in regard to being our guest in Dublin so I am afraid she may have confused you somewhat. I shall hope to send you a check the last of June to your address in Cambridge in time for the Dublin meeting. If you for any reason change your address before that time will you kindly let me know.

I also hope we can manage the summer school and that the check will be large enough to take care of both. Perhaps by that time you will have heard from your college that your time has been extended.

Anticipating seeing you with a great deal of pleasure, I am,

hastily yours, but always affectionately

Jane Addams

Not long ago, however, we came to a decision to ask a certain number of women (resident in Tokyo,) of culture and position, to form an Executive Committee for establishing the Women's Branch in Japan of the International Society. Most of those ladies consented to the proposal, and Miss Tsuda among them will work as secretary in charge of international correspondence.

We hope very much that will steadily grow, so as to find it practically possible to cooperate with the sisters of other nations as volunteers for rescuing the world of mankind out of misery and privation.

With best wishes for the progress of this movement of greatest consequence, and for the success of your endeavor.

Believe me  
Very truly Yours,

【資料⑧】

My dear Miss Jodai;

May I send you this etching of the entrance to Hull-House with my gratitude and appreciation of all your hospitality and kindness? Later in the week I shall write to you.

With every good wish for Christmas and the New Year, I am

faithfully yours,

Jane Addams

P.S. May I also enclose an etching for Mrs. Inouye? I am writing you a long letter about the W.I.L. Washington Congress in may

Dec.1923

#### 四、 児童の教育

児童の教育に平和の理想を鼓吹し将来世界の平和に貢献せしむること。

#### 五、 婦人と媾和

媾和會議に於ては各国政府当局者のみならず、各国民代表者をも之に參與せしめんことを希望す、而して右代表者中には若干の婦人をも加ふべきこと。

以上の決議提案の実施を促さんため万国婦人大會は會員中より若干名の使節を派遣し欧州各交戦国及び中立国の元首、並びに米国大統領に之を傳達せんことを期す、而して此等の使節は帰來後其の使命に関する結果を逐一本部に報告すべきものとす。

#### 【資料⑦】

The Japan Women's University,  
Tokyo, Japan, Sept 18th, 1916.

Miss Chrystal Macmillan,  
Secretary of the International Committee  
of Women for Permanent Peace,  
Amsterdam, Holland.

Dear Madam:

I gratefully acknowledge your letters of Oct. 16th, 1915, and of Feb. 21th, 1916, that duly reached me.

Having considered about your suggestions for electing some capable Japanese women to represent the nation in the women's movement for permanent peace of the world, it evidently seemed necessary first of all to have in Japan a body of women that would take on themselves the responsibility of promoting the peace movement in this land, and that might proceed to incorporate them and other Japanese women in an institution solely for that end.

Thus in the course of our deliberation on the matter, I have not been able so far to give you any definite answer regarding the questions alluded to in your correspondence.



前畧、以上の件に對する御回答は蘭都アムスターダムの本會事務所宛御送附相成度尚貴国婦人間に於ける平和運動の状況を御報通下され候はゞ本部一同幸ひ之に過ぎず候。本會は加盟諸国婦人の平和事業の状況を一括せる報告書を毎年定期に刊行仕り候、吾等姉妹たる貴国婦人の状況をも其の中に加へて掲載するの日の近からん事を希望致し申候(云々)

終りに貴国語を以て此の書状を認め得ざるを遺憾に存じ候。本部に於ける通信は従来英佛独三箇国語を使用致し居候(云々)

書記 クリスタル、マクミラン。

## 婦人大會に於て討議及び決議せる問題

### 一、婦人と戦争

万国婦人大會に列席せる婦人一同は戦争が濫りに人命を犠牲にし且文明を破壊するが故に全然之に反對するものなり。尚近代の戦争に於ては婦人に對し保護の途備はれりとの説は之を事実として認むる能はず、況や戦乱に伴ふ幾多の罪悪は婦人の安寧徳操を犠牲にすること甚だ多きに於てをや。

### 二、平和問題

本會は各交戦国並びに戦乱の禍を受けて塗炭の苦難を味へる諸国の人民に深厚の同情を寄するものなり。将来の媾和條約は公平なる民意に原くべきものなるを以て、境界領土を新に制定する際には戦勝国の権利よりも先ず其の住民(男女)の意志を尊重すべし。

戦争は文明進歩の過程に現はるゝ問題解決法の一つなりと見るを得べし、故に将来に於ける国際間の紛議は此の方法を以てせず、専ら仲裁裁判等に依り平和の解決を期すべき也

国際問題の解決に方り以上の平和的解決法に據らずして、直ちに于戈に訴へんとする国に對しては各国政府は一致協力して社會、道德、經濟等の各方面より壓迫を與へて以て之を改悛せしめん事を希望す。

外交を民意によりて行ふこと、並びに国民の一半たる婦人に参政権を與へ其の意見を採用するは共に戦争の防止に効あるを信ず。

### 三、万国協同の事業

戦争終結後第三回平和會議の開催を希望す。

永久的平和を確立するの手段として国際裁判所を設置する事。

軍備廃止の実行を期するため兵器彈藥の製造に関する事業の取締を厳にする事  
国際貿易を自由ならしめ、世界中到る處の海洋港湾を同一の條件の下に開放することを、各国政府に提議せんとす。

- <sup>(4)</sup> 在サンフランシスコ沼野総領事夫人  
<sup>(5)</sup> 女子英学塾塾長、津田梅子  
<sup>(6)</sup> 女子学院院長、矢嶋楯子  
<sup>(7)</sup> 大日本平和協会。1906年に創立、1925年に解散した平和運動の団体  
<sup>(8)</sup> 資料③か

## 【資料⑥】

### 婦人萬国大會

米国シカゴのジェーン・アダムス女史を會頭とし、各國知名の婦人を役員とせる萬国婦人大會は、本年四月下旬を以て、和蘭首府ヘーグに開催せられたるが、其の際決議の結果として、世界永久の平和の実現に資するの目的を以て婦人平和運動の委員を各国婦人中より撰定し、且此回欧州大戦の終局を期として媾和會議の開かる、や時と所とを同じふして萬国婦人平和會議を開催し、各国政府の媾和會議に、永久的平和の実現に有効なるべき提議を送らんとの豫定なりと云ふ。

右計畫に関し頃日同會書記マクミラン女史(米国)より成瀬校長の許に到達せる書信中には、本年開催の前記大會に出席せるは十二箇国の婦人なりしが、日本を始め東洋諸国よりは一人の參列者なかりしを遺憾とせり、恰も桑港博覽會に際し開催せられたる米国平和協會總會に於て、日本より出席せる長崎高商教授武藤氏より日本婦人にして代議員たり得べき人々の氏名を聞き、且日本に於ける本運動の同情者たるべき人士として成瀬校長並びに日本平和協會書記(宮岡氏?)を推舉せられしに付、万国婦人平和會議參列の代議員たるべき日本婦人五名を推薦せられんことを依頼し来れり。

因に婦人平和會議の代議員たるものは、婦人大會の決議に賛成し且婦人をして國會に於ける參政権を獲得せしめ、又國際的紛議を平和に落着せしむるの主義を是認するを要す。而して大會列席の際に於ては各代議員は、其の所属團體を代表するに非ずして自国の婦人全体を代表し若しくは自国に於ける各社會の婦人を代表するの心得を以てすべきこと、又本會の目的主張を普及せしめ且本部の資金並びに總會開催の経費募集に力むべきこと、但し各国社會の状況に應じ各国代議員は自国に最適の方法を以て會務を司る事を得べし。

前記本會決議の精神に賛同するものは本會加盟の各国婦人團の會員たるを得。

平和會議の開催の際には日本より五名の代議員の外尚二十名の婦人の出席を希望す。

(左に掲ぐるは同會書記の書信拔翠)

#### 14. National Foreign Policy

- a. This International Congress of women demands that all secret treaties shall be void and that for the ratification of future treaties, the participation of at least the legislature of every government shall be necessary.
- b. This International Congress of Women recommends that National Commissions be created and International Congresses be convened for the scientific study and elaboration of the principles and conditions of permanent peace, which might contribute to the development of an International Federation.
- c. These commissions and conferences should be recognized by the governments and should include women in their deliberations.

#### 15. Women in National and International politics.

Both nationally and internationally, to put into practice the principle that women should share all civil and political rights and responsibilities on the same terms as men.

#### V. The Education of Children

Towards the Ideal of Constructive Peace.

#### VI. Women and the Peace Settlement

#### VII. Action to be Taken.

#### 19. Women's Voice in the Peace Settlement

#### 20. Envoys to the Governments

Envoys to carry the message expressed in the congress resolutions to the rulers of the belligerent and neutral nations of Europe and to the President of the United States.

The envoys shall report the result of their missions to the International Women Committee for Constructive Peace as a basis for further action.

---

<sup>(1)</sup> 資料②か

<sup>(2)</sup> 長崎高等商業学校教授、武藤長蔵

<sup>(3)</sup> 新渡戸稲造夫人メアリー

Resolutions adopted by the INTERNATIONAL CONGRESS of WOMEN  
at The Hague, Holland. April 28-30, 1915.

I. Women and War.

1. Protest against the madness and horror of war, involving a reckless sacrifice of human life and destruction of so much that humanity has labored through centuries to build up.
2. Women's Sufferings in War.

II. Towards Peace.

3. The Peace Settlement

.....That no territory should be transferred without the consent of the men and women in it, and that the right of conquest should not be recognized.

That autonomy and a democratic parliament should not be refused to any people.

That the governments of all nations should come to an agreement to refer future international disputes to arbitration or conciliation and to bring social, moral, and economic pressure to bear upon any country which resorts to arms.

That foreign politics should be subject to democratic control. That women should be granted equal political rights with men.

4. Continuous Mediation.

III. Principles of Permanent Peace.

5. Respect for Nationality.
6. Arbitration and Conciliation.
7. International pressure.
8. Democratic Control of Foreign Policy.
9. The Enfranchisement of Women

IV. International Co-operation.

10. Third Hague Conference—to be convened immediately after the war.
11. International Organization.
12. General Disarmament.
13. Commerce and Investments.

with the fundamental principles of the extension of the parliamentary franchise to women and the Settlement of the International disputes by peaceful means. These women should not act as representatives of any society to which they may belong but as individuals representing their country and, if possible, its various sections and classes. They must hold themselves in readiness to attend the next International Congress when summoned, a moment that would coincide with the end of the war.

In the meantime they are asked to begin propaganda for the aims of the International Committee and to try to raise funds for the expenses of the Central Office and of the next Congress, if possible. The method of work must differ in every country, and Japanese women will best know what is suited to their own country. All who are in general agreement with the resolutions of the Congress (enclosed) and definitely in agreement with the parliamentary franchise for women and the settlement of international disputes by peaceful means should be enrolled as members of a large National Committee or formed into a National Association. It is hoped that at least 20 Japanese women in addition to the five Members of the Committee will be selected to attend the Congress after the war and another ten to be able to act as alternateship.

Please reply to the Office in Amsterdam and we shall be very grateful if you will send us regularly information about the peace movement among women in Japan. The office is sending out regularly a news letter giving information about what women are doing in all the countries already represented on the Committee. We hope it will not be long before we are able to give the news of the work of our Japanese sisters.

A full report of the Congress<sup>(8)</sup> which has already gone to press will be sent to you when it is published. I regret that I have been unable to write you in your own language. The Headquarters conducts its correspondence in English, French, and German, and would be able to deal with correspondence in any of these languages.

With cordial greeting,

Yours truly,

[マキ]  
Chrystabel Macmillan

Secretary. (signed)

undertaken by the headquarters of the Committee at the above address in Amsterdam, Holland, is correspondence with women in the countries not there represented with a view to securing the coöperation of women sympathetically inclined to our programme.

I left Holland more than a month ago and this work is in charge of Miss Emily Hobhouse who, at that time, had no addresses of women in Japan. Here in San Francisco at the National American Peace Congress I have been fortunate in meeting Mr. Chuzo Muto,<sup>(2)</sup> Prof. of the Nagasaki Higher Commercial College, Japan who has told me that the following ladies might be able to coöperate with our International Committee in finding five Japanese women willing to act as members of that Committee, an later in sending a representative delegation of Japanese women to the International Congress of women to be held after the war as laid down in No.I above.

Mrs. Nitobe,<sup>(3)</sup> wife of the Professor at the Imperial University Tokyo.

Mrs. Numano,<sup>(4)</sup> wife of the Japanese consul, 221 Sansome, San Francisco

Miss Tsuda,<sup>(5)</sup> Haed of the Tsuda Women's College, Tokyo.

Mrs. Kajoko Yajima,<sup>(6)</sup> Head of Joshi Gwakuin, Tokyo, Japan.

Mr. Muto informed me also that the following gentlemen would be in sympathy with this work, so I am sending a copy of this letter to each of them.

Mr. J. Naruse, President of the Women's College, Tokyo.

The Secretary of the Japan Peace Movement ("Dai Nippon Heiwa Kyokwai"<sup>(7)</sup>)  
No.6, Yamashirocho, Kyobashi, Tokyo.

We hope very much that you will be in sympathy with our resolutions and with the work we are undertaking. We ask you to find five women in your country willing to become members of our Committee. These women would require to be in general agreement with the Resolutions of our Congress, and in particular in definite agreement

【資料①】

International Committee of Women for Permanent Peace

Founded at the International Congress of Women, the Hague,  
April 28th to May 1st 1915.

Objects: I – To ensure that an International Congress of Women shall be held in the same place and at the same time as the official Conference which shall frame the terms of the peace settlement after the war for the purpose of making practical proposals to that Conference.

II – To organize support for the resolution passed by the International Congress of Women at the Hague 1915.

These include support of (a) the extension of the parliamentary franchise to women: and (b) the settlement of international disputes by peaceful means.

.....

Chairman: Jane Adams

Office:

Keizersgracht 467 — 469

Amsterdam

Secretary:

(マカ)  
Chrystabel Macmillan

Acting Sec. Pro Tem. Emily Hobhouse

Sanfrancisco. Oct.16th, 1915.

President Naruse

Dear sir,

You may have heard that in the end of April this year there was held at the Hague, Holland, an International Congress of Women at which twelve different countries were represented. Enclosed is a copy of the Resolutions<sup>(1)</sup> which form the Programme passed at that Congress. In addition to this Programme there was formed the above International Committee of women for Permanent Peace which consists of five women from each country. It has two objects:

(written on the first page.)

Unfortunately among the twelve nationalities represented at the Congress none of the Eastern peoples were included among those able to attend but part of the work now being

## RESOLUTIONS OF W. I. L. CONGRESSES

The Hague, 1915; Zurich, 1919; Vienna, 1921, and the Conference at The Hague, 1922

### I—Attitude Toward War

The Hague—The Congress protested strongly against the horrors of war and its futility as a means of settling differences between peoples.

Zurich—It took the same position, and in order to make opposition effective urged international agreements among women to refuse their support of war in money, work, or propaganda.

Vienna—It expressly declared its acceptance of the Zurich resolution and in addition urged the necessity of individual opposition.

### II—Principles of Permanent Peace

The Hague—The Congress formulated the principles of—

- (1) Right of self-determination.
- (2) Settlement of international disputes by arbitration and conciliation.
- (3) Democratic control of foreign policy.
- (4) Social, economic, and moral pressure against any country resorting to arms.
- (5) Enfranchisement of women.

Zurich—It went on record as upholding these principles and urged that they be embodied in the Peace Treaty, except No. 4. Seeing the suffering caused by an economic blockade, the Congress protested against its use as against humanity and permanent reconciliation.

### III—Disarmament

The Hague—The Congress advocated universal disarmament and, as a means to this end, control of the manufacture of munitions and traffic in them by international agreement.

Zurich—It advocated, in its statement of conditions essential to an effective League of Nations, immediate reduction of armament for all member states and eventual total disarmament.

Vienna—It stated that its position on total disarmament had not changed. It welcomed the Washington Conference and recommended that National Sections of the countries represented endeavor to have their governments work for universal disarmament through the Conference.

### IV—The League of Nations

The Hague—The Congress suggested a plan for international cooperation looking toward a League of Nations, with emphasis upon an International Court of Justice, Free Trade, and international control of economic matters that are a main cause of war.

Zurich—It stated in detail those fundamental requirements for a covenant that will be an instrument of peace, including a Court of Justice and Free Trade.

Vienna—It emphasized its belief in the right of self-determination, the protection of minorities, free trade, and international agreement on the production and distribution of necessities of life.

### V—Peace Treaty

Zurich—The Congress protested against the terms of the Peace Treaty as based on force and as violating the principles of justice.

Vienna—It declared that a revision of the Treaties was necessary and urged particularly the abrogation of the sanctions imposed upon Germany for alleged non-compliance with the terms of the treaty.

The Hague Conference—This conference demanded a new Peace based on new international agreements and its members resolved to work unremittingly by every means in their power to bring about the convening of a World Congress through the instrumentality of the League of Nations, of a single nation, or a group of nations, in order to achieve a New Peace.

### VI—Position of Women

The Hague—The Congress demanded the enfranchisement of all women and their participation in national and international politics on the same terms as men.

Zurich—It formulated a woman's charter for insertion in the Peace Treaty, guaranteeing women equal rights with men and urged in addition that women be represented in the Labor Conference and have a vote in all plebiscites under the treaty.

Vienna—It restated as one of the League's objects, the establishment of political, social, and moral equality between men and women.

### VII—Education

The Hague—The Congress urged the direction of education toward the ideal of constructive peace.

Zurich—It established an international committee on education.

Vienna—It voted for the revival of school texts, the introduction in schools of a universal auxiliary language, and an investigation of the effects of corporal punishment. Various resolutions were referred to the Committee on Education.

### VIII—Political Prisoners

Zurich—The Congress demanded the amnesty of political prisoners.

Vienna—It expressed sympathy for them and sent greetings.

### IX—Additional Action

Zurich—The Congress protested against military action in Hungary and Russia. Proposals regarding the problem of population, education, and a detailed program of political, educational and industrial reform were referred to National Sections for study.

Vienna—It opposed the military use of "native" populations. It urged an intensive effort to interest young women in work for permanent peace and constructive freedom. Proposals regarding the League of Nations, education, and other matters were referred to committees or national sections for study. It urged cooperation toward ending social injustice, in furtherance of the object of the W. I. L. to end conflicts between social classes as well as between nations.

### INTERNATIONAL SUMMER SCHOOL

Chicago, May 15-28, 1924

The general subject of the Summer School will be the Biological, Psychological, and Economic basis of Internationalism. Courses will be given in each, by well-known authorities, and each lecture will be followed by an open discussion in English, French, and German. Recreation and visits to interesting places will be planned. Special rates will be given to members from countries where the exchange is low.

### LATEST INFORMATION—JANUARY 13, 1924

All foreign delegates who have registered with the National Headquarters in Washington will be met at the dock in New York by the Reception Committee.

April 24-29—

Members of the International Executive Committee will be entertained by the National Chairman, Lucy Biddle Lewis, at her home in Lansdowne, Pennsylvania.

April 30—

An all-day conference will be held in Washington, in which all National organizations in the United States which are working for Peace will be invited to participate. The subject of this conference will be "Stop the Next War through a conference of the debtor and creditor nations, to settle the terms of reparations, of interrelated debts, and disarmament."

The evening session will be given up to present-day Pan-American problems, looking toward the formulation of a Pan-American policy by the women of the Americas. All delegates from the Latin-American countries will be invited to take part in this evening conference on an equal voting basis. Visitors from other countries are invited as fraternal delegates.

May 1—

9 p. m. Opening of the Fourth Biennial Congress of the Women's International League for Peace and Freedom, the general subject of which will be THE ACHIEVEMENT OF A NEW PEACE in conformity with the Resolution passed by the Conference at The Hague, December, 1922.

Reception by the United States Section in honor of the International Executive Committee, to which the President of the United States, officials of the Government and of the foreign embassies will be invited.

May 3—

7 p. m. Dinner to Official Delegates of the W. I. L., followed by speeches.

May 4—

Sunday afternoon. Open-air meeting, "International Ideals of Youth," organized by the young people.

May 7—

Closing mass meeting of the Congress, with resolutions presented, and a forward message from our International President, Jane Addams. Business sessions of the Congress will be held each morning from ten o'clock to one o'clock. The afternoon will be open for committee meetings and social functions, where visitors may become acquainted with Washington and the people of the United States.

Information regarding cost of travel, steamships, etc., may be obtained from International Headquarters, 6 rue de Vieux College, Geneva, Switzerland; International House, 55 Gower Street, London, England; and National Headquarters, 1403 H Street, Washington, D. C.





## Women's International League for Peace and Freedom

SECTION FOR THE UNITED STATES

BULLETIN No. 8

NOVEMBER-DECEMBER, 1923

*The League has  
National Sections  
and Corresponding  
Groups in—*

Australia  
Austria  
Belgium  
Bulgaria  
Canada  
China  
Corea  
Czecho-Slovakia  
Denmark  
Egypt  
Finland  
France  
Germany  
Great Britain  
Greece  
Hungary  
India  
Ireland

*The League has  
National Sections  
and Corresponding  
Groups in—*

Italy  
Japan  
Jugo Slavia  
Mexico  
Netherlands  
New Zealand  
Norway  
Poland  
Roumania  
Siam  
Spain  
Sweden  
Switzerland  
Syria  
Ukraine  
United States  
Uruguay

### STOP THE NEXT WAR

From all sides comes the warning that war is about to start with the Ruhr and the Rhineland as the center of disturbance. If it is allowed to begin, there is imminent danger that it will follow the course of the last war in extent and disaster.

In Europe and the United States, the members of the Women's International League for Peace and Freedom are bending their energies to stop this awful catastrophe.

Workers in the cause of Peace all over the world look to the United States as a power that can turn the course of events from destruction to the rebuilding of civilization. The women of the world are looking to us to help.

In order to answer this world-wide appeal, the Section for the United States of the Women's International League for Peace and Freedom has undertaken—

- (1) To hold the Fourth Biennial International Congress of the Women's International League for Peace and Freedom in Washington, D. C., May 1 to 7, 1924.

It is hard for us to measure the far-reaching importance of this Congress.

Delegates from twenty European countries—from India, China, Japan, Canada, South America, and Mexico will meet large groups of American women.

Our visitors will present actual conditions abroad.

Together we shall discuss the methods of breaking the present deadlock and how we can create conditions of permanent Peace.

- (2) To promote an active campaign for a Stop the Next War Congress of Debtor and Creditor Nations, to be called by the President of the United States.

Those parts of the Treaty of Versailles arranging for the payment of reparations having proved both inadequate and productive of much misunderstanding and friction, the objects of this conference shall be:

(a) The presentation and open discussion of the facts concerning economic conditions in the debtor and creditor countries, including facts relating to the negotiation of war loans and the raising and expenditure of all moneys.

(b) Settlement of the terms of reparations of interrelated debts and disarmament in order that all nations may join in the restoration of civilization and peace.

- (3) To hold an International Summer School in Chicago, May 15 to 28, 1924.

To carry out these plans we need a Stop the Next War Fund of \$50,000.

The Women's International League for Peace and Freedom has eighteen organized Branches in the United States and over five thousand members with an unlimited fund of enthusiasm and determination.

There are National Sections, and other forms of representation, in thirty-five countries of Europe and Asia and America.

The growth of the Peace movement in America among the churches, labor organizations, women's and young people's organizations, and many organizations giving their whole time to Peace, opens the way to the widest possible cooperation. All this great power can be brought to the prevention of another war.

Further information will be issued in the Bulletin which will be published each month. If you keep the Bulletin on file, see to it that many others read it.

Please make yourself a special publicity agent and spread the information of the International Congress and the International Summer School in every way possible, through churches, state and local organizations of both men and women, newspapers, and individuals.

We must work quickly and constantly. Four months is a short time to prepare an International Congress, but we can do it. This is a world emergency.

資料②

Women's International League for Peace and Freedom  
SECTION FOR THE UNITED STATES  
BULLETIN No.8, NOVEMBER-DECEMBER, 1923

# WOMEN'S INTERNATIONAL LEAGUE FOR PEACE AND FREEDOM

The Hague 1915, Zurich 1919, Vienna 1921, The Hague 1922, Washington 1924

## EXECUTIVE COMMITTEE

JANE ADDAMS, PRESIDENT, HULL HOUSE, CHICAGO, U. S. A.; GERTRUD BAER, GERMANY; EMILY G. BALCH, U. S. A.; LUCIE DEJARDIN, BELGIUM; GABRIELLE DUCHENE, VICE-PRESIDENT, FRANCE; VILMA GLUECKLICH, INTERNATIONAL SECRETARY, HUNGARY; MARGUERITE GOBAT, SWITZERLAND; YELLA HEITZEL, AUSTRIA; CATHERINE E. MARSHALL, VICE-PRESIDENT, GREAT BRITAIN; C. RAMONDY-HIRSCHMANN, RECORDING AND FINANCIAL SECRETARY, HOLLAND; LIDA GUSTAVA HEYMANN, HONORARY VICE-PRESIDENT.



INTERNATIONAL OFFICE, GENEVA, SWITZERLAND

6, Rue du Vieux-College

Telegr. Address WILLIF

Hull-House, Chicago,  
June 25, 1925

### National Sections:

Australia  
Austria  
Belgium  
Bulgaria  
Canada  
Czecho-Slovakia  
Denmark  
France  
Germany  
Great Britain  
Greece  
Haiti  
Holland  
Hungary  
Ireland  
Italy  
Japan  
New Zealand  
Norway  
Poland  
Sweden  
Switzerland  
Ukraine  
United States

To The Various European Sections of the W.I.L.:

The bearer, Miss Tano Jodai, who has been very active in the work of the Japanese Section of the W.I.L. will be traveling in Europe for a few weeks on her return to Japan from England where she has been studying for a year. I was very much impressed with the work of the Japanese Section when I was in Japan and with Miss Jodai's efforts as one of the directors.

I shall be very grateful for any courtesy which you may be able to extend to her both at the International House and in other places.

### Corresponding Societies:

Argentina  
China  
Corea  
Egypt  
Finland  
India  
Jugo Slavia  
Latvia  
Mexico  
Peru  
Philipine Islands  
Roumania  
Russia  
Spain  
Syria  
Turkey  
Uruguay

Fraternally yours,

*Jane Addams*

資料⑪

ヨーロッパ各支部宛ジェーン・アダムス書簡 1925.6.25

# WOMEN'S INTERNATIONAL LEAGUE FOR PEACE AND FREEDOM

The Hague 1913, Zurich 1919, Vienna 1921, The Hague 1922, Washington 1924

## EXECUTIVE COMMITTEE

JANE ADDAMS, PRESIDENT, HULL HOUSE, CHICAGO, U. S. A.; GERTRUD BAER, GERMANY; EMILY C. BALCH, U. S. A.; LUCIE DEJARDIN, BELGIUM; GABRIELLE DUCHENE, VICE-PRESIDENT, FRANCE; WILMA GLÜCKLICH, INTERNATIONAL SECRETARY, HUNGARY; MARGUERITE COBAT, SWITZERLAND; YELLA HERTZKA, AUSTRIA; CATHERINE E. MARSHALL, VICE-PRESIDENT, GREAT BRITAIN; C. RAMONDT-HECKMANN, RECORDING AND FINANCIAL SECRETARY, HOLLAND; LIDA GUSTAVA HEYMANN, HONORARY VICE-PRESIDENT.



INTERNATIONAL OFFICE, GENEVA, SWITZERLAND

6, Rue du Vieux-Collège  
Télégr. Adresse WILLIF

## National Sections:

Australia  
Austria  
Belgium  
Bulgaria  
Canada  
Czecho-Slovakia  
Denmark  
France  
Germany  
Great Britain  
Greece  
Haiti  
Holland  
Hungary  
Ireland  
Italy  
Japan  
New Zealand  
Norway  
Poland  
Sweden  
Switzerland  
Ukraine  
United States

Hull-House, Chicago.

April 3, 1926

My dear Miss Jodai:

Mde. Ramondt kindly took charge of my peace correspondence during my month in the West Indies but she did not know that I had already written you in regard to being our guest in Dublin so I am afraid she may have confused you somewhat. I shall hope to send you a check the last of June to your address in Cambridge in time for the Dublin meeting. If you for any reason change your address before that time will you kindly let me know.

I also hope we can manage the summer school and that the check will be large enough to take care of both. Perhaps by that time you will have heard from your college that your time has been extended.

Anticipating seeing you with a great deal of pleasure, I am,

hastily yours *Lucie Dejardin*  
*Jane Addams*

## Corresponding Societies:

Argentina  
China  
Corea  
Egypt  
Finland  
India  
Jugo Slavia  
Latvia  
Mexico  
Peru  
Philipine Islands  
Roumania  
Russia  
Spain  
Syria  
Turkey  
Uruguay

資料⑩

上代タノ宛ジェーン・アダムス書簡 1926.4.3

Hull-House  
800 SOUTH HALSTED STREET  
CHICAGO

My dear Miss Jodai;

Mary Smith and I were very grateful for your letter of October 23d for while we had heard that you were safe, it was very reassuring to have a letter directly from you. We were so sorry not to see you at the boat but suspected that there had been a mistake in the hour of sailing.

As you see by the inclosed circular, we are planning our next international congress in Washington next May. I do hope that your plans in regard to studying in the United States are maturing and that you can come to the congress on your way to Ann Arbor as it were. Will you write me about it and I am sure you know that I would be only too glad to be of any service in the matter.

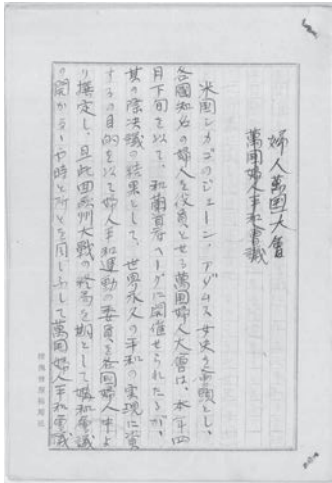
We talked about you so much in those first terrible days of anxiety in Honolulu when we did not know whether our newly made friends had been lost or not. Please give my love to Mrs Inyuye and the others, and in the hope of seeing you soon, believe me devotedly yours

*Jane Adams*

December 7th 1923

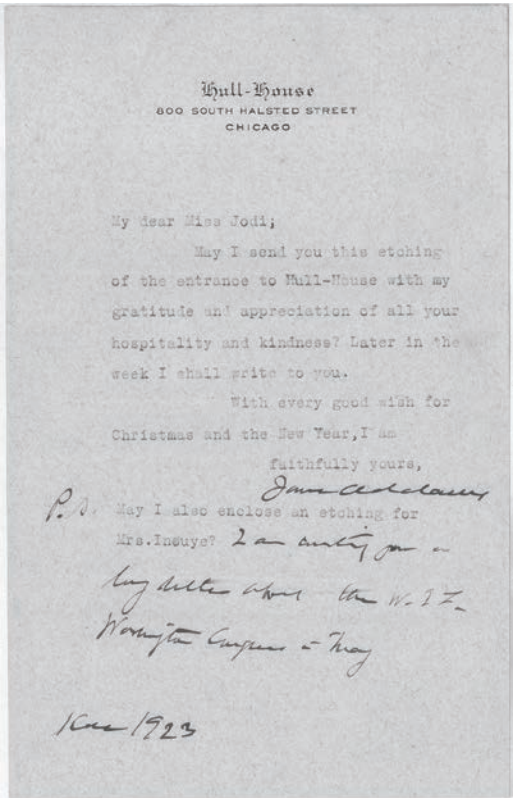
資料⑨

上代タノ宛ジェーン・アダムス書簡 1923.12.13



資料⑥

婦人萬国大會（資料①、②の内容を抜粋し、まとめたものと思われる）



資料⑧

上代タノ宛ジェーン・アダムス書簡  
 1923.12

The Japan Women's University,  
Tokyo, Japan, Sept 18th, 1916.

Miss Chrystal Macmillan,  
Secretary of the International Committee  
of Women for Permanent Peace,  
Amsterdam, Holland.

Dear Madam:

I gratefully acknowledge your letters of Oct. 18th,  
1916, and of Feb. 21st, 1916, that duly reached me.

Having considered about your suggestions for electing  
some capable Japanese women to represent the nation in the  
women's movement for permanent peace of the world, it evidently  
seemed necessary first of all to have in Japan a body of women  
that would take on themselves the responsibility of promoting  
the peace movement in this land, and that might proceed to incor-  
porate them and other Japanese women in an institution, <sup>society</sup> for that  
end.

Thus in the course of our deliberation on the matter,  
I have not been able so far to give you any definite answer re-  
~~specting~~ <sup>giving</sup> the questions alluded to in your correspondence.

Not long ago, however, we came to a ~~decision~~ <sup>decision</sup> deci-  
sion to ask a certain number of women (residents in Tokyo,) of cul-  
ture and position, to form an Executive Committee for establish-  
ing the Women's ~~Association~~ Branch in Japan of the International  
<sup>Society</sup>.

2.

Peace Committee

Most of those ladies consented to the proposal, and Miss Tada  
among them will work as secretary in charge of international cor-  
respondence.

We hope very much that it will steadily grow, so as to  
find it practically possible to cooperate with the sisters of  
other nations as volunteers for rescuing the world of mankind  
out of misery and privation.

With best wishes for the progress of this movement  
of greatest consequence, and for the success of your endeavor.

Believe me

Very truly Yours,

資料⑦

Miss Chrystal Macmillan 宛 成瀬仁蔵書簡草稿 1916.9.18

## THE PEACE CONGRESS AT THE HAGUE

SPRING, 1915.

The Peace Congress, which met April 28, 29, 30, 1915, at the Hague, was called together by a group of European women. Twelve countries were represented; England, Holland, Belgium, Hungary, Germany, Italy, Sweden, Denmark, United States, Canada, Austria and Norway. Three hundred women attended, who were women of world sympathies, and workers for public betterment at home. For instance, of the women from Germany, one was President of the League for the Protection of Mothers, another an officer in the League for the care of Prisoners. Of the representatives from Sweden one was inspector of children's institutions and one of the seven members of the town council of Stockholm. Miss Jane Addams was the most important of the U.S. delegation, but others of the forty from the States were women prominent in social and educational work in America.

Miss Jane Addams was chosen President of the Congress because it was considered best to have a woman from a neutral country presiding over the great congress. The assembly met at the Hague in Holland. The hall, which held 1800 people, was always well filled. A large number of Dutch gentlemen attended the meetings and expressed their interest in the proceedings and admiration for the way the meetings were conducted, with harmony among these women from many nations.

At the end of the Congress various resolutions were drawn up expressing sympathy for all those who were suffering in the present war, and stating plans for the prevention of wars in the future. They also decided to present to the nations a plea for a council of neutrals to meet as soon as possible and offer mediation for the belligerents.

It was in the interest of this suggestion that two parties of women visited all important countries in Europe after the Congress was over. Miss Jane Addams and Dr. Alcesta Jacobs of Amsterdam visited England, seeing Mr. Asquith and Sir Edward Grey; Germany, interviewing Count von Jagou and Dr. Bethman Hallweg. In Austria they saw Baron Burian, the minister of foreign affairs and Count Sturgh, the Prime Minister, and in Hungary, the Prime Minister, Count Firsa. In Switzerland they interviewed the President, and in Italy, where war had just been declared, they saw the ministers and had a long interview with the Pope, who heartily approved of what they had been doing and entered into full sympathy with their plans. In Paris they saw ministers Delcasse and Vivian.

In all the warring countries, which the delegates visited, they were received with utmost courtesy. The minister in each warring nation said that his country was forced into the war, and that it did not want to fight and yet that to propose peace would be considered weakness. On the other hand, if peace proposals were presented by neutral nations, all could listen to them without losing prestige. One Prime Minister in a great European country said that Miss Addams' suggestions were the most sensible works he had heard for months. He had been hearing nothing but demands for more money, more men and ammunition. Then the door opened and some one proposed negotiations. Those words were the sanest he had heard for a long time.

資料⑤

THE PEACE CONGRESS AT THE HAGUE  
SPRING, 1915.

## MORE ABOUT THE WOMEN'S CONGRESS AT THE HAGUE

The congress was as cosmopolitan in the character of the organization represented as it was truly international in its constituency. The women assembled carried themselves with admirable restraint. This does not mean that the congress was lacking in dramatic incidents. Far from it; it was an impressive moment, for instance, when the large audience arose for sixty seconds in silent tribute to the mothers and wives in the warring nations who have been bereft of their sons or husbands. Impressive, too, was the very arrangement of the stage; side by side there sat splendid women from England and from Germany, from Austria-Hungary and from Belgium, from Italy, from America, from the Scandinavian countries, from Holland and from Canada, yes, even from unfortunate Poland. Impressive, further, were the warm words with which, amid universal applause, the chairman of the German delegation welcomed the five Belgian women who had arrived late, and asked that they might be given a seat of honour on the stage. Not less touching was the announcement by a Dutch delegate that carloads and boatloads of the beautiful hyacinths, tulips and daffodils in which Holland then abounded would be sent in the name of the congress to hospitals for wounded soldiers, in England, France, Belgium and Germany, and if possible, also to the eastern theatre of war.

But to me personally the most illuminating moment of the congress came after Miss Addams had enunciated these words in her address at the largest public meeting held in connection with the congress:

"We have many evidences at the present moment that, inchoate and unorganized as it is, the spirit of international goodwill may be found even in the midst of this war constantly breaking through national bounds. The very soldiers in the opposing trenches have to be moved about from time to time lest they come to know each other, not as the enemy, but as individuals, and a sense of comradeship overwhelm their power to fight."

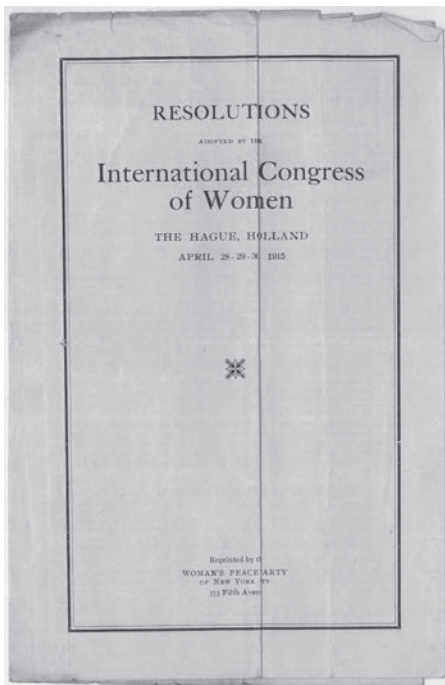
There was long-continued applause, which came particularly from a certain section of the galleries. I glanced up to see who it was that so vociferously assented; it was a group of Dutch soldiers, in the prime and strength of their manhood, dressed in immaculate military uniform, clapping their hands and rising in tribute to the distinguished American who in these few words exposed the sham and fallacy of international hatred!

The congress appointed two delegations to visit both the belligerent and neutral countries and bring the resolutions to the notice of the respective Governments, urging them to put an end to bloodshed and establish a just and lasting peace. Miss Jane Addams, so well known by her writings and Social Settlement work in America, and Dr. Aletta Jacobs, from Holland, with Signora Genoni (Italy), came over to London, where they were received by the Prime Minister and also by Sir Edward Grey. They then made their way to Berlin, Vienna, Budapest, Rome, Paris and Havre, accomplishing their mission and having interviews with the leading Cabinet Ministers everywhere. They were also received in half an hour's audience by the Pope. On Miss Addams remarking to the Prime Minister of a great belligerent State "that he must think her rather foolish, as an irresponsible woman coming to him and talking of peace" his answer was: "foolish, madam! why, this is the first sensible talk I have had since the war began. I only wonder why that women have not taken action sooner." Miss Addams has

資料④

MORE ABOUT THE WOMEN'S CONGRESS AT THE HAGUE

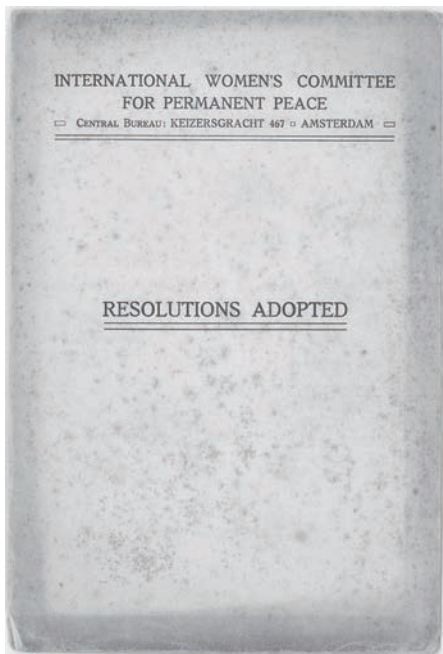




資料②

RESOLUTIONS ADOPTED BY THE  
International Congress of Women,  
THE HAGUE, HOLLAND APRIL 28-29-  
30, 1915

Reprinted by the WOMAN'S PEACE  
PARTY OF NEW YORK CITY 553 Fifth  
Avenue



資料③

INTERNATIONAL WOMEN'S COMMITTEE  
FOR PERMANENT PEACE  
CENTRAL BUREAU: KEIZERSGRACHT 467  
AMSTERDAM  
RESOLUTIONS ADOPTED

International Committee of Women for Permanent Peace

Founded at the International Congress of Women, the Hague,  
April 28th to May 1st 1915.

Objects: I.-To ensure that an International Congress of Women shall be held in the same place and at the same time as the official Conference which shall frame the terms of the peace settlement after the war for the purpose of making practical proposals to that Conference.

II.-To organize support for the resolution passed by the International Congress of Women at the Hague 1915.

These include support for the ~~resolutions passed~~ of (a) the extension of the parliamentary franchise to women: and (b) the settlement of international disputes by peaceful means.

(Letter)

Chairman: Jane Adams

Offices:

Keizersgracht 467-469

Secretary:

Amsterdam

Chrystabel Macmillan

Acting Sec. pro Tem. Emily Hobhouse

Sanfrancisco. Oct. 16th, 1915.

(President Naruse)  
HIDE T. NARUSE  
Dear sir,

You may have heard that in the end of April this year there was held at the Hague, Holland, an International Congress of Women at which twelve different countries were represented. Enclosed is a copy of the Resolutions which form the Programme passed at that Congress. In addition to this Programme there was formed the above International Committee of women for Permanent Peace which

資料①

成瀬校長宛 Chrystal Macmillan 書簡 1915.10.16

## WILPF 関連資料 2 件 ～クリスタル・マクミランから成瀬へ ジェーン・アダムスから上代へ～

成瀬記念館収蔵資料の中から未発表のものを順次紹介する。今回は WILPF 関連の資料 2 件である。

第 1 次世界大戦中の 1915 年春、オランダ・ハーグにおいて、平和をもとめる女性たちによる国際会議が開かれた。その後、INTERNATIONAL CONGRESS OF WOMEN (のちの婦人国際平和自由連盟 WILPF) 事務局書記クリスタル・マクミランは、「次は日本からも 5 人の女性代表を出してほしい」という内容の書簡数通を日本に向け発送したとされる<sup>\*</sup>。その中の 1 通、成瀬校長宛てのものが、このたび当館未整理資料から発見された【資料①】。WILPF と日本が結びつきかけとなった書簡であり、存在自体は知られていたが、所在は長く不明であった。さらにハーグ国際女性会議の報告書 2 点 (どちらも印刷物、1 枚のプリント形式【資料②】のものとは 14 ページの冊子【資料③】)、執筆者不明の同会議に関する文書 2 点【資料④・⑤】、桜楓会原稿用紙に書かれた、やはり執筆者不明の「婦人萬国大會」なるタイトルの原稿【資料⑥】、加えて、書簡を「確かに受け取った」とする、成瀬からマクミランに宛てた返信の草稿【資料⑦】が相次いで発見された。

また同じく WILPF 関連として、上代タノ未整理資料からも新たな発見があった。ジェーン・アダムスが上代に宛てた書簡 3 点【資料⑧・⑨・⑩】、上代を WILPF ヨーロッパ各支部に紹介する書簡 1 点【資料⑪】である。上代に対しては 1923 年の訪日の際の礼を述べ、国際会議への参加を促し、各支部に対しては、ヨーロッパに向かう上代への支援を依頼する内容が記されており、⑨の書簡には WILPF のサーキュレーション【資料⑫】も同封されている。

以下、すべての資料を写真で、①・⑥～⑪については翻刻を加えて紹介する。

<sup>\*</sup>杉森 長子「上代タノと平和運動」(『上代タノ 女子高等教育・平和運動のパイオニア』日本女子大学叢書 8 2010 年)

展示の記録（二〇一八年度）

●成瀬記念館（目白）

シリーズ「天職に生きる」  
日本女子大学家政学部のおゆみ

2018.4.10(火)  
～6.2(土)



桜楓家政館

一八九四（明治二七）年にアメリカ留学から帰国した成瀬は、著書『女子教育』において、家庭で大きな役割を担う女子が家政学を研究することが必要であると述べるなど、家政という学問を非常に重要だと考えていた。そこで、一九〇一（明治三四）年に本学が開校すると、成瀬は未だ発展段階にあった家政学の未来を井上秀（家政学部一回

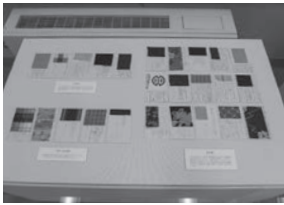
生）に託すのである。

井上は渡米し家政学や栄養学等を学び、帰国後は本学教授として家政学の発展に努め、後に第四代校長に就任した。そして井上の跡を継いだ第五代学長 大橋 広のもと、本学は新大学令による大学家政学部設置第一号となっている。

●考現学の視点  
昭和の暮らしの具体相

—今和次郎に師事した小林孝子の卒業論文と衣服標本—

5.8(火)  
～6.23(土)



展示室の様子

一九三六年に本学家政学部を卒業した小林孝子は、当時、考現学を提唱していた本学非常勤講師今和次郎の指導を受け、卒業論文として「考現学より見たる一家庭」を提出した。これは自分の家にあるモノをすべて描き出すという考現学的手法を用いた自家調査であった。本展では、小林の卒業後の自主研究である衣服標本



展示室の様子

小林家全員（祖母、両親、本人、女中）の衣服を調査したものである。

軽井沢夏季寮の生活  
—日本女子大学の音楽

目白  
6.8(金)～  
8.4(土)  
8/9.16.23.30  
西生田  
5.29(火)～  
8.3(金)

本学の夏季寮「三泉寮」の歴史を紹介するシリーズ展示。今回は「音楽」に注目した。



一宮道子

創立以来、本学ではあらゆる行事に際して曲がつくられ、歌われてきた。それは軽井沢におい

でも同様であり、一九一七(大正六)年に学生が発案した「山響(やまびこ)」、一九四四(昭和一九)年の三泉寮への学童集団疎開時につくられた「学寮あしたの歌/ゆうべの歌」は、現在に伝わり「学園の歌」となっている。

本展では、一宮道子の編曲による「山響」の主旋律が、一九一七年の三泉寮生活中に成瀬と一宮によって選ばれた讚美歌「YOUR MISSION」であることなどを紹介した。

●日本女子大学図書館  
VERITAS VIA VITAE、は永遠に

9.15(土)  
~12.20(木)

本学は創立当初から図書室はあったものの、本格的な図書館の始まりは、本学創立から五年後の一九〇六年(明治三九)に森村豊明会の援助により建設された総煉瓦造りの豊明図書館であった。しかし豊明図書館は関東大震災により甚大な損害を受け、その後本学の図書館機能は校内を転々とする事になる。次に図書館建設の声をあげたのは、第六代学長上代タノであった。成瀬の教えを受けた上代は早くから図書館の重要



図書館(増築前)1965年2月

に幕を閉じた。

性を認識しており、一九六四(昭和三九)年に図書館が完成した。多くの学生に愛されたこの図書館は、二〇一九(平成三〇)年三月にその歴史

●哀惜の一九一九年

—成瀬仁蔵・広岡浅子・森村市左衛門・松浦政泰・平野浜 没後一〇〇年展

2019.1.15(火)  
~3.2(土)

創立者成瀬仁蔵はじめ、本学の草創期を支えた五人の人物が相次いで亡くなった一九一九年。各々の人物について、本学との関わりを中心に紹介した展示。成瀬についての展示は、病床に就き、最期を迎えるまでをどのように過ごしたかに焦点を当て、

仕事上の秘書、仁科節が師の病床での様子を綴った日記をはじめ、見舞いに訪れた人や見舞いの品を記録した日誌、友人・知人からの書簡、故郷の知人に宛てた成瀬絶筆の書簡等を紹介した。また、新たに発見された領収書から、体調を崩した後も書道用紙や筆を頻りに購入し、最後まで揮毫を続けた成瀬の姿、逝去当日に近隣の呉服屋からさらしや絹地を取り寄せ、急ぎ葬儀用の装束を整えた教え子らの姿が浮かび上がった。



展示室の様子



新たに発見された領収書から、体調を崩した後も書道用紙や筆を頻りに購入し、最後まで揮毫を続けた成瀬の姿、逝去当日に近隣の呉服屋からさらしや絹地を取り寄せ、急ぎ葬儀用の装束を整えた教え子らの姿が浮かび上がった。

シリーズ「天職に生きる」

—通信教育—

4.10(火)  
～5.18(金)

本学の通信教育の歴史は古く、明治時代に遡る。

一九〇八(明治四一)年四月の卒業式において、成瀬は「終生学問研究を続けて知識を養ひ品性修養につとめ」ることが大切であると語り、卒業生に生涯学び進歩し続けることを求めた。その後、一九〇九(明治四二)年には『女子大学講義』を発売し、こ



武藤静子先生の小児栄養学 1963(昭和38)年

に本学の通信教育が始まった。一九四八(昭和二三)年四月に日本女子大学(新制)が発足すると、翌年一月には『女子大学講義』に始まる伝統を継承、発展させた通信教

育部が開講した。本学の通信教育は、明治以来の女子教育の伝統を受け継ぎながら、時代の変化に対応しつつ、現在に至るまで多くの卒業生を送り出している。

### 日本女子大学の災害支援

9.21(金)～  
12.20(木)

総合研究所研究課題58と連動して、日本



展示室の様子

女子大学の災害支援に焦点を当てた展示。一九二二(大正一一)年の関東大震災では、卒業生団体校楓会と大学部・附属高等学校の生徒が、

それまでの社会貢献の経験を生かして上野公園の児童救護所や救援衣料の消毒、仕分け、東京市社会局の依頼による世帯調査などの奉仕をした。展示では当時の写真や記録、損壊した豊明図書館兼講堂(現成瀬記念講堂)の煉瓦などを紹介した。

二〇一一年の東日本大震災については桜楓会や卒業生個人、大学の研究室や学生有志が取り組んだ支援活動を取り上げた。

### 日本女子大学のおひなさま展

2019.1.22(火)  
～3.1(金)

恒例の「おひなさま」展では、かつて本学の学寮や卒業生宅で飾られた明治、大正、昭和の雛人形をご覧いただきたい。七段飾り三台、児童文学者安房直子氏寄贈の日本人形、附属校園の文集、楓寮日誌を展示した。楓寮日誌からは、寮生が特別な献立から節句を感じ取る様子など、寮の和やかな「三月三日」がうかがわれる。一九六六(昭和四一)年に西生田校地に建てられた楓寮は、本年三月に閉寮し、展示に訪れた元



展示室の様子

寮生が学生時代を懐かしむ様子が見られます。

二〇一八年度活動の記録

- 4・2 「新任教員の集い」参加者見学、主事説明
- 4・3 西生田記念室、大学入学式につき開室、見学者62名
- 4・10 展示オープン（目白・西生田）
- 4・20 西生田記念室、創立記念式典につき開室、見学者59名
- 4・26 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）58名、教員6名見学、説明
- 5・7 附属中学校1年生募参240名、教員14名見学。分館も
- 5・8 ミニ展示オープン（目白会議室）
- 5・10 文京区ガイド会22名、千葉こまくさハイキングクラブ15名見学。授業で分館見学（葉袋先生）19名、教員1名見学
- 5・12（土）銃砲一斉検査。泉会総会につき延長開館、見学者63名
- 5・17 オープンキャンパスの学生スタッフ30名見学
- 5・19 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）5名、教員1名見学、説明
- 5・24 日本建築学会15名、分館見学
- 5・26（土）（27（日））日本家政学会第70回大会のため特別開館288名、分館は222名見学
- 5・29 展示オープン（西生田）
- 5・31 附属中学校PTA（目白キャンパス班）「目白キャンパスめぐり」の下見のため6名見学、説明（分館も）。全国大学史資料協議会東日本部会2018年度総会及び30周年記念講演会に参加（杉崎 於国学院大学）
- 6・1 入学課から依頼の大学見学の高校生（2校）58名、教員4名見学、説明
- 6・4 展示のため野村胡堂・あらえびす記念館に資料貸出し（9/5返却）
- 6・8 展示オープン（目白）。入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）17名、教員1名見学、説明
- 6・12 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）36名見学、説明。2018年度全体研修（基本研修）参加（岸本・杉崎）
- 6・13 東京修復保存センター、大型地図の修復やり直しのため引き取り
- 6・14 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）21名、教員1名見学、説明。株式会社東京光音にオープンリールのデジタル化を依頼（7/5納品）
- 6・16（土）西生田記念室、附属中学校オープンスクールのため特別開室、見学者6名
- 6・17（日）「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者280名、分館284名見学、分館にくまもん来館
- 6・18 成瀬記念館運営委員会（本年度第1回）。Preservation Technologies Japan 脱酸のため資料点検作業
- 6・19 Preservation Technologies Japan 脱酸のため資料点検及び搬出作業（9/27納品）。2018（平成30）年度グローバルワーク研修（基本研修）参加（杉崎）（6/26 7/3 7/13）
- 6・20 国際マイクロ写真工業社、デジタル化のためスライド引き取り（7/12納品）
- 6・22 文京ミュージズネット全体会議出席（杉崎）
- 6・23 創立者成瀬仁蔵生誕記念日のため延長開館28名、分館は31名見学
- 6・26 入学課から依頼の大学見学の高校生

- 生(1校) 15名、教員1名見学、説明
- 7・2 第110回全国大学史資料協議会  
東日本部会研究会に参加(岸本 於東京  
藝術大学)
- 9・22(土) 成瀬記念講堂耐震改修工事落  
成式のため延長開館18名見学
- 6・28 入学課から依頼の大学見学のPT  
A(1校) 43名見学、説明。『成瀬記念  
館利用案内』(3千部) 納品
- 9・27 『実践倫理講話筆記』納品
- 7・3 ミニ展示「日本女子大学合唱団」  
オープン(目白会議室)
- 8・5(日)「オープンキャンパス」のた  
め特別開館、見学者183名、分館11  
3名見学
- 10・3 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(1校) 27名、教員2名見学、説明
- 7・4 附属豊明小学校6年生117名、  
軽井沢見学
- 8・7 本年度当館受入れ予定の博物館実  
習生3名に事前指導
- 10・4 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(2校) 68名、教員1名見学、説明。
- 7・9 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(3校) 104名見学、説明。『成瀬  
記念館2018 No.33』(2千部) 納品
- 8・28 BS朝日「百年名家」分館撮影、  
11月11日放送
- 10・6(土)〜7日(日) 西生田記念室、  
十月祭につき特別開室、見学者合計33名
- 7・11 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(1校) 35名見学、説明
- 8・28〜9・4 博物館実習(日本文学科  
1名、史学科1名、科目等履修生1名)
- 10・10〜12 全国大学史資料協議会201  
8年度総会ならびに全国研究会に参加  
(岸本・杉崎、於九州大学)
- 7・12 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(1校) 19名、教員1名見学、説明。
- 9・8(土) 附属豊明幼稚園入園志願者説  
明会・附属中高説明会につき特別開館、  
見学者237名
- 10・12 入学課から依頼の大学見学の高  
校生(1校) 37名、教員2名見学、説明
- 文化庁広報誌「ぶんかる」取材(分館も)
- 9・11 消防設備点検(分館)
- 10・16 BS朝日「百年名家」追加撮影
- 7・17 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(2校) 36名見学、説明
- 9・13 附属中学校生徒有志27名、教員4  
名、分館見学
- 10・17 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(3校) 77名、教員4名見学、説明
- 7・19 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(1校) 27名見学、説明
- 9・15 展示オープン(目白)
- 10・18 附属中学校PTA「目白キャンパ  
スめぐり」122名見学、説明(分館も)
- 7・22(日) 西生田記念室、「オープンキャ  
ンパス」のため特別開館、「オープンキャ  
ンパス」のため特別開館、「オープンキャ  
ンパス」のため特別開館、見学者294名、分館26  
4名見学
- 9・16(日)「オープンキャンパス」のた  
め特別開館、見学者294名、分館26  
4名見学
- 10・19 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(1校) 7名見学、説明
- 7・26 授業で分館見学(伊藤先生) 16名、  
教員1名見学
- 9・18 成瀬記念講堂のパンフレット(2  
千部) 納品。文京区郷土史研究会18名、  
分館見学
- 10・20(土)〜21(日) 目白祭につき平常



- 通り開館、見学者合計662名、分館593名。西生田記念室、日女祭につき平常通り開室、見学者合計54名
- 10・22 展示のため専修大学に資料貸し出し(11/28まで)
- 10・23 西生田記念室、入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 34名見学、説明
- 10・24 入学課から依頼の大学見学の高校生(3校) 58名、教員4名見学、説明。是澤先生の授業で92名、教員2名が分館見学
- 10・25 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 17名、教員2名見学、説明
- 10・27(土)成瀬仁蔵とその時代研究会12名、成瀬記念館会議室の展示(獨協大学附属高等学校教諭小林氏所蔵の資料)見学
- 10・27(土) 28(日) 西生田記念室、もみじ祭につき特別開室、見学者合計35名
- 10・30 入学課から依頼の大学見学の高校生(3校) 41名、教員5名見学、説明
- 11・1 防災訓練。入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 10名見学、説明。桜楓会中野支部15名が分館見学
- 11・2 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 18名、教員2名見学、説明。山口都先生、分館絵葉書の原画制作のためスケッチ(11/15・11/29も)
- 11・8 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校) 31名、教員2名見学、説明
- 11・12 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 5名見学、説明
- 11・10 西生田記念室、附属高等学校説明会のため特別開室、見学者1名
- 11・17 西生田記念室、附属中学校説明会のため特別開室、見学者0名
- 11・19 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 8名見学
- 11・27 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 29名、教員2名見学、説明
- 11・28 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校) 18名、教員2名見学、説明
- 12・5 青木生子先生追悼展のため資料借用(1/16返却)
- 12・8(土)「入試相談会」のため延長開館、見学者38名
- 12・13 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 41名、教員1名見学
- 12・14 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 14名、教員1名見学、説明。
- 西生田成瀬講堂運用委員会に出席(岸本)
- 12・15 家政学部学術交流企画 通信教育課程創設70周年記念シンポジウム開催のため延長開館、見学者21名、分館は特別開館、30名見学
- 12・18 20 故青木生子元学長・理事長追悼展示(会議室)
- 12・21 博物館実習生2名受入
- 12・26 故青木生子元学長・理事長 大学葬のため特別開館238名見学
- 1・11 分館消防点検
- 1・15 展示オープン(目白)
- 1・17 博物館実習生2名受入(西生田記念室)。展示のため福井県ふるさと文学館に資料貸出(4/17返却)
- 1・21 博物館実習の授業で11名、教員1名見学(分館も)
- 1・22 展示オープン(西生田)
- 1・23 小石川消防署、分館査察
- 1・25 東京MXテレビ分館撮影、渋沢栄一と本学との関係について取材(2/17放送)
- 1・26(土) 西生田記念室、附属豊明小学校音楽会(於西生田成瀬講堂)につき特別開室、見学者55名

1・28 『写真で見る成瀬仁蔵その生涯』(2千部) 納品

2・11・3 入試期間中11時より14時の間、受験生付添者見学につき特別開館、見学者合計56名

2・16 西生田記念室、附属中学校新入生保護者会のため特別開室、見学者13名

2・28 附属豊明小学校3年生113名、教員6名見学(分館も)。(株)浦辺設計、『生涯110年 建築家・浦辺鎮太郎の仕事―倉敷から世界へ、工芸からまちづくりへ―』展のため館内撮影(3/2は外観撮影)

3・4 創立者命日につき特別開館、見学者31名

3・6 東京修復保存センター、修復のため資料搬出(3/20返却)

3・8 成瀬記念館分館リーフレット(1千部) 納品

3・12 豊明小学校5年生1クラス見学(分館も) 3・14は2クラス見学)

3・20 西生田記念室、大学卒業式のため特別開室、見学者81名

3・22 入学課から依頼の大学見学の高校生PTA6名見学

3・24(土)「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者96名

## 二〇一八年度の成瀬記念館運営委員

大場昌子館長(学長代行)、堀越榮子家政学部長、高野晴代文学部長/附属幼・小担当理事、小山聡子人間社会学部長/附属中・高担当理事、濱部勝理学部長、定行まり子家政学部通信教育課程長、増田幸弘教養特別講義1委員会委員長、伊ヶ崎大理解養特別講義2委員会委員長、白杵陽図書館長、多屋淑子総合研究所所長、大沢真知子現代女性キャリア研究所所長、坂本清恵生涯学習センター所長、蟻川芳子桜楓会理事長、今井康雄成瀬記念館担当理事、古川元也成瀬記念館主事

## 二〇一八年度成瀬記念館構成メンバー

館長・大場昌子、主事・古川元也、館員・岸本美香子(主任)、杉崎友美、非常勤・大門泰子、大橋有希子、加藤きよみ、小林芳子・永山由里絵、宮内量子、山本文子

## 博物館実習

2018年度の博物館実習(第29回)は、8月28日(火)から9月4日(火)までの6日間の日程で行った。実習生は日本文学科1名、史学科1名、科目等履修生1名。

実習生は、初日に雑司ヶ谷公園と雑司が谷旧宣教師館、成瀬記念講堂と成瀬記念館分館を見学し、地域と大学の歴史について学んだ。その後、成瀬記念館の収蔵資料や活動状況について説明を受け、企画展「日本女子大学の図書館―VERITAS VIA VITAE―は永遠に」展の準備に参加し、図書館を紹介する解説パネルを一人一枚作成した。

このほか、西生田記念室ではキャンパスの歴史を学ぶとともに、企画展「日本女子大学の災害支援」展の展示作業等、学芸員の基本的な業務を体験した。

また、この3名とは別に他機関で博物館実習を行った学生のうち、実習期間が不足している学生4名を受け入れた。12月21日・2019年1月17日に各2名ずつの実習を行い、実習生は目白と西生田

において資料整理や展示準備等の一部を体験した。

### 業務統計

開館日数	目白	203日
	西生田	151日
入館者数	分館	33日
	目白	約7750人
	西生田	約1850人
	分館	訳2200人

出版・映像のための資料提供  
(広報課扱い含む)

86件  
21件

### その他

- 『成瀬記念館2018 No.33』の発行  
2千部
- 『写真で見る 成瀬仁蔵その生涯』の増刷  
2千部
- 西生田記念室利用案内の増刷  
1千部
- 成瀬記念館展示のご案内(2019年度)  
の制作  
1千部

- 広岡浅子『草詠』発行(翰林書房)
- 博物館実習生受入れ(7名)

○研修等参加(研究会…全国大学史資料協議会2018年度総会ならびに全国研究会、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会および研修会に参加 その他…文京ミュージズネット、展示見学など)  
資料の収集・整理・保存・媒体変換

### 二〇一八年度展示一覧

#### 〔成瀬記念館〕

4・10～6・2  
シリーズ「天職に生きる」

—日本女子大学家政学部のあゆみ

～ミニ展示～

5・8～6・23

考現学の視点

昭和の暮らしの具体相

—今和次郎に師事した小林孝子の

卒業論文と衣服標本

6・8～8・4、8/9・16・23・30

軽井沢夏季寮の生活

—日本女子大学の音楽

9・15～12・20

日本女子大学図書館

—「VERTAS VIA VITAE」は永遠に

1・15～3・2

哀惜の1919年

—成瀬仁蔵・広岡浅子・森村市左衛門・

松浦政泰・平野浜 没後100年展

#### 〔西生田記念室〕

4・10～5・18

シリーズ「天職に生きる」

—通信教育

5・29～8・3

軽井沢夏季寮の生活

—日本女子大学の音楽

9・21～12・20

日本女子大学の災害支援

1・22～3・1

日本女子大学のおひなさま展

## ■成瀬記念館より

成瀬仁蔵先生没後百年を迎え、『成瀬仁蔵関係書簡集』第一巻刊行事業の原資には、成瀬記念館に対する指定寄附が充てられている。指定寄附は、使用目的を限定した用途に充てる寄附であり、成瀬記念館の事業に対して、これまでも多くの寄附をいただいている。主事として、この場を借りて御礼申し上げたい。

記念館には、成瀬先生直筆の三綱領原本をはじめ、書簡類など建学の精神を今に伝える多くの貴重な資料が保管されている。今後は、これらの資料を万全の体制で次代に引き継ぐべく、保管環境の向上にむけて一層の努力をし、資料の閲覧公開にも、この寄附を積極的に活用していく予定である。

そのためのささやかな第一歩として、昨年度末、本学HP成瀬記念館のページに「寄附のご案内」ボタンを設定した。現状では、ここから寄附全般の頁につながる仕組みだが、将来的には多くの方にカチッとクリック指定寄附のご支援をいただき、事業に活かすしくみづくりを目指したい。(古川)

成瀬が没した一九一九年、本学創立発起人の一人で評議員でもあった広岡浅子も眠した。近年広岡家で浅子自筆の和歌草稿が発見され、浅子の曾孫である広岡和治様のご厚意により、本学日本文学科に研究の機会をいただいた。その成果が高野晴代監修『広岡浅子「草詠」(翰林書房)』である。本学所縁の歌も多く詠まれている。(岸本)

昨秋から作業していた『成瀬仁蔵関係書簡集1』が刊行された。正直なところ、しばらく書簡集作りは御免蒙りたいところだが、少し休んだら二巻目の準備を始めなくては。翻刻・監修の先生を他の仕事にとられないように捕まえておかないといけない。両先生、絶対離しませんので次巻もよろしくお願い致します。(杉崎)

成瀬記念館は築三四年。経年により、少しずつさまざまな箇所には支障が出てきた。同世代の私は昨年度末(三月)で記念館をお暇することとなったが、これからもお互いに元気でいられたらと思う。最後に、記念館職員の皆さまには職場の、且つ大学の後輩として多くを学ばせていただいた。この場でも御礼を申し上げます。(永山)

## 成瀬記念館 2019 No. 34

二〇一九年七月一六日

編集・発行

日本女子大学成瀬記念館

〒112-8681

東京都文京区目白台一―八―一

電話(〇三) 五九八―一三三七六

FAX(〇三) 五九八―一三三七八

印刷 開成出版株式会社

〒101-0052

東京都千代田区神田小川町

三一三六一四

# 資料寄贈の お願い

成瀬記念館では、学園史資料のご寄贈を  
お願いしております。手放しても良いと思われる  
資料がございましたら、ご一報ください。

- ・卒業アルバム 旧制日本女子大(全回生)  
附属高等女学校(全回生)  
新制日本女子大学(1950～1962)  
附属高等学校(1948～1995)  
附属中学校(1948～1954)  
附属豊明小学校  
附属豊明幼稚園
- ・本学関係の写真
- ・卒業証書
- ・校章、バッジ類
- ・記念品
- ・学生証、生徒手帳
- ・夏季寮のしおり、遠足・修学旅行等のしおり
- ・行事のプログラム(運動会・音楽会・入学式・卒業式等)
- ・実践倫理ノート
- ・講義にまつわるノートや制作物
- ・各種名簿
- ・自治活動にまつわる資料(学園祭・自治委員会等)
- ・制服
- ・学寮の記録、物品等
- ・附属機関の記録、物品等
- ・その他事務文書、物品等
- ・成瀬仁蔵関係資料

本学と関係のないものはお引き受けできませんが、迷われた場合はお気軽にご相談ください。

☎ 03-5981-3376

✉ [kinenkan@atlas.jwu.ac.jp](mailto:kinenkan@atlas.jwu.ac.jp)





日本女子大学  
成瀬記念館